

大智ある彼の諸菩薩は 一切恭敬せられたり。
 (一〇) 或は千の眷屬あり 又は百あり又五十、
 たごひ百劫を経るごとも 彼等の數は知り難し。
 (一一) 或は二十 或は十 又五四三二ご次第せる、
 勇者の眷屬ましまして 彼等の數は知り難し。
 (一二) 或は單身に歩みつゝ 獨り寂靜を悟りたる、
 數もしられぬ諸菩薩は 今しも此に集まれり。
 (一三) たごひ杖をば手にしつゝ 恒河の沙なす劫を経て、
 數へむとする人あるも 其邊際は知り難し。
 (一四) 大身にして精進ある 彼の守護者なる一切の、
 菩薩勇者はいづくより 來り集りたまへるや。
 (一五) 誰かは彼に法説きし 誰か菩提を得しめたる、
 誰の教を欲せしや 誰の教を保ちしや。
 (一六) 普ねく四の方處より 一切大地を破りつゝ、

大智神力具へたる 彼等賢者は出でたまふ。
 (一七) 牟尼よあらゆる處より 此世界みな開裂し、
 彼の賢者なる諸菩薩は 出現しつゝまませり。
 (一八) かくの如きの何物も 我等は曾て見ざるなり、
 世尊よ我等に告げたまへ 此世界の名何なるぞ。
 (一九) 我等普ねく十方を 度を重ねて經めぐりぬ、
 されどもかゝる諸菩薩は 曾て見ざりしごころなり。
 (二〇) 我等は汝の族類の ひごりをだにも見ざりしを、
 今しも忽ち現じたり 牟尼よ行蹟を告げたまへ。
 (二一) 幾千幾百さては又 幾那由他なる菩薩たち、
 一切奇異の思にて 兩足尊を瞻仰す。
 (二二) 繫縛を免れ類なき 大勇者乞ふ告げたまへ、
 勇猛無畏の諸菩薩は いづくより來りたまひしか。
 其の時、俱胝那由他百千の他の世界より來集したりし諸

分身諸佛。從無量千萬億。住方國土來者。在於八方。諸寶樹下。師子座上。結跏趺坐。其佛侍者。各各見。是菩薩大衆。於三千大千世界四方。從地涌出。住於虛空。各自其佛言。世尊。此諸無量無邊阿僧祇。菩薩大衆。從何所來。爾時諸佛。各告侍者。諸善男子。且待須臾。有菩薩摩訶薩。名曰彌勒。釋迦牟尼佛之所授記。次後作佛。已問斯事。佛今答之。汝等自當。因是得聞。

の如來應供正等覺者は世尊釋迦牟尼如來の化身にして他方の世界に於て有情に法を説き世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者の回りに八方の寶樹の根に於て寶師子座の上に結跏趺坐したり。彼等如來應供正等覺者の各自の從者も亦普わくの地に罅隙より湧出して虚空界に立てる大なる菩薩の群菩薩の衆を見て未曾有の想をなし各自の如來に白して曰く。『世尊よかく多くの無量無數なる菩薩摩訶薩は何處より來れるや』と。此の如く語られし時諸の如來應供正等覺者は彼等各自の從者に告げて曰く。『汝等諸善男子よ暫く待つべし彌勒 Maitreya と名くる菩薩摩訶薩ありて、釋迦牟尼世尊より無上なる正等覺に於て授記せられたり。彼は世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者に此義を請問せり。世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者はこれを解説したまふべし。其時汝等は聞くを得べし』と。

爾時釋迦牟尼佛。告彌勒菩薩。善哉善哉。阿逸多。乃能問佛。如是大事。汝等當共一心。被精進。發堅固意。如來今欲顯發宣示。諸佛智慧。諸佛自在神通之力。諸佛師子奮迅之力。諸佛威猛大勢之力。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。當精進一心。我欲說此事。勿得有疑悔。佛智叵思議。汝今出信力。住於忍善中。昔所未聞法。今皆當得聞。我今安慰汝。勿得懷疑懼。佛無不實語。智慧不可量。所得第一法。甚深叵分別。

其の時世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告げて曰く。『阿逸多よ、善き哉、善き哉。阿逸多よ、汝が請問せし此義廣大なり』と。又時に世尊は一切の菩薩の群に告げたまひき。『諸善男子よ、總て意を傾けよ、汝等一切の菩薩の群よ堅固なる力を具せよ、諸善男子、今しも如來應供正等覺者は如來の智見、如來の神通、如來の行業、如來の遊戲、如來の嘖呻、如來の勢力を開示せんとするなり』と。

- (三) 諸善男子よ意を注げ われこの誠實の語を説かむ、賢者よ論議をなす勿れ 如來の智慧は不思議なり。
- (四) 一切堅固に正念なれ 一切定心に住すべし、げに諸如來の希有とする 未曾有法を今聞かむ。
- (五) 一切疑ふことなかれ われ汝等を策勵す、導師なるわれ誠實を 語りてその智數限なし。

爾時世尊。說是偈已。告彌勒菩薩。我今於此大眾。宣告汝等。阿逸多。是諸大菩薩摩訶薩。無量無數。阿僧祇。從地涌出。汝等昔所未見者。我於是娑婆世界。得阿耨多羅三藐三菩提已。教化示導。是諸菩薩。調伏其心。令發道意。此諸菩薩。皆於是娑婆世界之下。此界虛空中住。於諸經典。讀誦通利。思惟分別。正憶念。阿逸多。是諸善男

子等。不樂在衆。多有所說。常樂靜處。勤行精進。未曾休息。亦不依止。人天而住。常樂深智。無有障礙。亦常樂於諸佛之法。一心精進。求無上慧。
爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
阿逸汝當知 是諸大菩薩
從無數劫來 修習佛智慧
悉是我所化 令發大道心
此等是我子 依止是世界
常行頭陀事 志樂於靜處
捨大眾讚聞 不樂多所說
如是諸子等 學習我道法
晝夜常精進 爲求佛道故
在娑婆世界 下方空中住
志念力堅固 常勤求智慧
說種種妙法 其心無所畏

三六 善逝はたひの覺れる深法は 論議測量及ばじな、
今われそれ等の法説かむ 聞けやいづれかいかにかを。
時に世尊は此偈を説き了りて、彌勒菩薩に告げたまひき。
『阿逸多よ、我汝に曰ふ、我汝に告ぐ、阿逸多よ、汝等の會て見ざりし今しも地の罅隙より出現せしこの無量無數不思議無比無算の菩薩摩訶薩此にあり。阿逸多よ、是等の諸の菩薩摩訶薩はわれに依て此娑婆世界にありて無上なる正等覺を證し、誘導せられ、策勵せられ、悅可せられ、無上なる正等覺に歸向せり。又諸の善男子よ、彼等は、我に依て此菩薩の法を成熟し、建立し、決定し、教導し、證入し、解了し、説示せり。又阿逸多よ、彼等菩薩摩訶薩は此娑婆世界に於て下方虛空界住處に住せり。彼等諸善男子は讀誦解説の心あり。全分これを憶念するに專注し、世間に樂着することなく、俗界と交はることを樂まず、安逸をむさばらず、精進なることを得

たり。阿逸多よ、かれら諸善男子は靜閑を愛し、靜閑を樂めり。かれら諸善男子は人天の近接せるところに住せず、俗界の行を好まず。かれら諸善男子は法を愛樂し、佛智を求む。』

- 其の時世尊は此等の伽陀を説て曰く。
- 三七 無量なるこの菩薩たち 思ひも及ばずはかりなく、神通と智と聞を具し 多俱胝劫に慧を行す。
 - 三八 菩提のために一切を 誘化したるはわれなりき、住めるは又わが國土にて この菩薩等はわが子なり。
 - 三九 一切なべて練若の頭陀をなし 常に雜鬧の地をば避け、無礙行につくわが子等は 最上行に從へり。
 - 四〇 かれらは虛空界に住み 下方國土の勇者にて、無上菩提を得んために 日夜修行を怠らず。
 - 四一 一切なべて精進と念を得て 無量の智力に住したる、

我於伽耶城 菩提樹下坐
得成正覺 轉無上法輪
爾乃教化之 令初發道心
今皆住不退 悉當成佛
我今說實語 汝等一心信
我從久遠來 教化是等衆

爾時彌勒菩薩摩訶薩及無數諸菩薩等心生疑惑怪未曾有而作是念云何世尊於少時間教化如是無量無邊阿僧祇諸大菩薩令住阿耨多羅三藐三菩提即白佛言

世尊如來爲太子時出於釋宮去伽耶城不遠坐於道場得

智者として御法説きのぶる わが子はすべて輝けり。
(四) われもさかし伽耶城の 樹下に菩提を得てしより、
無上の法輪を轉じてぞ 一切を菩提に誘化しき。
(四) わがこのことば無漏なれば 聞きて一切は信すべし、
われかくむかし菩提を得 われのみぞ一切を誘化せし。

其時彌勒菩薩摩訶薩さかの多俱胝那由他百千の菩薩等は未曾有なる思ひをなし希有なる思ひをなし驚異の思ひをなしたり。乃ち思へらく。「かゝる刹那かゝる時分の間にかゝる無數の菩薩摩訶薩はいかにして無上なる正等覺に引導せられ誘化せらるゝことあらむ」と。時に彌勒菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く。

『世尊よ、如來の太子たりし時釋迦種族の城なる迦毘羅衛Kapilavastu を出で、無上なる正等覺を證せんがために迦耶城より遠からざる最勝道場の頂に行きしより、世尊よ、今

成阿耨多羅三藐三菩提。從是已來。始過四十餘年。世尊云何。於此少時。大作佛事。以佛勢力。以佛功德。教化如是無量大菩薩衆。當成阿耨多羅三藐三菩提。世尊。此大菩薩衆。假使有人。於千萬億劫。數不能盡。不得其邊。斯等久遠已來。於無量無邊諸佛所。植諸善根。成就菩薩道。常修梵行。世尊。如此之事。世所難信。

譬如有人。色美髮黑。年二十五。指百歲人。言是我子。其百歲人。亦指年少。言是我父。生育我等。是事難

に至るまで四十餘年 satirekani catvāriṃśat-varṣāni を過ぎたる

のみ。世尊よ、如來は如何にしてかゝる時分の間に無量なる如來の作業、如來の神變、如來の勢力をなしたまふを得むや。世尊よ、この菩薩の群、菩薩の衆は、かゝる時分の間に無上なる正等覺に引導せられ誘化せらるべきや。世尊よ、この菩薩の群、菩薩の衆を數へて、百千俱胝那由他劫に至るも、その限量は得られざるなり。世尊よ、かくの如く無量にして、かくの如く無數なる菩薩摩訶薩は、久しきよりこのかた、梵行を行じ、多百千の諸佛のところに善根を植ゑ、多百千俱胝劫にこれを成就せしなり。

『世尊よ、譬へば、人ありて、年少弱齡、漆黒の鬚髮ある壯夫にして、青春の氣力を具へ、年甫めて二十五ならむ。而るに、これは百歳の人々をその子なりと示して、かくの如く云はむ、「善家男子よ、かれらはわが子なり」と。而して又、かの百歳の

信。佛亦如是。得道已來。其實未久。而此大乘。諸菩薩等。已於無量千萬億劫。爲佛道故。勤行精進。善入出住。無量百千萬億三昧。得大神通。久修梵行。善能次第。習諸善法。巧於問答。人中之寶。一切世間。甚爲希有。今日世尊。方云得佛道時。初令發心。教化示導。令向阿耨多羅三藐三菩提。世尊得佛未久。乃能作此大功德事。我等雖復信佛。隨宜所說。佛所出言。未曾虛妄。佛所知者。皆悉通達。然諸

新發意菩薩。於佛滅後。若聞是語。或不信受。而起破法。罪業因緣。唯然世尊。願爲解說。除我等疑。及未來世。諸善男子。聞此事已。亦不生疑。

爾時彌勒菩薩。欲重宣此義。而說偈言
佛昔從釋種 出家近伽耶
坐於菩提樹 爾來尙未久
此諸佛子等 其數不可量
久已行佛道 住神通智力
善學菩薩道 不染世間法

人々も亦かくの如く云はむ、「これわれらの生みの父なり」と。世尊よ、この人の語るところは信じ得べきにあらず。世間は信じ難しとせむ。世尊よ、實にかくの如く如來應供正等覺者は無上なる正等覺を證してより、日未だ淺しとす。而るにこの數多き菩薩摩訶薩は多俱胝那由他百千劫に梵行を行じ、遠き往昔佛智に於て安立し、百千の三昧門に出入するに堪へ、大神通事に達し、大神道智慧の事を成就し、佛地に於て賢良に、如來の法に於て合議 *Samiti* をなすに堪へ、世間の希有未曾有なりとすると、大精進の勢力を得たり。而るに世尊は彼等に就きてかくの如く語りたまふ、「かれは當初よりわれに依りて菩薩地に引導せられ、勸進せられ、誘化せられ、歸向せしめられたり無上なる正等覺を證得せるわれによりて一切の精進と勢力はなされたるなり」と。されど世尊よ、如來は誠實の言をなしたたまふ

この如來の語をわれら如何にして信すべきや。世尊よ、如來は實に菩薩摩訶薩の道に入りて日なほ淺きものは疑惑を生せむこのことを知りたまはざるべからざるなり。かれは如來の滅後、この法門を聞きて、受けず、信せず、解せざるべし。世尊よ、かくて、かれらは法の衰頽すべき行業をなすに至らむ。故に世尊よ、われらのこの法に於て迷ふことなからむがために、又未來世に於て菩薩乘發趣者なる善家男子若くは善家女子の聞きて疑惑を生ずることなからむがために、希くはこの義を説きたまへ」と。

其時、彌勒菩薩摩訶薩は世尊に對してこれらの伽陀を説て曰く。
釋種の住處迦毘羅衛に 生れかしこに家を捨て、
伽耶城に菩提得てしより 時いく程もなし導師よ、
聖なる智者の大群は 多俱胝劫に行を積み、

如蓮華在水 從地而涌出
 皆起恭敬心 住於世尊前
 是事難思議 云何而可信
 佛得道甚近 所成就甚多
 願除衆疑 如實分別說
 譬如少壯人 年始二十五
 示人百歲子 髮白而面皺
 是等我所生 子亦說是父
 父少而子老 舉世所不信
 世尊亦如是 得道來甚近
 是諸菩薩等 志固無怯弱
 從無量劫來 而行菩薩道
 巧於難問答 其心無所畏
 忍辱心決定 端正有威德
 十方佛所讚 善能分別說
 不樂在人衆 常好在禪定
 爲求佛道故 於下空中住
 我等從佛聞 於此事無疑
 願佛爲未來 演說令開解

若有於此經 生疑不信者
 即當墮惡道 願今爲解說
 是無量菩薩 云何於少時
 教化令發心 而住不退地

從地涌出品第十四

- 神力ありて不動なり 學あり智力に達したり。
 (四) 蓮華の水に染まぬごと 今しも地を裂き集ひたる、
 佛子は一切合掌し 念あり尊敬せられたり。
 (五) この菩薩たち如何にして かゝる未曾有を信すべき、
 疑惑を斷じ因を説き この義を示したまふべし。
 (六) 譬へばこゝに人あらむ 壯夫年少髮黒く、
 齡は二十あまりにて 百歳の子らありとせむ。
 (七) 而も白髮を戴ける かれらもこれを父と呼ぶ、
 年少かゝる子ありとは 世尊よ信じ難きなり。
 (八) 世尊よ今亦解し難し これら賢なる菩薩らは、
 念ありて又智慧すぐれ 千俱胝劫を學びたり。
 (九) 堅固にして智慧明かに 一切愛すべく端正に、
 御法の決定に躊躇なく 諸世尊はみなほめたまふ。
 (十) 無礙行のため森に住み 虚空界の如く所著なく、

- 精進を知り善逝の 子として佛地を求めたり。
 (一) 世尊の滅後如何にして このこと信せらるべきや、
 まのあたり今聞くを得ば われらの疑惑よもあらじ。
 (二) 菩薩らをしてこの義をば 疑ひ惡趣に行かしめな、
 世尊よ授記せよ如何にして 菩薩らは誘化せられしか。

右聖妙法蓮華法門に於て菩薩從地涌出品第十四

妙法蓮華經第五

如來壽量品第十六

爾時佛告諸菩薩及一切大衆。諸善男子。汝等當信解。如來誠諦之語。復告大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。又復告諸大衆。汝等當信解。如來誠諦之語。是時菩薩大衆。彌勒爲首。合掌白佛言。世尊。唯願說之。我等當信受佛語。如是三白已。復言。唯願說之。我等當信受佛語。

如來壽量品第十五

如來壽量品第十五

三五二

其時世尊は一切菩薩の衆に告げて曰く、『善家男子よ、汝等われを信任せよ、誠實の語を語りたまふ如來に信頼せよ』再び世尊はかの菩薩らに告げて曰く、『善家男子よ、汝等われを信任せよ、誠實の語を語りたまふ如來に信頼せよ』三たび世尊はかの菩薩らに告げて告く、『善家男子よ、汝等われを信任せよ、誠實の語を語りたまふ如來に信頼せよ』。其時彌勒菩薩摩訶薩を上首とせる一切菩薩の衆は合掌を傾けて世尊に白して曰く、『世尊よ、この義を説きたまへ、善逝よ説きたまへ、われらは如來の説に信頼すべし』。再びかの一切菩薩の衆は世尊に白して曰く、『世尊よ、説きたまへ、われらは如來の説に信頼すべし』。三たびかの一切菩薩の衆は世尊に白して曰く、『世尊

よ、この義を説きたまへ、善逝よ説きたまへ、われらは如來の説に信頼すべし』と。

爾時世尊。知諸菩薩。三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來秘密神通之力。一切世間天人。及阿修羅。皆謂今釋迦牟尼佛。出釋氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成佛已來。無量無邊。百千萬億。那由佗劫。譬如五百千萬億。那由佗。阿僧祇。三千大千世界。假使有人。抹爲微塵。過於東方。五百千萬

如來壽量品第十五

三五三

其時世尊はかの菩薩らの三たびに至るまでも請ひ求めしことを知しめして、かの菩薩らに告げて曰く、『善家男子よ、さらば開け、善家男子よ、わが加持の力あることは天人阿修羅を含めること世間の知れるところなり。時に世尊釋迦牟尼如來は釋迦種族より出家し、伽耶と名づくる大城に於て最勝の道場の頂に行きて無上なる正等覺を證したまへり。かくの如きの觀をなすことなかれ。否善家男子よ、わが無上なる正等覺を證せしより多百千俱胝那由他劫なり。善家男子よ、譬へば五十俱胝那由他百千の世界の大地の極微あらむ。時に人ありて一極微塵を取り、東方に於て五十阿僧祇百千の世界を過ぎてその一極微塵を投下せむ。かくて百千俱胝那由他劫を経てその人はかの一切世

億。那由佗。阿僧祇國。乃下一塵。如是東行。盡是微塵。諸善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟。按計。知其數不。彌勒菩薩等。俱白佛言。世尊。是諸世界。無量無邊。非算數所知。亦非心力所及。一切聲聞。辟支佛。以無漏智。不能思惟。知其限數。我等住。阿惟越致地。於是事中。亦所不達。世尊。如是諸世界。無量無邊。

爾時佛告大菩薩

者。盡以爲塵。一塵一切。我成佛已來。復過於此。百千萬億。那由佗。阿僧祇劫。自從是來。我常在此。娑婆世界。說法教化。亦於餘處。百千萬億。那由佗。阿僧祇國。導利衆生。諸善男子。於是中間。我說然燈佛等。又復言。其入於涅槃。如是皆以方便分別。諸善男子。若有衆生。來至我所。我以佛眼。觀其信等。諸根利鈍。隨處應度。處處自說。名字不同。年紀大小。亦復現言。當入涅槃。又以種種方便。說微妙法。

界の大地界の極微を盡し、隨て一點を投下してかの大地界極微塵を一切東方に於て投下すこせむ。善家男子よ、如何に汝らは考ふるや、これらの世界は何人かよく思議し、測量し、比較し、限定するここを得べきや。かく語りたまひ、し時彌勒菩薩摩訶薩及び一切の菩薩の群菩薩の衆は世尊に白して曰く、『世尊よ、無數なり。これら世界は數ふべからず。心地を超越せり。世尊よ、一切の聲聞辟支佛の聖智を以てもよく思議し、測量し、比較し、限定すること能はざるなり。世尊よ、不退轉地に安立せる菩薩摩訶薩なるわれらだもなほ心境界はこの義に於て轉せざるなり。されば世尊よ、これらの世界はかくの如く無量なるべし』と。

かくの如く語りし時。世尊はかれら菩薩摩訶薩告げて曰く、『善家男子よ、われ汝に告ぐ、われ汝に云ふ、善家男子よ、かの人の極微塵を投下せし世界と投下せざりし世界とは、

(如何に多くとも)善家男子よ、百千俱胝那由他の一切の世界に於ても、わが無上なる正等覺を證せしより(經たるころ)の百千俱胝那由他劫に比すべき極微塵はなほ知られざるなり。善家男子よ、われこの娑婆世界と又他の百千俱胝那由他の世界に於て、有情に法を説きしより、われは錠光如來を首めこせる他の如來應供正等覺者を説けり。されど善家男子よ、これ實にかれらの如來應供正等覺者の滅度のために、善巧方便説法のために、かれらの變現はわれによりて化作せられしなり。又善家男子よ、如來は去々來々の種々なる有情の根智も精進力の量をも觀察して、處々に自の名號を現じ、又處々に自の滅度を現じ、かくて種々の法門によりて、種々に有情を満足せしめ給ふ。善家男子よ、如來はかしくこに善根少くして煩惱多く、種々の信解ある有情のためにかくの如く語りたまふなり。比丘よ、われ年少にして家

能令衆生發歡喜心。諸善男子。如來見諸衆生。樂於小法。德薄垢重者。爲是人說。我少出家。得阿耨多羅三藐三菩提。然我實成佛已來。久遠若斯。但以方便。教化衆生。令入佛道。作如是說。諸善男子。如來所演經典。皆爲度脫衆生。或說己身。或說他身。或示他身。或示己事。或示他事。諸所言說。皆實不虛。所以者何。如來如實知見。三界之相。無有生死。若退若出。亦無在世。及滅度者。非實非虛。非如

非異。不如三界。見於三界。如斯之事。如來明見。無有錯謬。以諸衆生。有種種性。種種欲。種種行。種種憶想。分別故。欲令生諸善根。以若干因緣。譬諭言辭。種種說法。所作佛事。未曾暫廢。如是我成佛已來。甚大久遠。壽命無量。阿僧祇劫。常住不滅。諸善男子。我本行菩薩道。所成壽命。今猶未盡。復倍上數。然今非實滅度。而便唱言。當取滅度。如來以是方便。教化衆生。所以者何。若佛久住於世。薄德之

を出でたり。比丘よ、われ無上なる正等覺を證してより未だ久しからず」と。されど善家男子よ、かくの如く久しき以前に證を得たりし如來のかくの如く證を得しより未だ久しからずと示現したまへるは他なし。有情の調熟のために佛道に入れしめむがために、この法門は説かれたるなり。善家男子よ、一切かれらの法門は如來によりて有情の調御のために説かれたり。善家男子よ、如來の自の示現他の示現、自の所縁、他の所縁を以て説ける有情の調御のための如來の語も、如來の示現せる如何なるものも如來の説きたまへるかれら一切の法門は眞實なり。如來について虚妄の語はあることなし。その故は如何。如來は三界を生せず、死せず、虚ならず、現出せず、遷轉せず、滅度せず、有ならず、無ならず、實在にあらす、非實在にあらす、如にあらす、その他にもあらす、虚偽にあらす、非虚偽にあらす、その他にもあらす、

實の如く觀じたまへり。如來は凡夫異生の現前法を見るが如く三界を觀じたまはず。如來の世界を觀じたまふや、法として隠れたるものなし。かしこに如來の説きたまふ如何なる語も眞實にして虚妄ならず、その他にもあらす、されど種々の行、種々の樂欲、妄想行ある有情に善根を生長せしめんがために、種々の法門種々の所縁を示現したまへるなり。されば善家男子よ、如來は如來のまさに爲すべきことをなしたまふなり。かくの如く久しき以前に證を得たまへる如來はその壽量無量なり。如來は滅度したまふことなければ、調御のために滅度を示現したまふ。善家男子よ、われはなほ今日に至るまで往昔の菩薩の行を成就せず、壽量は未だ滿せざるなり。否善家男子よ、わが壽量の滿するに至るまでは、今日よりはなほ二倍の百千俱胝那由他劫あるべきなり。善家男子よ、今われ滅度すること無くし

原文更に「如にもあらす」の一句を加ふ

人。不種善根。貧窮下
賤。貪著五欲。入於憊
想。妄見網中。若見如
來。常在不滅。使起憊
恚。而懷厭意。不能生
於難遭之想。恭敬之
心。

是故如來。以方便
說。比丘當知。諸佛出
世。難可值遇。所以者
何。諸薄德人。過無量
百千萬億劫。或有見
佛。或不見者。以此事
故。我作是言。諸比丘。
如來難可得見。斯衆

生等。聞如是語。必當
生於難遭之想。心懷
戀慕。渴仰於佛。使種
善根。是故如來。雖不
實滅。而言滅度。又善
男子。諸佛如來。法皆
如是。爲度衆生。皆實
不虛。

譬如良醫。智慧聰
達。明練方藥。善治衆
病。其人多諸子息。若
十。二十。乃至百數。以
有事緣。遠至餘國。諸
子於後。飲佗毒藥。藥
發。悶亂。宛轉于地。是
時其父。還來歸家。詣

てかくの如く滅度を云ふその故は如何。善家男子よ、われ
はこれによりて有情を調熟せしめむとなり。極めて長き
間世にあるわれを常に見るときは、善根を修せず福徳薄く、
貧窮にして、慾に染着し、闇見の網に覆はれたる有情は如來
在すと知りて、兒戲をなす。Kilikaの想を生じ、如來に於て
遭ひ難しの想を生ずることなく、われらは如來の近きにあ
り(思ひ)て、三界に着せざらむがために、精進することなく、
如來に於て遭ひ難しの想を生ぜざるべし。

『故に善家男子よ、如來は善巧方便を以て、かれら有情に向
ひ、比丘よ、如來の出現は遭ひ難しとの語を説きたまへり。
蓋しかれら有情の如來に遭ふことは多百千俱胝那由他劫
にも有るや無きやを保せざるなり。故に善家男子よ、われ
この縁によりてかくの如く「比丘よ、如來の出現は遭ひ難
し」と語りしなり。かれらは次第に如來の出現に遭ひ難し

と知り、希有の想を生じ、憂患の想を生じ、如來應供正等覺者
を見ざるより、如來を拜見せんとして、渴望するに至るべし。
如來を所縁とせる想念より起れる善根は久しき間に義の
ため樂のために起るべし。如來はこの義を知りて、有情の
調御を生せんがために、滅度することなくして、而も滅度を
説きたまへり。善家男子よ、かくの如く説きたまふは、これ
如來の示したまふ法門なり。そこに如來について、虚妄の語
はあることなし。

『善家男子よ、譬へば醫師あらむ。賢にして慧あり。聰明
にして一切の病を療するに巧なりとせよ。その人に多く
の兒子あらむ。十、二十、三十、四十、五十、百、若くは百千ならむ。
かの醫師外に出でたらむに、かれら一切の兒子病に苦み、毒
に苦めりとせむ。かれらはその病若くは毒によりて、苦悶
に打たれ、その病若くは毒によりて、焼かれつゝ、地に倒れた

子飲毒。或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。善安穩歸。我等愚癡。誤服毒藥。願見救療。更賜壽命。父見子等。苦惱如是。依諸經方。求好藥。色香美味。皆悉具足。擗從和合。與子令服。而作是言。此大良藥。色香美味。皆悉具足。汝等可服。速除苦惱。無復衆患。其諸子中。不失心者。見此良藥。色香俱好。即便服之。病盡除愈。餘失心者。見其父來。雖亦歡喜。同訊。求索治病。然與其藥。而不肯

服。所以者何。毒氣深入。失本心故。於此好色香藥。而謂不美。父作是念。此子可惡。爲毒所中。心皆顛倒。雖見我喜。求索救療。如是好藥。而不肯服。我今當設方便。令服此藥。即作是言。汝等當知。我今衰老。死時已至。是好良藥。今留在此。汝可取服。勿憂不差。作是教已。復至佗國。遣使還告。汝父已死。是時諸子。聞父背喪。心大憂惱。而作是念。若父在者。慈愍我等。能見救護。今者捨我。遠喪佗國。自惟孤

りごせむ。時にかれらの父なる醫師はその兒子の病若くは毒によりて、苦悶に打たれたる時、外より歸り來れり。或ものは顛倒の想を生せり、或ものは不顛倒の想を有せり。されどすべて苦みに打たれたるからは父を見て禮をなして云はむ。父よ、折よくも平穩と安全にて歸りたまへるか。病にもあれ、毒にもあれ、われらを憐みより救ひたまへ。父よ、われらに生命を與へたまへ」と。その時かの醫師は苦みに打たれ、痛みに堪へず地に輾轉せる兒らを見て、こゝに色すぐれ、香すぐれ、味すぐれたる勝藥を取り、石に於てこれを碎き、かれら兒らに飲ましめむ。乃ち曰く。兒らよ、この色すぐれ、香すぐれ、味すぐれたる勝藥を飲め。汝ら兒らはこの勝藥を飲まば速かに病にもあれ、毒にもあれ、その(憐み)を離れて無病平安なるべし」と。かしこにその醫師の兒らのうち顛倒の想なきものは、その藥の色を見、香を嗅ぎ、味

を嘗めて、速かにこれを服せむ。而してそのために全く惱みを離るべし。されどかれら顛倒の想ある兒らはその父に禮をなしてかくの如く語らむ。『父よ、折よくも平穩安全にて歸りたまへるかな。汝われらを癒したまへ』と。かれらはこの語を語れども賦與せられたるその藥を飲まざるなり。その故は如何。顛倒の想のために、賦與せられたるその藥の色も香も味もかれらには喜ばれざるなり。その時かの醫師はかくの如く思はむ。わが兒らは病のため毒のために顛倒の想を有せり。かくてこの勝藥を飲まず、またわれに禮せざるなり。われこの兒らのために善巧方便を以てこの藥を飲ましむべしと。その時かの醫師は善巧方便を以て兒らに藥を飲ましめんと欲してかくの如く云はん。『善家男子よ、われは老いたり、衰耄せりわが終焉は近きにあり。されど汝兒ら悲しむ勿れ、喪心する勿れ、この勝藥

露。無復恃怙。常懷悲感。心遂醒悟。乃知此藥。色香味美。即取服之。毒病皆愈。其父聞子。悉已得差。尋便來歸。咸使見之。諸善男子。於意云何。頗有人能。說此真醫。虛妄罪不。不也。世尊。佛言。我亦如是。成佛已來。無量無邊。百千萬億。那由他。阿僧祇劫。爲衆生故。以方便力。言當滅度。亦無有能。如法說我。虛妄過者。

を作れり。汝らもしこれを欲せばこの藥を飲むべきなり』と。かくの如く善巧方便を以てかれら兒らに訓誡せし後、他郷の地に去らむ。かしこに行きてかの病める兒らをして死せりと思はしめむ。かれらはその時極めて悲み極めて歎かむ。『げに哀愍深きわれらの父なる導師なる生みの父は逝けり。今やわれらは導師なきに至りぬ』。時にかれらは導師なき身なるを知り、依るべき處なき身なるを知り絶わす悲に打たれむ。又この絶わす悲に打たるゝためにかれらの顛倒の想は不顛倒の想とならむ。又その色と香と味とを具足せるその藥を色と香と味とを具足せりと知るに至るべし。かくてその時かれらはその藥を服し、服しつゝ、惱みを離るべし。時にかの醫師はかれら兒らの惱を離れしを知りて、再び身を現せむが如し。』善家男子よ、汝ら如何にこれを思ふや。かの醫師の爲せる善巧方便を虚言

なりと強ふべきや。曰く『否然らず、世尊よ、否然らず、善逝よ』。曰く、『善家男子よ、われも亦かくの如し。無上なる正等覺を證せしより、無量無數那由他百千劫なり。されどわれ屢々有情を引導せんがために、かくの如き善巧方便を示せるなり。而も虚言はわがこの義に於て聊かもあることなし』と。

其時、世尊は尙多き量を以てこの義を示しつゝ、これらに伽陀を説て曰く。

- (一) 不思議千劫俱胝にも その量さらに知り難き、
むかしよりこの最上覺を得 常時にわれは法を説く、
- (二) われ菩薩らを誘ひて 佛智に安立せしめけり、
多俱胝那由他の有情をば 多俱胝劫にぞ調ふる、
- (三) 涅槃地を示し諸有情を 導かんとして方便を、
語れどわれは滅度せず この時こゝに法を説く

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。自我得佛來。所經諸劫數。無量百千萬。億載阿僧祇。常說法教化。無數億衆生。令入於佛道。爾來無量劫。爲度衆生故。方便現涅槃。而實不滅度。常注此說法。我常住於此。以諸神通力。令顛倒衆生。雖近而不見。衆見我滅度。廣供養舍利。

咸皆懷戀慕 而生渴仰心
 衆生既信伏 質直意柔輒
 一心欲見佛 不目惜身命
 時我及衆僧 俱出靈鷲山
 我時語衆生 常在此不滅
 以方便力故 現有滅不滅
 餘國有衆生 恭敬信樂者
 我復於彼中 爲說無上法
 汝等不聞此 但謂我滅度
 我見諸衆生 沒在於苦海
 故不爲現身 令其生渴仰
 因其心戀慕 乃出爲說法
 神通力如是 於阿僧祇劫
 常在靈鷲山 及餘諸住處
 衆生見劫盡 大火所燒時
 我此土安穩 天人常充滿
 園林諸堂閣 種種寶莊嚴
 寶樹多花果 衆生所遊樂
 諸天擊天鼓 常作衆伎樂

雨曼陀羅華 散佛及大衆
 我淨土不毀 而衆見燒盡
 憂怖諸苦惱 如是悉充滿
 是諸罪衆生 以惡業因緣
 過阿僧祇劫 不聞三寶名
 諸有修功德 柔和質直者
 則皆見我身 在此而說法
 或時爲此衆 說佛壽無量
 久乃見佛者 爲說佛難值
 我智力如是 慧光照無量
 壽命無數劫 久修業所得
 汝等有智者 勿於此生疑
 當斷令永盡 佛語實不虛
 如醫善方便 爲治狂子故
 實在而言死 無能說虛妄
 我亦爲世父 救諸苦患者
 爲凡夫顛倒 實在而言滅
 以常見我故 而生憍恣心
 放逸著五欲 墮於惡道中

如來壽量品第十五

- (四) わが身彼處に立てること 一切有情のごとくなり、
 顛倒の想ある迷人は 彼處に立てるわれを見ず。
 (五) わが現身の滅度を見 舍利をば種々に供養せむ、
 われを見ずして愛慕せむ かくて正心を生ずべし。
 (六) もし正心に柔輒に 命惜まぬ諸有情あらば、
 われ聲聞の群集の 身を鷲峯に示現せむ。
 (七) かくて語らむ人々に われ今此處に涅槃せじ、
 比丘よこれわが善巧方便なり あまた、び人の世に生る。
 (八) われ他の有情に敬はれ わが勝道を示せども、
 世尊の滅度なかりせば 汝らわが聲よも聞かじ。
 (九) われ苦める有情を見 而も本身を示現せず、
 われを見んとて渴仰の 思あるとき正法説かむ。
 (一〇) わか加持常にかくあらむ 不思議千俱胝のうち、
 この鷲峯と俱胝なす その他の住處を去らざらむ。

- (一) たごひ諸有情この世をば 燃わつゝありと見做すとも、
 さはれこのわが佛國は 天人(常に)充ち満てり。
 (二) 彼等に種々の遊戯あり 俱胝の庭園や宮殿樓臺、
 衆寶の山々華果 茂れる樹々もて飾りたり。
 (三) 上には諸天鼓うち 曼陀羅華の雨を雨らし、
 わが聲聞と菩提を 求むる聖者に散すなり。
 (四) かくわが國土は常住なれど 餘人は燃ゆと思ふなり、
 かれらはこの世に數の怖畏 災禍憂患充つとみる。
 (五) 如來と法とさてはわが 群集の名を多俱胝劫、
 かれらゆめ／＼聞かざらむ これ惡業の果報なり。
 (六) さはれ順良柔輒の 有情は人間に生じてぞ、
 清淨業もて生じたる かれらは法説くわれを見む。
 (七) かく無邊なるこの業を われゆめかれらに語らじな、
 されば久遠ゆわれあるも 如來得難しとわれは説く。

我常知衆生 行道不行道
隨應所可度 爲說種種法
每自作是念 以何令衆生
得入無上道 速成就佛身

如來壽量品第十五

三六六

- (一八) わがこの智力かくあらむ その輝けるほごりなく、
壽命も無邊長劫なり 久しく行じて得たるなり。
- (一九) 賢者よ疑ふことなかれ 惑ひをすべて断てよかし、
われ誠實の言を説く われに虚妄の語はあらず。
- (二〇) 猶し巧方便の醫師ありて 顛倒の想ある子らのため、
生けるその身を死すといふ 智者そを虚偽と強むざらむ。
- (二一) われは世の父自存者なり 疑ふ一切群生の導師なり、
子らの顛倒疑惑を見 不滅に滅をぞ示すなる。
- (二二) 何とてしばし示現する (衆生)信智なく分別なく、
放逸にして慾に耽り 憍慢の故に惡趣に落つ。
- (二三) 常に數多の行を知り 如來ぞご有情に語るなり、
いかに菩提に回せしめむ いかに佛法を得せしめむ。

右聖妙法蓮華法門に於て如來壽量品第十五

妙法蓮華經

分別功德品第十六

爾時大會。開佛說。壽命劫數。長遠如是。無量無邊。阿僧祇衆。生得大饒益。於時世尊。告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。我說是如來。壽命長遠時。六百八十萬億那由他。恒河沙衆生。得無生法忍。復有千倍。菩薩摩訶薩。復有千倍。持陀羅尼門。復有一世界。微塵數。菩薩摩訶薩。得樂說無礙辯才。復有一世界。微塵數。菩薩摩訶薩。得量旋陀羅尼。復有三大千世界。微塵數。菩薩摩訶薩。能轉不退法輪。復有二千中。國土。微塵數。菩薩摩訶薩。能轉清淨法輪。復有小千國土。微塵

分別功德品第十六

時にこの如來壽量の説かれし時、無量無數の有情は義理を得たりき。其時世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告て曰く、『時に阿逸多よ、如來壽量の説示の法門の説かれし間に六十八恒河沙に等しき俱胝那由他百千の菩薩は無生法忍を得たり。その千倍の菩薩摩訶薩は陀羅尼を得たり。又他の一千世界微塵數に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無礙辯才を得たり。又他の二千世界微塵數に等しき俱胝那由他百千の眷屬に圍繞せられし菩薩摩訶薩は陀羅尼を得たり。又他の三千世界微塵數に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて不退轉法輪を轉じき。又他の中世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無垢光輪を轉じき。又他の小世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞き

分別功德品第十六

三六七

數菩薩摩訶薩。八生當得。阿耨多羅三藐三菩提。復有四四天下。微塵數菩薩摩訶薩。四生當得。阿耨多羅三藐三菩提。復有三四天下。微塵數菩薩摩訶薩。三生當得。阿耨多羅三藐三菩提。復有二四天下。微塵數菩薩摩訶薩。二生當得。阿耨多羅三藐三菩提。復有一四天下。微塵數菩薩摩訶薩。一生當得。阿耨多羅三藐三菩提。復有八世界。微塵數衆生。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。

佛說是諸菩薩摩訶薩。得大法利時。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。以散無量。百千萬億。寶樹下。師子座上諸佛。并

て無上なる正等覺に於て八生所繫なりき。又他の四四洲世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無上なる正等覺に於て四生所繫なりき。又他の三四洲世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無上なる正等覺に於て三生所繫なりき。又他の二四洲世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無上なる正等覺に於て二生所繫なりき。又他の一四洲世界微塵に等しき菩薩摩訶薩はこの法門を聞きて無上なる正等覺に心を發したりき」と。

時に世尊のこの菩薩摩訶薩の法時決定の説示をなせしや否や、虚空の中より曼陀羅華大曼陀羅華の華雨を雨らして、かれら俱胝那由他百千の世界に於て寶樹の根なる師子座に坐せるかれら俱胝那由他百千の一切諸佛の上に散布したりき。又世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者と滅度し

散七寶塔中。師子座上。釋迦牟尼佛。及久滅度。多寶如來。亦散一切。諸大菩薩。及四部衆。又雨細沫。栴檀沈水香等。於虛空中。天鼓自鳴。妙聲深遠。又雨千種天衣。垂諸瓔珞。眞珠瓔珞。摩尼珠瓔珞。如意珠瓔珞。徧於九方。衆寶香爐。燒無價香。自然周至。供養大會。一一佛上。有諸菩薩。執持旛蓋。次第而上。至于梵天。是諸菩薩。以妙音聲。讚無量頌。讚歎諸佛。

て師子座に坐せる世尊多寶如來應供正等覺者の上に散布したりき。又一切菩薩の群衆かれら四會の上にも散布したりき。天の旛檀阿伽樓の香粉は空中より雨りき。上方虚空の中に於て大なる鼓は撃たざるに響きて、意悦美妙甚深の音聲あり。又百千の天の襲重の衣は上方虚空の中より落下しき。又瓔珞、半瓔珞、眞珠瓔珞、摩尼寶、大寶は上方虚空の中に於て、普ねく一切方に懸りき。又普ねく無價の香(を容れたる)衆寶合成の百千の香爐は自然に周徧せりき。又諸の菩薩摩訶薩は虚空の中に於て乃至梵の世界に至るまで一々の如來の上に衆寶合成の傘蓋の列を保ちたりき。かくてかれら一切の無量無數俱胝那由他の諸佛の上にかれら菩薩摩訶薩は虚空の中に於て乃至梵の世界に至るまで、衆寶合成の傘蓋の列を保ちたりき。かれらは各々諸佛讚嘆のために唱へられたる伽陀を以てかれら如來を讚嘆

しき。

爾時彌勒菩薩。從座而起。徧袒右肩。合掌向佛。而說偈言
 佛說希有法 昔所未曾聞
 世尊有大力 壽命不可量
 無數諸佛子 聞世尊分別
 說得法利者 歡喜充偏身
 或住不退地 或得陀羅尼
 或無礙樂說 萬億旋總持
 或有大千界 微塵數菩薩
 各各皆能轉 不退之法輪
 復有中千界 微塵數菩薩
 各各皆能轉 清淨之法輪
 復有小千界 微塵數菩薩
 餘各八生在 當得成佛道
 或有四三二 如此四天下
 微塵數菩薩 隨數生成佛

- 時に彌勒菩薩摩訶薩はその時これらの伽陀を説て曰く
- (一) 善逝の説希有にして 曾て聞かざるところなり、世尊はかくも大身に 壽量かくまた無邊なり。
 - (二) 今日しも善逝にまのあたり かくことわけて法聞きぬ、世間導師のまことの子 千俱胝の衆生は歡喜せり。
 - (三) あるは勝道に不退を得 あるは陀羅尼を保つなり、あるは辯才無礙ならむ 千俱胝なる陀羅尼を得。
 - (四) 微塵土の如き他のものは 無上佛智に安立し、あるは八度の生を経て 無邊を見つゝ佛たらむ。
 - (五) あるは四度の生を経て 無邊を見つゝ佛たらむ、あるは三度や二度の後、世尊に御法を聽聞し 眞諦を見て菩提を得。
 - (六) あるは一度の生を経て 次に一切智を得べし、これらは世尊の壽を聞きて 無漏の果報を得たるなり。

或一四天下 微塵數菩薩
 餘有一生在 當得一切智
 如是等衆生 聞佛壽長遠
 得無量無漏 清淨之果報
 復有八世界 微塵數衆生
 聞佛說壽命 皆發無上心
 世尊說無量 不可思議法
 多有所饒益 如虛空無邊
 雨天曼陀羅 摩訶曼陀羅
 釋梵如恒沙 無數佛土來
 雨栴檀沈水 繽紛而亂墜
 如鳥飛空下 供散於諸佛
 天鼓虛空中 自然出妙聲
 天衣千萬億 旋轉而來下
 衆寶妙香爐 燒無價之香
 自然悉周徧 供養諸世尊
 其大菩薩衆 執七寶幡蓋
 高妙萬億種 次第至梵天
 一一諸佛前 寶幢懸勝旛

- (七) 八の國土の微塵なす 俱胝の有情法きゝて 其數かくも無量なる、無上菩提の心發すなり。
- (八) 大聖かゝる業作して この佛地をば示しつゝ、その量もなく邊なく 虚空界のごと無量なり。
- (九) 千俱胝の國ゆ集ひたる 多千俱胝の天子たち、恒沙のごとき釋梵は 曼陀羅の雨ふらしけり、
- (一〇) いみじき旛檀の香粉や 阿伽樓の香粉散らしつゝ、鳥の如くに空を行き 如法に諸佛に散らすなり。
- (一一) 虚空のうちに微妙なる 鼓は撃たねど響くなり、千俱胝なす天の衣 世尊の上に落ち旋る。
- (一二) 價こよなき香を焚く 千俱胝なす寶香爐、威神世尊を供養のため 自然にそこに周徧す。
- (一三) 梵天界まで賢聖は 高大衆寶合成の、俱胝那由他の無邊なる 華傘を我上に保つなり。

亦以千萬偈 歌詠諸如來
如是種種事 昔所未曾有
聞佛壽無量 一切皆歡喜
佛名聞十方 廣饒益衆生
一切具善根 以助無上心

爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。其有衆生聞佛壽命長遠如是。乃至能生一念信解。所得功德。無有限量。若有善男子。善女人。爲阿耨多羅三藐三菩提故。於八十萬億那由佗劫。行五波羅蜜。檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波

羅蜜。毗梨耶波羅蜜。禪波羅蜜。除般若波羅蜜。以是功德。比前功德。百分千分。百千萬億分。不及其一。乃至算數譬論。所不能知。若善男子。有如是功德。於阿耨多羅三藐三菩提退者。無有是處。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
若人求佛慧 於八十萬億
那由佗劫數 行五波羅蜜
於是諸劫中 布施供養佛
及緣覺弟子 并諸菩薩衆

分別功德品第十六

(四) 歡喜心ある佛子たち 世尊の前に美はしき、
旛を懸けたる幢を樹て (百)千の偈もて讚嘆す。
(五) かく希有別異未曾有の 多くを世尊は今日示す、
壽量の示現に一切の 有情は隨喜を得たりけり。
(六) 義は今十方に廣くして 世尊の聲は高きかな、
千俱胝の衆生を満足し 菩提の善をば具せしむる。
時に世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告げて曰く『阿逸多よ、かの如來壽量説示の法門の説かれし時、諸の有情ありて、一念をだも發起し、信解を生じ、又深信を作したらむに、かれら善家男子若くば善家女子は如何に大なる福德を生すべきぞや。聽け、善し、甚だ善し、念へ、如何なる福をか生すべき。阿逸多よ、例へば善家男子若くば善家女子あらむ。無上なる正等覺を求めつゝ、五波羅蜜に於て八俱胝尼由他百千劫を過ぎむ。即ち布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅

蜜、靜慮波羅蜜これなり。般若波羅蜜を除く。又阿逸多よ、善家男子若くば善家女子ありてこの如來壽量の説示の法門を聞きて、一念をだも發起し、信解を生じ、深信を作したらむに、その福德の想、善根の想は前者の福德の想、善根の想(即ち)五波羅蜜を行じて八俱胝尼由他百千劫を満したるに比すれば百分にも及ばじ。千分にも、百千分にも俱胝百千分にも、俱胝尼由他百千分にも及ばし。數も、迦羅も、譬喩も、優波尼沙陀も容れざるなり。阿逸多よ、此の如き福德の想を具したる善家男子若くば善家女子は無上なる正等覺より退轉せず。決してかゝることありあることなし』

其時、世尊はこれらの伽陀を説て曰く、

(七) 無上の佛智この智慧を 求めつゝあるその人の、
五波羅蜜をばこの世にて 受けてこれをば轉じなむ。

(八) 八千俱胝の劫波をば 滿つるまで彼は修行せり、

珍異之飲食 上服與臥具
 栴檀立精舍 以園林莊嚴
 如是等布施 種種皆微妙
 盡此諸劫數 以回向佛道
 若復持禁戒 清淨無缺漏
 求於無上道 諸佛之所歎
 若復行忍辱 住於調柔地
 設衆惡來加 其心不傾動
 諸有得法者 懷於增上慢
 爲新所輕惱 如是亦能忍
 若復勤精進 志念常堅固
 於無量億劫 一心不懈怠
 又於無數劫 住於空閑處
 若坐若經行 除睡常攝心
 以是因緣故 能生諸禪定
 八十億萬劫 安住心不亂
 持此一心福 願求無上道
 我得一切智 盡諸禪定際
 是人於百千 萬億劫數中

行此諸功德 如上之所說
 有善男女等 聞我說壽命
 乃至一念信 其福過於彼
 若人悉無有 一切諸疑悔
 深心須臾信 其福爲如此
 其有諸菩薩 無量劫行道
 聞我說壽命 是則能信受
 如是諸人等 頂受此經典
 願我於未來 長壽度衆生
 如今日世尊 諸釋中之王
 道場師子吼 說法無所畏
 我等未來世 一切所尊敬
 坐於道場時 說壽亦如是
 若有深心者 清淨而質直
 多聞能總持 隨義解佛語
 如是諸人等 於此無有疑

分別功德品第十六

- 多くの佛陀聲聞に しばし施物を與へつゝ、
 諸菩薩たちに硬軟の、
 臥具を供へて悦ばしめ、
 栴檀香もて此に建て、
 歩む通路を具へたり。
 (二) かくもくさくさまぐの 多くの施物を與ふべし、
 千俱胝劫與へてぞ これを菩提に回向せむ。
 (三) 又諸世尊の讚めたまひ 諸賢の總て認めたる、
 清淨の戒を守りなむ 佛智のためになしぬべし。
 (四) 又忍辱の行をなし 調柔地にぞ立ちぬべし、
 堅持憶念の彼なれば 多くの誹謗も忍びなむ。
 (五) 憍慢の思に住したる 多くの異解の有情あらむ、
 かれらの非難も忍ぶべし 佛智のためになしぬべし。
 (六) 常に精進を行じてぞ 堅固の念に住すべし、

- たゞ專一の思にて 俱胝劫をも過ぎぬべし。
 (六) あるは練若に居を占めつ さては經行に携はり、
 懈怠睡眠を遠けて 俱胝劫波を修行せん。
 (七) 禪定者大禪定者 想を禪定の園に寄せ、
 八千俱胝滿劫を 禪定に耽り經過せん。
 (八) この禪定もて勇猛の 彼は無上菩提に進むべし、
 われ一切智者なるべしと 禪定波羅蜜に達すべし。
 (九) 是等功德を千俱胝 劫波になせし彼等には、
 福德至るべきなりと 上に稱讚せられたり。
 (一〇) されども女人また男子 わが壽量をば聽聞し、
 一念だにも信せんに 其福德は無邊なり。
 (一一) 人もし疑惑と躊躇と 猶豫の思を遠けて、
 一念これを信解せば 果報はかくの如くなり。
 (一二) 多俱胝劫を修行せし 多くの菩提薩埵あり、

分別功德品第十六

又阿逸多。若有聞佛壽命長遠。解其言趣。是人所得功德。無有限量。能起如來。無上之慧。何況廣聞是經。若教人聞。若自持。

若教人持。若自書。若教人書。若以華香瓔珞。幢幡輪蓋。香油蘇燈。供養經卷。是人功德。無量無邊。能生一切種智。阿逸多。若善男子。善女人。聞我說壽命長遠。深信信解。則爲見佛。常在耆闍崛山。共大菩薩。諸聲聞衆。圍繞說法。又見此娑婆世界。其地瑠璃。坦然平正。閻浮檀金。以界八道。寶樹行列。諸臺樓觀。皆悉寶成。其菩薩衆。咸處其中。若有能如是觀者。當知是爲深信解相。又復加來滅後。若聞

わが不可思議の壽量をば 聞けども更に驚かず。
(三) 頭 傾 け 禮 す ら く われ亦かくこそあるべけれ、
當來の世に(出現し) 俱胝の衆生を救ふべし。
(四) たごへば猶釋迦牟尼世尊 釋迦師子大聖の如くにて、
菩提道場に座を占めつ この師子吼をば説き宣む。
(五) われ亦當來の世に於て 一切有情に 敬はれ、
菩提道場に座を占めつ かゝる壽量を示すべし。
(六) 深心を具する人々は 聞きて(必ず)受持すべし、
深密の語を了解せん 彼等の疑惑はあらざらむ。
『又阿逸多よ、この如來壽量の説示の法門を聞きて、證入し信解し領會し、了知するものは更に無量なる佛智に到るべき福德の積聚を生すべきなり。況んやかくの如き法門を聞き、他をして聞かしめ、宣説し受持し、書寫し、書寫せしめて經卷となし、恭敬し、尊重し、奉事し、供養し、華燒香、塗香、華鬘、膏

油、香粉、衣服、傘蓋、幢、幡、油燈、酪燈、香油燈を以て供養せんは尙多くの佛智に到るべき福德の積聚を生すべきをや。然るに又阿逸多よ、善家男子若くは善家女子のこの如來壽量の説示の法門を聞きて、深心をもつて信解せんに、深信の相を語らば、彼はわが菩薩の衆に圍繞せられ、菩薩の衆に恭敬せられ、聲聞の衆中に在りて法を説きつゝ、靈鷲山に在るを見るなり。又このわが佛國なる娑婆世界を、瑠璃合成の平地にして、金繩を以て八道を界し、寶樹を以て莊嚴せられたりと見るなり。又菩薩の住處として用ゐられし樓臺あるを見るなり。阿逸多よ、これ深心を以て信解せる善家男子若くは善家女子の深心の相と知るべきなり。時に又阿逸多よ、われは如來の滅後この法門を聞きてこれを毀謗せず、却てこれを隨喜するかれら善家男子を目して、尙深心を以て信解せるものと語るなり。況んやこれを受持し宣説せん

是經而不毀背。起隨
喜心。當知已爲深信
解相。何況讀誦受持
之者。斯人則爲頂戴
如來。阿逸多。是善男
子。善女人。不須爲我
復起塔寺。及作僧坊
以四事供養衆僧。所
以者何。是善男子。善
女人。受持讀誦。是經
典者。爲已起塔。造立
僧坊。供養衆僧。則爲
以佛舍利。起七寶塔。
高廣漸小。至于梵天。
懸諸幡蓋。及衆寶鈴。
華香瓔珞。抹香塗香。
燒香。衆鼓伎樂。簫笛
篳篥。種種舞戲。以妙
音聲。歌頌讚頌。則爲
已於無量千萬億劫。
作是供養已。阿逸多。
若我滅後。聞是經典。

有能受持。若自書。若
教人書。則爲起立僧
坊。以赤梅檀。作諸殿
堂。三十有二。高八多
羅樹。高廣嚴好。百千
比丘。於其中止。園林
浴池。經行禪窟。衣服
飲食。牀褥湯藥。一切
樂具。充滿其中。如是
僧坊。堂閣若干。百千
萬億。其數無量。以此
現前。供養於我。及比
丘僧。是故我說。如來
滅後。若有受持讀誦。
爲他人說。若自書。若
教人書。供養經卷。不
須復起塔寺。及造僧
坊。供養衆僧。况復有
人。能持是經。兼行布
施。持戒。忍辱。精進。一
心。智慧。其德最勝。無
量無邊。譬如虛空。東

をや。而してこの法門を経卷となし、これを肩にして運ぶ
ものは如來を肩にして運ぶなり。されば阿逸多よ、かゝる
善家男子若くは善家女子は子が塔を作らざれ。精舍を作
らざれ。又苾芻衆のために療病の藥、家具を給與せざれ。
其故は如何。阿逸多よ、かゝる善家男子若くは善家女子は
子が舍利を供養せんがために七寶合成の塔を作れるなり
高さは乃至梵の世界に至り周邊これに稱へり。傘蓋周圍
に懸り、喜ぶべき旌旗鈴鐸は高く秀でたり。その舍利塔に
種々の恭敬をなし、種々人天の華燒香、塗香、華鬘、膏油、香粉、衣
服、傘蓋、幢幡、旌旗、種々の微妙意悅なる繒衣、小鼓、中鼓、大鼓、種
々の樂器、擊樂器、音聲、種々の讚歌、舞戲を以て、多無量多無數
百千俱胝劫の間、恭敬をなせるなり。阿逸多よ、わが滅後こ
の法門を受持し、宣説し、書寫し、開示するものは、亦精舍を作
れるなり。高博廣大にして赤梅檀を以て合成し、三十二の

尖塔あり、八層より成り、一千の苾芻を住ましむるに足り、園
には花咲き、通路には舍宅を具へ、舍宅には臥牀を具へ、硬軟
の飲食療病の藥充滿し、一切の勝樂莊嚴せられたらむ。而
して多無量の有情、即ち或は百、或は千、或は百千、或は俱胝、或
は百俱胝、或は千俱胝、或は百千俱胝、或は百千那由他俱胝な
るかれらは面たりわれを見、わが侍者たる聲聞衆となるべし。
又阿逸多よ、われこの故に語る。「如來の滅後、この法門を或
は受持し、或は宣説し、或は指示し、或は書寫するものはわが
滅後舍利の塔を作らざれ、僧伽を供養せざれ」と。況んや、阿
逸多よ、この法門を受授する善家男子若くは善家女子あら
んに、或は布施、或は持戒、或は忍辱、或は精進、或は靜慮、或は智
慧を以てこれを成就せば、尙多き佛智に到るべき無量無邊
なる福德の積聚を生すべきなり。阿逸多よ、譬へば虚空界
は東西南北上下の諸方に於て無邊なる如く、實にこの法門

西南北。四維上下。無量無邊。是人功德。亦復如是。無量無邊。疾至一切種智。若人讀誦。受持是經。爲他人說。若自書。若教人書。復能起塔。及造僧坊。供養讚歎。聲聞衆僧。以有百千萬億。讚歎之法。讚歎菩薩功德。又爲他人。種種因緣。隨義解說。此法華經。復能清淨持戒。與柔和者。而共同止。忍辱無瞋。志念堅固。常貴坐禪。得諸深定。精進勇猛。攝諸善法。利根智慧。善答問難。阿逸多。若我滅後。諸善男子。善女人。受持讀誦。是經典者。復有如是。諸善功德。當知是人。

分別功德品第十六

を受持し宣説し、指示し、書寫し、書寫せしむるかの善家男子若くば善家女子は佛智に到るべき無量無數の福德の積聚を生すべきなり。若し人ありて專心に如來の制多を恭敬し、如來の聲聞を讚嘆し、俱胝那由他百千の菩薩摩訶薩の功德を稱讚し、これを他人に示し、忍辱を成就し、戒を持ち、善法を有し、共に住するに樂しく、忍耐にして、柔善に、他を嫉まず、瞋恚の心を離れ、惡心なく、念あり、力あり、精進あり、常に修行を事とし、佛法を求めて、靜慮を凝し、深定を重んじ、屢々深定に入り、疑問を解くに巧みに、百千俱胝那由他の疑問を止むるごせん。阿逸多よ、如來の滅後、この法門を受持する菩薩摩訶薩にも、今わが擧げし如きかくの如き功德あるべきなり。阿逸多よ、かくの如きかの善家男子若くば善家女子は道場に立つべし、この善家男子若くば善家女子は覺を證せんがために菩提樹下に趣くご知るべきなり。又阿逸多よ

已趣道場。近阿耨多羅三藐三菩提。坐道樹下。阿逸多。是善男子。善女人。若坐若立。若經行處。此中便應起塔。一切天人。皆應供養。如佛之塔。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。若我滅度後。能奉持此經。斯人福無量。如上之所説。是則爲具足。一切諸供養。以舍利起塔。七寶而莊嚴。表刹甚高廣。漸小至梵天。寶鈴千萬億。風動出妙音。又於無量劫。而供養此塔。華香諸瓔珞。天衣衆伎樂。然香油蘇燈。周而常照明。悉世末法時。能持是經者。則爲已如上。具足諸供養。若能持此經。則知佛現在。

かの善家男子若くば善家女子の若くは立ち若くは坐し、若くば歩むところには阿逸多よ如來のための制多を作るべきなり。而して天を含める世間は「これ如來の塔なり」と語るべし。

其時世尊はこれらの伽陀を説て曰く、

- (三七) 人間導師去りて後、この經典を受持する、福德蘊は無邊ぞと、しばくわれは語りけり。
- (三八) 多くの供養を吾になし、わが舍利塔を建立し、衆寶合成どりくに、善美を盡し莊嚴せむ。
- (三九) 高さ梵天に至るべき、傘蓋の列を具へたり、周邊廣き吉祥の、多くの幢を具へたり。
- (四〇) 繒衣鈴鐸無量にて、繒衣の帯を飾りたり、風に亂るゝ鈴鐸は、世尊の舍利を飾るなり。
- (四一) 多くの華香塗香もて、廣き供養を行はむ、

以半頭栴檀 起僧坊供養
 堂有三十二 高八多羅樹
 上膳妙衣服 牀臥皆具足
 百千衆住處 園林諸浴池
 經行及禪窟 種種皆嚴好
 若有信解心 受持讀誦書
 若復教人書 及供養經卷
 散華香抹香 以須曼瞻蔔
 阿提目多伽 薰油常然之
 如是供養者 得無量功德
 如虛空無邊 其福亦如是
 況復持此經 兼布施持戒
 忍辱樂禪定 不瞋不惡口
 恭敬於塔廟 謙下諸比丘
 遠離自高心 常思惟智慧
 有問難不瞋 隨順爲解說
 若能行是行 功德不可量
 若見此法師 成就如是德
 應以天華散 天衣覆其身

頭面接足禮 生心如佛想
 又應作是念 不久詣道場
 得無漏無爲 廣利諸天人
 其所住止處 經行若坐臥
 乃說至一偈 是中應起塔
 莊嚴令妙好 種種以供養
 佛子住此地 則是佛受用
 常在於其中 經行若坐臥

分別功德品第十六

- (四二) 多くの樂器また衣服 多くの鼓樂さまざまに。かの舍利のため奏でられ、香油を焚ける燈明は 到るところに照されむ。
- (四三) この經典を受持して かくごり／＼に無邊なる (法) 滅の時示さんは、供養をわれになせしなり。
- (四四) 多俱胝殊勝の精舎をば 栴檀樹もて建立し、三十二箇の堂宇あり 八個の多羅樹聳たり。
- (四五) 多くの臥具は備へられ 硬軟の食は具足せり、彩ある絨氈を具へたる (百) 千の室を施設せり。
- (四六) 花園をもて飾りたる 多くの園と通路あり、その他種々ごり／＼に 多くの偉品を與へたり。
- (四七) わが面たりごり／＼の 供養を衆僧に行はむ、導師の滅後此處にして この經典を受持せむ。
- (四八) 信解の力もし有りて この經典を或は讀み、

- 或は書寫せばなほも亦 多くの福を得べきなり。
- (四九) 若し人この經を書寫せしめ 經卷となし説き明かし、塗香や華鬘香油もて その經卷を供養せん。
 - (五〇) 青蓮の類を調和して 簪葡萄華をば集めたる、香よき油を充してぞ 常燈明を捧ぐべし。
 - (五一) かくの如きの供養をば この經卷になす人は、その量さらに知れ難き 多くの福を生すべし。
 - (五二) 譬へば空界の限量は 實に知るべきこと難し、十方に常に(無邊なり) 福德蘊も亦然り。
 - (五三) 況んや人もし忍ありて 淳善にして専心に、戒行を持し靜慮あり 心を一境に凝しつゝ、
 - (五四) 瞋恚を離れ惡意なく 制多に於て恭敬せん、常に諸比丘を謙敬し 憍慢を離れ懈怠なく。
 - (五五) 又智慧ありて雄健に 質疑を受けて怒るなく、

衆生を惑れむ心より 次第を追ひて示すべし。

(五) かゝる人若しこの經を 受持することあらんをや、

その福德の積聚の 量を知ること難きなり。

(五) もし人ありてかくの如き この經典を受持しつゝ、

法説く者に遣はんには かれに恭敬を致すべし。

(五) 天の華をば散すべし 天の衣服を覆ふべし、

その兩足を頂禮し 此れ如来ぞと思ふべし。

(五) 遣はしその時思ふべし かれは菩提の樹下に行き、

天を含める世のために 安穩無上の覺を得ん。

(六) かゝる聖者の在る處 何處にもあれかの雄者、

行住坐臥にこの經の 一偈をだにも説きつべし。

(六) 佛世尊導師に捧ぐべき 無上士の塔をそこに建て、

とりぐに美を盡すべく 種の供養を致すべし。

(六) われこの地方に住したり 又われかしこを歩みたり、

佛の御子の在るところ そこにわれ亦坐せるなり。

右聖妙法蓮華法門に於て分別功德品第十六

妙法蓮華經

隨喜功德品第十七

爾時彌勒菩薩摩訶薩。白佛言。世尊。若有善男子。善女人。聞是法華經。隨喜者。得幾所福。而說偈言。
世尊滅度後。其有聞是經。若能隨喜者。為得幾所福。

爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。如來滅後。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。及餘智者。若長若幼。聞是經。隨喜已。從法會出。至於餘處。若在僧

隨喜功德品第十七

三八六

隨喜功德品第十七

時に彌勒菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ善家男子若くは善家女子ありて示されたるこの法門を聞きて隨喜せんに世尊よかの善家男子若くは善家女子は如何なる福德を生すべきや』。

其時彌勒菩薩摩訶薩はこの伽陀を説て曰く、

(一) 大聖この世を去りし後 かくの如きの經を聞き、
聞きて且又隨喜せば いかなる善となるべきぞ。

其時世尊は彌勒菩薩摩訶薩に告げて曰く、『阿逸多よ若くは善家男子若くは善家女子あらむ。如來の滅後この法門の宣説せられ開示せらるゝを聽きて若くは比丘若くは比丘尼若くは優婆夷若くは優婆塞若くは智慧を具足せる人若くは童男若くは童女にもあれ聽きてこれを隨喜する

坊若空閑地若城邑巷陌聚落田里如其所聞。為父母宗親善友知識。隨力演説。是諸人等。聞已隨喜。復行轉教。餘人聞已。亦隨喜轉教。如是展轉。至第五十。阿逸多。其第五十。善男子。善女人。隨喜功德。我今説之。汝當善聽。

若四百萬億阿僧祇世界。六趣四生衆生。卵生。胎生。溼生。化生。若有形。無形。有想。無想。非有想。非無想。無足。二足。四足。多足。

隨喜功德品第十七

三八七

あらむ。而して聽法の後、起ちて進み、若くは村に行き、若くは家に行き、若くは森林に行き、若くは街巷に行き、若くは市邑に行き、若くは聚落に行かむ。かくてその法を實のごとくにありし如くに、聽きし如くに、かれの母、父、親族、友人、知己、若くは他の人に傳へむ。その人若しこれを聽きて隨喜して他に傳へ、この人またこれを聽きて隨喜せむ。かくて乃至展轉して五十に至らむ。阿逸多よ、若くは善家男子にもあれ、若くは善家女子にもあれ。その時法を聽きて隨喜せしその第五十の人の得べき福德の聚をわれ今説くべきなり。善く々々聽きてこれを思念せよ、われ汝に告げむ。
『阿逸多よ、譬へば四阿僧祇百千の世界に於て、多くの有情ありて共に住めり、六趣に於て或は卵生なるあり、或は胎生なるあり、或は濕生なるあり、或は化生なるあり、或は有形なるあり、或は無形なるあり、或は有識なるあり、或は無識なる

如是等。在。衆生數者。有人求福。隨其所欲。娛樂之具。皆給與之。一一衆生。與滿閻浮提。金。銀。瑠璃。碑。磬。磬。珊瑚。琥珀。諸妙珍寶。及象。馬。車。乘。七寶所成。宮殿。樓閣。等。是大施主。如是。布施。滿八十年已。而作是念。我已施衆生。娛樂之具。隨意所欲。然此衆生。皆已衰老。年過八十。髮白。面皺。將死不久。我當以佛法。而訓導之。即集此衆生。宣布法化。示教利喜。一時皆得。須陀洹道。斯陀含道。阿那含道。阿

あり。或は有識にも無識にもあらざるあり。或は無足なるあり。或は二足なるあり。或は四足なるあり。或は多足なるあり。乃至實に有情界に於て、多くの有情は共に集り、共に會せり。時に一人現はれて、福德のために、義利のために、その有情の身に對して、その願ひ、愛し、欲する、一切の勝れたる欲樂、戲樂、快樂、情樂を與へむ。又一々の有情に就きて、欲樂、戲樂、快樂、情樂のために、閻浮提に滿ちたる、金塊、黃金、白銀、摩尼、眞珠、瑠璃、螺貝、石、珊瑚、馬車、牛車、象車、宮殿、樓閣を與へむ。阿逸多よ、かくて施主なる大施主なるかの人は、滿八十年の間、施物を與へむ。時に阿逸多よ、施主なる大施主なるかの人は、かくの如く思ふべし、「さて、もこれらの有情は、すべわれに依りて喜ばされ、樂まされ、樂を生じたり。されど、かれら有情は、羸瘦せり、白頭なり、頽齡なり、老朽せり、衰耄せり、八十歳の年に達せり、死期は近づけり。故にわれをして、かれらを如來の

羅漢道。盡諸有漏。於深禪定。皆得自在。具八解脫。於汝意云何。是大施主。所得功德。寧爲多不。彌勒白佛言。世尊。是人功德甚多。無量無邊。若施主。但施衆生。一切樂具。功德無量。何況令得。阿羅漢果。

佛告彌勒。我今分明語汝。是人以一切

説きたまひし法教に入れしめ、これを教へしめよ。阿逸多よ、かくてかの人は、一切の有情を誘ひ、誘ひて如來の説きたまひし法教に入らしめ、これを受けしめむ。又かれら諸有情は、法を聽き、聽きて、一刹那に、一瞬に、一時に、すべて須陀含、斯陀含、阿那含、阿那含、果を得、乃至阿羅漢果に至らむ。諸の有漏を盡し、禪定を善くし、大禪定を善くし、八解脫禪定を善くせむ。阿逸多よ、如何に汝は思ふや、その施主なる大施主なる人は、この因縁に依りて、多無量無數の福德を生せずや。』かくの如く語られたる彌勒菩薩摩訶薩は、世尊に白して曰く、『實に然り、世尊よ、實に然り、善逝よ、この因縁によりて、世尊よ、かの施主大施主なるかの人は、多くの福德を生ずべし。そは、かれは、諸の有情に一切の快樂の基本を與へ、加之一層上なる阿羅漢の性に安立せしめられたればなり。』かくの如く語りし時、世尊は阿逸多菩薩摩訶薩に告げて

樂具。施於四百萬億。阿僧祇世界。六趣衆生。又令得阿羅漢果。所得功德。不如是第五十人。聞法華經一偈。隨喜功德。百分千分。百千萬億分。不及其一。乃至算數譬論。所不能知。阿逸多。如是第五十人。展轉聞法華經。隨喜功德。尙無量無邊。阿僧祇。何況最初。於會中間。而隨喜者。其福復勝。無量無邊。阿僧祇。不可得比。

隨喜功德品第十七

曰く、『われ汝に告ぐ、阿逸多よ、かの施主大施主なる人は四阿僧祇百千の世界に於て諸有情のために一切の快樂を以て満足せしめ、阿羅漢の性に安立せしめて福德を生せん。又展轉して隨ひ聽きたる五十の人のこの法門より、たとひ一偈にても一句にてもこれを聽き聽きて隨喜するあらむ。その人の隨喜に俱行せる福德業事はかの施主大施主なる人の施物に俱行し、阿羅漢の性に安立せしめたるに俱行せる福德業事に比するに、展轉して第五十に至れる人の、この法門より、たとひ一偈にても一句にても聽きて隨喜せる(福德)は實にこれより尙多きなり。阿逸多よ、隨喜に俱行せる福德の量、隨喜に俱行せる善根の量に對して、かの前者、施物に俱行せる阿羅漢の性に安立せしめたるに俱行せる福德の量は百分にも及ばず。千分にも、百千分にも、俱抵分にも、百俱抵分にも、千俱抵分にも、百千俱抵分にも、百千俱尼由他分

又阿逸多。若人爲是經故。往詣僧坊。若坐。若立。須臾聽受。緣是功德。轉身所生。得好上妙。象馬車乘。珍寶輦輿。及乘天宮。若復有人。於講法處坐。更有人來。勤令坐聽。若分座令坐。是人功德。轉身得帝釋坐處。

にも及ばず。僧祇分にも迦拏那(Ganana)にも優波尼沙陀(Upanisada)にも値せざるなり。阿逸多よ、この法門より乃至たとひ一偈にても一句にても展轉して聽きたる第五十の人は隨喜してかくの如き無量無數なる福德を生ずるなり。阿逸多よ、いかに況んや、わが面たりこの法門を聽き聽きて隨喜せんをや。阿逸多よその福德の量をわれは尙一層無量尙一層無數なりと説くなり。

『又阿逸多よ、若くは善家男子若くは善家女子ありて、この法門を聽かんがために、自身の家を出で、精舎に行かむ。行きたる後、若くは立ち、若くは坐して、この法門をたとひ一瞬間だも聞かんに、かの有情はその造積せし福德の量のために、この生を終りて第二の生に於て、牛車、馬車、象車、輦輿、牡牛、車天の宮殿を得べき身とならむ。若し又そこに法を聽くに當りて、一瞬間だも坐してこの法門を聞き、或は他をし

隨喜功德品第十七

我今應當教	令得於道果
即爲方便說	涅槃眞實法
世皆不牢固	如水沫泡焰
汝等咸應當	疾生厭離心
諸人聞是法	皆得阿羅漢
具足六神通	三明八解脫
最後第五十	聞一偈隨喜
是人福勝彼	不可爲譬喻
如是展轉聞	其福尙無量
何況於法會	初聞隨喜者
若有勸一人	將引聽法華
言此經深妙	千萬劫難遇
卽受教往聽	乃至須臾聞
斯人之福報	今當分別說
世世無口患	齒不疎黃黑
唇不厚褻缺	無有可惡相
舌不乾黑短	鼻高修且直
額廣而平正	面目悉端嚴
爲人所喜見	口氣無臭穢

優益華之香	常從其口出
若故詣僧坊	欲聽法華經
須臾聞歡喜	今當說其福
後生天人中	得妙象馬車
珍寶之聲與	及乘天宮殿
若於講法處	勸人坐聽經
是福因緣得	釋梵轉輪座
何況一心聽	解說其義趣
如說而修行	其福不可限

隨喜功德品第十七

- (五) かれひとくに法を説きのちに涅槃地を開示せり、一切の生類は泡幻の如くなるゆゑとく厭へ。
- (六) 一切有情は法を聞きその説法者の前にして、一時に羅漢の證を得、無漏最後身を保つべし。
- (七) 展轉の一偈だにも聞き隨喜の徳は尙多し、積聚したる他の徳もいかで少劣に及ぶべき。
- (八) 展轉の一偈だにも聞く功德は無邊無量なり、それすらかくも多ければましてまのあたり聞かをや。
- (九) 假令一人の有情にもいざつとめ行き法を聞け、多俱胝那由他諸劫にも此經得難しと語りなむ。
- (一〇) 勸められたるその有情は假令瞬間も此經を聞くその業果をわれ説かむ口の病患なかるべし。
- (一一) その舌惱むことあらじその齒は落つることあらじ、黒變黃變不齊なしまた憎むべき唇なし。

- (一二) その顔歪ます又瘦せず長きに過ぎず弱からず、鼻と齒と又唇と圓き顔みな平正なり。
- (一三) 常に諸人に愛せられその口毫も臭氣なく、常に青蓮の如くなる香薫を口に放つなり。
- (一四) この經聞かんと家を出で賢者は精舎に進みゆく、行きて暫しもこれを聞く清淨心の果を聞けや。
- (一五) その賢者の身は美麗にて種々の珠玉を飾りたる、馬車に打乗りまた高き象車に駕して遊行せん。
- (一六) 多くの人に運ばるゝ飾りし乗輿をかれは得ん、法聞かんとて出で行きし清淨なる果はこれぞかし。
- (一七) この清淨の業によりかしこに會座に坐するとき、帝釋の座と梵天の座また王の座を得べきなり。

右聖妙法蓮華法門に於て隨喜功德品第十七

妙法蓮華經

法師功德品第十九

爾時佛告常精進菩薩摩訶薩。若善男子。善女人。受持是法華經。若讀。若誦。若解說。若書寫。是人當得八百眼功德。千二百耳功德。八百鼻功德。千二百舌功德。八百身功德。千二百意功德。以是功德。莊嚴六根。皆令清淨。是善男子。善女人。父母所生。清淨肉眼。見於三千大千世界。內外所有。山林河海。下至阿鼻地獄。上至有頂。亦見其中。一切衆生。及業因緣。果報生處。悉見悉知。

法師功德品第十八

法師功德品第十八

其時世尊は常精進 Satatasamīhābhīṅka 菩薩摩訶薩に告げたまひき、『善家男子若くは善家女子ありてこの法門を若くば受持し若くは演説し若くは開示し若くは書寫せん。その善家男子若くは善家女子は八百の眼の功德を得千二百の耳の功德を得八百の鼻の功德を得千二百の舌の功德を得八百の身の功德を得八百の意の功德を得べきなり。これらこの多百の功德によりて六根みな清淨に極清淨なることを得べし。かくの如くかれは眼根清淨なるを以て父母所生の肉眼によりて内外より三千大千世界の山嶽林叢下は乃至阿鼻大地獄より上は乃至有頂に至るまで一切を天然の肉眼を以て見るべくその中に生じたる一切の有情を見るべく又その業異熟をも知るべきなり』

爾時世尊欲重宣

此義而說偈言

若於大衆中 以無所畏心
說是法華經 汝聽其功德
是人得八百 功德殊勝眼
以是莊嚴故 其目甚清淨
父母所生眼 悉見三千界
内外彌樓山 須彌及鐵圍
并諸餘山林 大海江河水
下至阿鼻獄 上至有頂天
其中諸衆生 一切皆悉見
雖未得天眼 肉眼力如是

復次常精進。若善男子。善女人。受持此

時に世尊はこれらの伽陀を説きて曰く、

- (一) この經典を衆會のうち 畏るゝことなく勇猛に、演説開示する人の 功德をわれ今語るべし。
- (二) 眼に八百の諸功德を ことごとくみな具へたり。さればその眼は垢を離れ 清淨にして穢れなし。
- (三) かれは父母より受け得たる その肉眼を用ひつゝ、山嶽森林を含みたる これらの世界を見たりけり。
- (四) 迷盧蘇迷盧の一切より 輪圍山までかれは見る、又他の諸山丘聚ご 大海までも見たりけり。
- (五) 下は阿鼻(大地獄)より 上は有頂の果までも、賢者はすべてかくのごと 肉眼を以て見たりけり。
- (六) されどもかれはなほ未だ 天眼を生ぜざるゆゑに、たゞ肉眼の境をもて かくの如きものを見る。

『又常精進よ、その善家男子若くは善家女子にしてこの法

經。若讀。若誦。若解說。若書寫。得千二百耳功德。以是清淨耳。聞三千大千世界。下至阿鼻地獄。上至有頂。其中內外。種種所有。語言音聲。象聲。馬聲。牛聲。車聲。啼哭聲。愁歎聲。羸聲。鼓聲。鐘聲。鈴聲。笑聲。語聲。男聲。女聲。童子聲。童女聲。法聲。非法聲。苦聲。樂聲。凡夫聲。聖人聲。喜聲。不喜聲。天聲。龍聲。夜叉聲。乾闥婆聲。阿脩羅聲。迦樓羅聲。緊那羅聲。摩睺羅伽聲。火聲。水聲。風聲。地獄聲。畜生聲。餓鬼聲。比

法師功德品第十八

門を開説し、他をしてこれを聞かしむるものは千二百の耳の功德を具足すべし。三千大千世界に於て、乃至阿鼻大地獄より有頂に至るまで内外發するところの種々の聲あり即ち若くは象の聲若くは馬の聲若くは駱駝の聲若くは牛の聲若くは野羊の聲若くは村邑の聲若くは車の聲若くは啼哭の聲若くは憂悲の聲若くは怖畏の聲若くは螺貝の聲若くは鈴鐸の聲若くは鼓 Pataha の聲若くは鼓 Muri の聲若くは遊戲の聲若くは歌詠の聲若くは舞踊の聲若くは樂器 Turya の聲若くは樂器 Vadya の聲若くは婦女の聲若くは丈夫の聲若くは童子の聲若くは童女の聲若くは(如)法の聲若くは非法の聲若くは快樂の聲若くは苦惱の聲若くは凡夫の聲若くは聖者の聲若くは可意聲若くは不可意聲若くは天の聲若くは龍の聲若くは夜叉の聲若くは羅刹の聲若くは乾闥婆の聲若くは阿脩羅の聲若くは迦樓羅の聲若く

丘聲。比丘尼聲。聲聞聲。辟支佛聲。菩薩聲。佛聲。以要言之。三千大千世界中。一切内外。所有諸聲。雖未得天耳。以父母所生。清淨常耳。皆悉聞知。如是分別。種種音聲。而不壞耳根。

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。父母所生耳。清淨無濁穢。

法師功德品第十八

は緊那羅の聲若くは摩睺羅伽の聲若くは人の聲若くは非人の聲若くは火の聲若くは風の聲若くは水の聲若くは聚落の聲若くは都市の聲若くは比丘の聲若くは比丘尼の聲若くは聲聞の聲若くは獨覺の聲若くは菩薩の聲若くは如來の聲乃至三千大千世界に於て内外發するところのこれらの諸聲を清淨なる天然の耳根によりて聞くべきなり。かれはこれら諸有情の音聲を聞くべき天然の耳根によりてこれら諸有情の音聲を覺知し、了解し、分別せり。されど尙天耳を發得せざるなり。(而も)その耳根はこれら一切の音聲によりて打ち勝たるゝことなし。常精進よ、その菩薩摩訶薩は尙未だ天耳を發得せざるも得たるどころの耳根はかくの如きなり。』

善逝師なる世尊はこれを語りたまひて後語りて曰く、(七)只生得の耳根なれど、清淨にして穢なし、

以此常耳聞 三千世界聲
 象馬車牛聲 鐘鈴瓦鼓聲
 琴瑟笙簧聲 簫笛之音聲
 清淨好歌聲 聽之而不著
 無數種人聲 聞悉能解了
 又聞諸天聲 微妙之歌音
 及聞男女聲 童子童女聲
 山川險谷中 迦陵頻伽聲
 命命等諸鳥 悉聞其音聲
 地獄衆苦痛 種種楚毒聲
 餓鬼飢渴逼 求索飲食聲
 諸阿脩羅等 居在大海邊
 自共言語時 出于大音聲
 如是說法者 安住於此間
 遙聞是衆聲 而不壞耳根
 十方世界中 禽獸鳴相呼
 其說法之人 於此悉聞之
 其諸梵天上 光音及徧淨
 乃至有頂天 言語之音聲

法師住於此 悉皆得聞之
 一切比丘衆 及諸比丘尼
 若讀誦經典 若爲他人說
 法師住於此 悉皆得聞之
 復有諸菩薩 讀誦於經法
 若爲他人說 撰集解其義
 如是諸音聲 悉皆得聞之
 諸佛大聖尊 教化衆生者
 於諸大會中 演說微妙法
 持此法華者 悉皆得聞之
 三千大千界 內外諸音聲
 下至阿鼻獄 上至有頂天
 皆聞其音聲 而不壞耳根
 其耳聰利故 悉能分別知
 持是法華者 雖未得天耳
 但用所生耳 功德已如是

法師功德品第十八

- 此に世界に殘なく 種々様々の聲を聞く。
 (八) 象の聲 また馬の聲 車聲 牛聲 野羊の聲、
 妙なる太鼓 小鼓の聲 笙 篳管 絃の聲を聞く。
 (九) 賢者は著するとなくて 意悦 美妙の歌を聞く、
 何處にもあれ何にまれ 俱胝の人の聲を聞く。
 (一〇) 常に諸天の聲を聞く 意悦 微妙の歌の聲、
 男子 女人の聲々々や 童男童女の聲を聞く。
 (一一) 山嶽 洞窟に住めるもの 迦陵 頻伽 や 杜鵑、
 孔雀 命々鳥などの 美妙の聲をかれは聞く。
 (一二) 地獄にありて苦を受くる 苦惱の聲をかれは聞く、
 食に飢ゑたる苦に迫り 餓鬼の出せる聲を聞く。
 (一三) 大海の中に住む阿修羅 種々なる聲を出すなり、
 法師は此にありながら 壓倒せられず聲を聞く。
 (一四) 傍生に於て聲々に 種々の語言を話すなり、

- 多種多様なるこの聲を 此に居ながら彼は聞く。
 (一五) 梵天界に住む諸天 色 究竟 天 光 音 天、
 その他の諸天の聲々々を みな残りなくかれは聞く。
 (一六) 善逝の教を修行して 諸の比丘の讀經して、
 衆會に法を示すなる かれらの聲を常に聞く。
 (一七) 世間に於て諸の 菩薩は共に讀經して、
 諸法の結集をなせるなり その聲々をかれは聞く。
 (一八) 人調御なる佛世尊 衆會に無上の法を説く、
 同一時にしてこの經を 受持する菩薩の聲を聞く。
 (一九) 阿鼻より上は有頂まで 内よりもまた外よりも、
 一切三千國土にて 多くの有情は聲をなす。
 (二〇) 一切有情の聲を聞く 耳に障礙はさらに無し、
 只生得の耳根なれど 六根は諸の義を知れり。
 (二一) 只生得の耳根にて 天耳は未だ得ざれども、

復次常精進。若善男子。善女人。受持是經。若讀。若誦。若解說。若書寫。成就八百鼻功德。以是清淨鼻根。聞於三千大千世界。上下內外。種種諸香。須曼那華香。闍提華香。末利華香。瞻蔔華香。波羅羅華香。赤蓮華香。青蓮華香。白蓮華香。華樹香。果樹香。梅檀香。沈水香。多摩羅跋香。多伽羅香。及千萬種和香。若抹。若丸。若塗香。持是經者。於此間住。悉能分別。

又復別知衆生之香。象香。馬香。牛羊等香。男香。女香。童子香。童女香。及神木叢林香。若近若遠。所有諸香。悉皆得聞。分別不錯。持是經者。雖住於此。亦聞天上。諸天之香。波利質多羅。拘鞞陀羅樹香。及曼陀羅華香。摩訶曼陀羅華香。曼殊沙華香。摩訶曼殊沙華香。梅檀沈水。種種抹香。諸雜華香。如是等天香。和合所出之香。無不聞知。又聞諸天身香。釋提桓因。在勝殿上。五欲娛樂。嬉戲時香。若在妙法堂上。爲忉利諸天。說法時香。若於諸園。遊戲時香。及餘天等。男女身香。皆悉遙聞。

此經典を恐れなく 受持する功德はかくぞある。

『又常精進よ、菩薩摩訶薩のこの法門を受持し開説し讀誦し書寫するものは鼻根清淨の功德を具足すべし。かれはその清淨なる鼻根を以て三千大千世界の種々なる香を内外より嗅ぐべし。即ち若くは惡(臭)の香若くは意悅の香若くは種々なる妙意 Sumanas 香即ち闍提迦 Jatika 末利迦 Mallika 簷蔔迦 Campaka 波羅々 patala の諸香を嗅ぐ。(又種々なる蓮華の諸香を嗅ぐ。即ち青蓮紅蓮黃蓮白蓮の香を嗅ぐ)又種々なる華菓樹の華菓の香を嗅ぐ。即ち梅檀 Candana 多摩羅跋 Tamalapatra 多迦羅 Tagara 阿伽樓 Agaru の芳香を嗅ぎ、種々多様に於て百千種なる一切の香を一座に坐して嗅ぐ。又一切有情を知り種々なる香を嗅ぐ。即ち象馬牛羊の獸の香を嗅ぐ。又種々なる傍生趣の生類の身香を嗅ぐ。(又)婦女男子の身香を嗅ぎ、童男童女の身香を嗅ぐ。遠きにあ

りて草叢藥木の香を嗅ぐ、かれは上のごとき諸香を知り、而もこれら諸香によりて驚倒せられず、癡鈍ならしめらるゝことなし。(又)かれは此にありて諸天の香を嗅ぐ。即ち圓正 Parijata 樹拘鞞陀羅 Kovidara 樹曼陀羅、大曼陀羅、曼殊沙、大曼殊沙の天華の香を嗅ぎ。天の阿伽樓の香粉梅檀の香粉の香を嗅ぐ。又天の種々百千種なる花の香を嗅ぎ、その名を知る。(又)諸天子の身香を嗅ぐ。即ち天帝釋の身香を嗅ぎ、又宮殿樓閣に於て遊戯し快樂し經行し若くは忉利天の善法堂に於て說法し若くは遊戯のために園苑に出で行くを知る。又その他の天子の各種の身香を嗅ぐ。(又)天の少女天の妻女の身香を嗅ぎ、天の童子の身香を嗅ぎ、天童女の身香を嗅ぐ。而もこれらの諸香によりて驚かさるゝことなし。かくて乃至有頂に生じたる有情の身香をも嗅ぎ、梵天の天子大梵天の身香をも嗅ぎ、かくて一切天人の身香を

如是展轉乃至梵天。上至有頂諸天身香亦皆聞之。并聞諸天所燒之香。及聲聞香。辟支佛香。菩薩香。諸佛身香。亦皆遙聞。知其所在。雖聞此香。然於鼻根。不壞不錯。若欲分別。爲他人說。憶念不誤。

爾時世尊。欲重宣

此義。而說偈言

是人鼻清淨 於此世界中
若香若臭物 種種悉聞知
須受那闍提 多摩羅栴檀
沈水及桂香 種種華果香
及知衆生香 男子女人香
說法者遠住 聞香知所在
大勢轉輪王 小轉輪及子
羣臣諸宮人 聞香知所在

嗅ぎ、聲聞獨覺菩薩如來の身香を嗅ぎ、如來の座の香をも嗅ぐ。又その上にかれら如來應供正等覺者の住したまへるを知る。而もこれら種々なる香によりてかれの鼻根は障礙せられず損害せられず惱亂せられず。若し求めらるればこれらの諸香を他人の爲めに分別して記憶は更に損害せられざるなり。』

其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く。

- (三) かれの鼻根は清淨にて 一切世界にありとある、芳香 惡臭とりくに 多種の諸香をかれは嗅ぐ。
- (三) 闍提の香や末利迦香 多摩羅 跋香 栴檀香、多伽羅阿伽樓の諸香まで 種々なる華菓の諸香あり。
- (四) かくて有情の香を知る 遠き^にに立てる男女の香、さては童男童女の香 何處にあるやを知りわくる。
- (五) かれは轉輪王を知る 又小國の轉輪王、

身所著珍寶 及地中寶藏
轉輪王寶女 聞香知所在
諸人嚴身具 衣服及瓔珞
種種所塗香 聞則知其身
諸天若行坐 遊戲及神變
持是法華者 聞香悉能知
諸樹華果實 及蘇油香氣
持經者住此 悉知其所在
諸山深嶮處 栴檀樹華數
衆生在中者 聞香皆能知
鐵圍山大海 地中諸衆生
持經者聞香 悉知其所在
阿脩羅男女 及其諸眷屬
闍提遊戯時 聞香皆能知
曠野險隘處 師子象虎狼
野牛水牛等 聞香知所在
若有懷妊者 未辨其男女
無根及非人 聞香悉能知
以聞香力故 知其初懷妊

王子宰相後宮も

すべて香によりて知る。

(三) 多種多様な財寶も

地中に藏めし金屬も、

(轉輪王)の女寶をも

菩薩は香によりて知る。

(七) 又粧飾の品々や

身に著くる種々様々の、

衣服や華鬘塗香あり

菩薩は香によりて知る。

(六) 最上の經を受持する

賢者は鼻(根)の力にて、

遊戲神通力すべて皆

行(住)坐臥にこれを知る。

(五) 薰よき油さては又

種々多様な華菓の香、

直ちにかれはこれを嗅ぎ

又香の出づる方を知る。

(三) 山嶽洞窟の中にして

多くの栴檀華咲けり、

又そこに住む諸有情も

賢者香により一切知る。

(三) 輪圍の山のほごりにも

大海の中に住む有情も、

大地の中に住む有情も

賢者香により一切知る。

(三) 修羅と阿修羅をかれは知る

阿修羅の少女も亦知れり、

成就不成就 安樂產福子
 以聞香力故 知男女所念
 染欲癡志心 亦知修善者
 地中衆伏藏 金銀諸珍寶
 銅器之所盛 聞香悉能知
 種種諸瓔珞 無能識其價
 聞香知貴賤 出處及所在
 天上諸華等 曼陀曼殊沙
 波利質多樹 聞香悉能知
 天上諸宮殿 上中下差別
 衆寶華莊嚴 聞香悉能知
 天園林勝殿 諸觀妙法堂
 在中而娛樂 聞香悉能知
 諸天若聽法 或受五欲時
 來往行坐臥 聞香悉能知
 天女所著衣 好華香莊嚴
 周旋遊戲時 聞香悉能知
 如是展轉上 乃至於梵天
 入禪出禪者 聞香悉能知

光音偏淨天 乃至有頂
 初生及退沒 聞香悉能知
 諸比丘衆等 於法常精進
 若坐若經行 及讀誦經法
 或在林樹下 專精而坐禪
 持經者聞香 悉知其所在
 菩薩志堅固 坐禪者讀經
 或爲人說法 聞香悉能知
 在在方世尊 一切所恭敬
 愍衆而說法 聞香悉能知
 衆生在佛前 聞經皆歡喜
 如法而修行 聞香悉能知
 雖未得菩薩 無漏法生鼻
 而是持經者 先得此鼻相

- 阿修羅の戯樂も亦知れり 鼻根にかゝる力あり。
 (三) 四方森林のあるところ 獅子虎象蛇さてはまた、
 水牛野牛畜牛あり 鼻もて住處をかれは知る。
 (四) 懐胎したる婦女あらん その胎内に保てるは、
 童男かまた童女かを 香によりてかれは知る。
 (五) 懐胎の婦女をかれは知り 滅(苦)の法をも彼は知る、
 苦痛止みなばその婦女は 端正の子を設くべし。
 (六) 人の多くの願を知る 願の香をかれは嗅ぐ、
 慾染瞋恚また偽善 寂靜心の香を嗅ぐ。
 (七) 又は地中に伏藏あり 錢貨金銀金塊や、
 又黄金の函や壺 菩薩は香によりて嗅ぐ。
 (八) 瓔珞又は摩尼眞珠 種々なる無價の寶物、
 さては輝く無價の物 香によりて一切知る。
 (九) 上天界の多くの花 曼陀羅華また曼殊沙華、

- また園生(樹)の花もあり 賢者は此處より香を嗅ぐ。
 (四) そのもろくの宮殿は 上中下(品)の差別あり、
 種々の色彩を施せり 此處より鼻力によりて嗅ぐ。
 (二) 又園林をかれは知る 善法堂や宮殿や、
 最勝樓閣をかれは知る 諸天子そこに樂めり。
 (三) 此處よりそれらの香を嗅ぎ 香にて諸天子をかれは知る、
 或は事をなし或は坐し 或は聽聞し或は行く。
 (三) 天女は多くの華を著け 華鬘のかざりを莊嚴し、
 處々に快樂し遊行せり 菩薩は香によりて知る。
 (四) 上界は乃至有頂天 梵大梵の宮に行き、
 定に入りまた定を出づる かれらを香によりて知る。
 (五) 光音天の天子等の 退没し新生するを知る、
 菩薩この經を受持すれば 鼻根はかくのごときなり。
 (六) もの比丘善逝の教をば 勵みて住し經行し、

復次常精進。若善男子。善女人。受持是經。若讀。若誦。若解說。若書寫。得千二百舌

功德。若好若醜。若美若不美。及諸苦澀物。在其舌根。皆變成上味。如天甘露。無不美者。若以舌根。於大眾中。有所演說。出深妙聲。能入其心。皆令歡喜快樂。又諸天子天女。釋梵諸天。聞是深妙音聲。有所演說。言論次第。皆悉來聽。及諸龍。龍女。夜叉。夜叉女。乾闥婆。乾闥婆女。阿脩羅。阿脩羅女。迦樓羅。迦樓羅女。緊那羅。緊那羅女。摩睺羅伽。摩睺羅伽女。爲聽法故。皆來親近。恭敬供養。及比丘。比丘尼。

開示讀誦を樂まば 菩薩は一切これを知る。
(四七) 勝者の子なる聲聞は 常に樹下にぞ住みぬべし、
そこに比丘あり人ありと 賢者は香により一切知る。
(四八) 念あり定ある諸菩薩は 開示讀誦を常に好み、
または衆會に法説くを 菩薩は香によりて知る。
(四九) 善逝牟尼は何方にも 聲聞衆にかこまれて、
利樂哀愍法説くを 世尊は香によりて知る。
(五〇) また法を聞く諸有情は 聞きて歡喜の思あり、
勝者の衆會もすべてみな 菩薩は此處にありて知る。
(五一) 天の鼻根は未だ得ず 無漏なる天の鼻根をば、
得べき前相のみなれど かゝる鼻根の力あり。
『又常精進よ、若くは善家男子若くは善家女子のこの法門を受持し説示し開説し書寫するものは千二百の舌功德を具足したる舌根を得べきなり。かれはかくの如くの如き

舌根を以て種々の味を味ひ、種々の味を見、種々の味を舌根に置くにすべて天の勝れたる味を生すべきなり。かれの味ふや決して不可意の味を味はざるべきなり。不可意の味はその舌根に置くに天の味を生すべきなり。又衆會の中に行きて如何なる法を説くも諸の有情は歡喜し満足し極めて満足し隨喜を生すべきなり。微妙可樂意悅甚深にして心に徹する愛すべき音聲を出し、諸有情は満足し歡喜すべきなり。又その法を聞きし者は其微妙可樂意悅の音聲を聞きて諸天も拜見のために禮拜のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。諸天子諸天女も拜見のために禮拜のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。釋羅も梵天も梵の天子も拜見のために禮拜のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。諸の龍も龍女も拜見のために禮拜の

優婆塞。優婆夷。國王。王子。羣臣。眷屬。小轉輪王。大轉輪王。七寶千子。內外眷屬。乘其宮殿。俱來聽法。以是菩薩。善說法故。婆羅門。居士。國內人民。盡其形壽。隨侍供養。又諸聲聞。辟支佛。菩薩。諸佛。常樂見之。是人所在方面。諸佛皆向。其處說法。悉能受持。一切佛法。又能出於深妙法音。

ために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。諸の阿修羅も阿修羅女も拜見のために禮拜のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。諸の迦樓羅も迦樓羅女も拜見のために禮拜のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。諸の緊那羅も緊那羅女も諸の摩睺羅伽も摩睺羅伽女も諸の藥叉も藥叉女も諸の畢舍遮も畢舍遮女も拜見のために承仕のために聽法のために往詣せんと思ふなるべし。かれらは恭敬をなし尊重奉事供養讚嘆崇敬をなすべきなり。比丘比丘尼優婆塞優婆夷も拜見せんとするなるべし。諸の王も王子も大臣も宰相も拜見せんとするなるべし。力ある轉輪王も七寶を具足せる轉輪王も王子大臣後宮を従へて恭敬せんがために拜見せんとするなるべし。かく法師は實の如く如來の語りたまひし如く微妙の法を説くなるべし。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言
是人舌根淨 終不受惡味
其有所食噉 悉皆成甘露
以深淨妙聲 於大眾說法
以諸因緣論 引導衆生心
聞者皆歡喜 設諸上供養
諸天日夜叉 及阿耨羅等
皆以恭敬心 而共來聽法

その餘の婆羅門も居士も市民も村人も乃至命終まで常にその法師に従ふべきなり。如來の聲聞も亦かれらを拜見せんとするなるべし。獨覺も亦かれらを拜見せんとするなるべし。諸佛世尊も亦拜見せんとするなるべし。その善家男子若くは善家女子の住むところには何處にも如來まのあたり法を説きたまひ佛法の器たるべきなり。かれはかくのごとき意悅甚深の法聲を出すべきなり。』

- 其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く。
- (三) その舌根は殊勝にて 更に惡味を味はず、
置けば直ちに天(味)となり 天の味をば具足せり。
 - (四) 典雅微妙の語を出し 聞くべく妙に意に適ふ、
衆會のうちに喜ぶべき 甚深の聲を常に出す。
 - (五) 多俱胝那由他の例を引き 説かれし法を聞くものは、
最上の隨喜を生じてぞ 無量の供養をなしぬべし。

是說法之人 若欲以妙音
遍滿三千界 隨意即能至
大小轉輪王 及千子眷屬
合掌恭敬心 常來聽受法
諸天龍夜叉 羅刹毗舍闍
亦以歡喜心 常樂來供養
梵天王魔王 自在大自在
如是諸天衆 常來至其所
請佛及弟子 聞其說法音
常念而守護 或時爲現身

復次常精進。若善
男子。善女人。受持是

經。若讀。若誦。若解說。
若書寫。得八百身功
德。得清淨身。如淨瑠
璃。衆生喜見。其身淨
故。三千大千世界衆
生。生時死時。上下好
醜。生善處惡處。悉於
中現。及鐵圍山。彌樓
山。摩訶彌樓山等。諸
山王。及其中衆生。悉
於中現。下至阿鼻地
獄。上至有頂。所有及
衆生。悉於中現。若聲
聞。辟支佛。菩薩。諸佛
說法。皆於身中。現其
色像。

(五) 天龍阿修羅冥鬼衆 常時にかれに逢ふを願ひ、
恭敬をなして法を聞く これら一切の功德あり。
(六) 音聲を以て世界をば 欲せば一切充たしめん、
かく聲は微細微妙にて 甚深典雅に愛すべし。
(七) 地上の主なる輪王も 供養のために往詣して、
王子夫人と合掌し 常時に法を聞聽す。
(八) 藥又は常に圍繞せり 龍乾闥婆も(圍繞せり、
畢舍遮畢舍遮女みなごとくに 恭敬し奉事し供養せり。
(九) 梵に屬する諸天たち 大自在(天)自在天子、
釋羅も其他の諸天子も 天女も共に往詣す。
(十) 世を利し愍れむ佛たち 聲聞と共に聲を聞き、
身を現じては守護をなし その說法に満足す。
『又常精進よ菩薩摩訶薩のこの法門を若くは受持し若く
は宣説し若くは指示し若くは書寫するものは八百の身の

功德を得べきなり。その身を清淨にして瑠璃の清淨なる
皮色を有すべし。諸の有様に好愛せらるべし。かれはそ
の清淨の身に於て一切三千大千世界を見るべし又。三千
大千世界に於て或は死し、或は生じ、或は劣り、或は勝れ、(或は)
妙色なるあり、(或は)惡色なるあり。(或は)善趣に、(或は)惡趣に
あり。又輪圍大輪圍迷盧蘇迷盧山王に於て諸有情ありて
住せり。又下方は阿鼻至より上方は乃至有頂に至るまで
諸有情ありて住めり。一切これらをかれば自己の身に於
て見るべきなり。又三千大千世界に於て若くは聲聞若く
は獨覺若くは菩薩若くは如來ありて住せり。かれら如來
の説きたまふ法、かれら如來に承事せる諸の有情をかれば
一切自己の身に於て見るべきなり。蓋しかれば諸有情の
身を得たればなり。其故は如何。かくの如くこの自己の
身は清淨なればなり』

此義。而說偈言

若持法華經 其身甚清淨
 如彼淨瑠璃 衆生皆喜見
 又如淨明鏡 悉見諸色像
 菩薩於淨身 皆見世所有
 唯獨自明了 餘人所不見
 三千世界中 一切諸羣萌
 天人阿脩羅 地獄鬼畜生
 如是諸色像 皆於身中現
 諸天等宮殿 乃至於有頂
 鐵圍及彌樓 摩訶彌樓山
 諸大海水等 皆於身中現
 諸佛及聲聞 佛子菩薩等
 若獨若在衆 說法悉皆現
 雖未得無漏 法性之妙身
 以清淨常體 一切於中現

復次常精進。若善

其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く。

- (六) この勝典を受持すれば その身極めて清淨にて、
 清淨瑠璃より成る如し 諸有情常に愛敬す。
 (七) 鏡面に像を見るごとく 世界をその身に於て見る、
 自存者は餘の有情を見ず 身はかくの如く清淨なり。
 (八) こゝに世界に有情あり 人天阿修羅冥鬼衆、
 さては地獄や鬼畜まで その身に於て影現す。
 (九) 乃至有頂の宮殿より 巖石さては輪圍山、
 雪山須彌山大須彌山 一切その身に影現す。
 (十) かれはその身に佛を見る 聲聞佛子さてはまた、
 多くの菩薩も住みたまひ 衆會に法を説きたまふ。
 (十一) 身の清淨はかくぞある 一切世界は影現す、
 まだ天(身)を得ざれども 生得の身すらかくぞある。
 『又常精進よ菩薩摩訶薩の如來の滅後この法門を受持し

男子善女人。如來滅後。受持是經。若讀。若誦。若解說。若書寫。得千二百意功德。以是清淨意根。乃至聞一偈一句。通達無量無邊之義。解是義已。能演說一句一偈。至於一月。四月。乃至一歲。諸所說法。隨其義趣。皆與實相不相違背。若說俗間經書。治世語言。資生業等。皆順正法。三千大千世界。六趣衆生。心之所行。心所動作。心所戲論。皆悉知之。雖未得。無漏智慧。而其意根。清淨如此。是人有所思惟。籌量言說。皆是佛法。無不真實。亦是先佛。經中所說。

指示し開説し書寫し説話するものは千二百の意の功德を具足すべし。その意根は清淨なるを得べし。かれはその清淨なる意根を以て乃至一偈をだにも聞かんに、即ちその多くの義を知るべきなり。(又その因縁を知り、一箇月の間すらも法を説くべく、四箇月の間一箇年の間すらも法を説くべきなり。而して説くところの法をかれは記憶より忘失せざるべし。世間通途の習俗言語思想をすべて法方便を以て顯現すべきなり。乃至また三千大千世界に於て六趣に生じて輪廻せる諸有情あり。かれら一切の有情の心行動作を知了すべきなり。運動目的企圖を知了し分別すべきなり。かれ未だ聖智を得ざれども、而もその意根の清淨なることかくの如し。又法の解釋を思念して法を説かんに一切は眞實を示せるなり。一切は如來の語なり。一切は過去の諸佛の示せる教門を説けるなり。』

此義。而說偈言
 是人意清淨 明利無穢濁
 以此妙意根 知上中下法
 乃至聞一偈 通達無量義
 次第如法說 月四月至歲
 是世界內外 一切諸衆生
 若天龍及人 夜叉鬼神等
 其在六趣中 所念若干種
 持法華之報 一時皆悉知
 十方無數佛 百福莊嚴相
 爲衆生說法 悉聞能受持
 思惟無量義 說法亦無量
 終始不忘錯 以持法華故
 悉知諸法相 隨義識次第
 達名字語言 如所知演說
 此人有所說 皆是先佛法
 以演此法故 於衆無所畏
 持法華經者 意根淨若斯

其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く。

- (六) 上中下(品)さまざまの法をばこれによりて知る。
- (六) 一偈を聞きて受持するも それにつき多くの義をば知る、一ヶ月四ヶ月一とせも 常に眞假の義をば説く。
- (六) 世界の内にまた外に 多くの有情ありて住む、天人阿修羅冥鬼衆 或は龍あり傍生あり。
- (七) 六趣に住める有情等の 種々の思を一切^{すべて}みな、この經を受持し讚嘆する 賢者は一時に知れるなり。
- (七) 百福相ある御佛の 一切世間に法を説く、清淨の聲をかれは聞き 其所説をも領會せり。
- (七) 多くの勝法を思念して 常にこれを語るなり、かくて躊躇は更になし これ經受持の功德なり。
- (七) 集合結合をかれは知り 一切諸法を辨別す、

雖未得無漏 先有如是相
 是人持此經 安住希有地
 爲一切衆生 歡喜而愛敬
 能以千萬種 善巧之語言
 分別而演說 持法華經故

- また義と釋義とを知りて 知れるところを宣説す。
- (四) 過去世の聖者の長き夜を 説きたまひたる經典は、衆會のうちに恐れなく かれの常時に説く法なり。
- (五) この經を受持し宣説する かれの意根はかくぞある、未だ全智を得ざれども これその(得べき)前相なり。
- (六) 法説くすべての有情等は 阿闍梨の地にぞ住すなる、俱胝の釋義に通達し 善逝の經を受持する。

右聖法蓮華法門に於て法師功德六處清淨品第十八

妙法蓮華經

常不輕菩薩品第十九

爾時佛告得大勢菩薩摩訶薩。汝今當知。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。持法華經者。若有惡口。罵詈誹謗。獲大罪報。如前所說。其所得功德。如向所說。眼耳鼻舌身意清淨。

得大勢。乃往古昔。過無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。有佛名威音王。如來。應供。正徧知。明行。足。善逝。世

常不輕菩薩品第十九

四一八

常不輕菩薩品第十九

時に世尊は大勢至菩薩摩訶薩に告げて曰く『大勢至よ。當にこれによりて知るべきなり。若しこの法門を厭ふものありてかくの如き經典を受持する比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷を罵り辱しめ。虚偽龜惡の語を以て向はんに。極惡の業報あるべきこと言説のよく述ぶるところにあらざるなり。されどこの經典を受持し。宣説し。指示し。他人に教へ。廣く開説するものは。樂しき果報あるべく。眼耳鼻舌身意の清淨を得べきことわが已に上に説けるが如きなり。』

『大勢至よ。過去の世無數劫。尚無數劫。廣博。無量。不可思議なる以前の時に。威音聲王 Bhīṣṇagaurīśvararāja 如來。應供。正等覺。明行。足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。ありて世に出でたまへり。劫を離樂 Vīribhoga と云ひ。世界を大出現

間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。切名離衰。國名大成。其威音王佛。於彼世中。爲天人阿耨羅說法。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。因阿耨多羅三藐三菩提。說應六波羅密法。究竟佛慧。得大勢。是威音王佛。壽四十萬億那由他。恒河沙劫。正法住世劫數。如一闍浮提微塵。像法住世劫數。如四天下微塵。其佛饒益衆生已。然後滅

常不輕菩薩品第十九

四一九

Mahāsamghava と云へり。大勢至よ。かの佛はこの大出現世界に於て。天人。阿修羅を含める世間の前に法を説きたまへり。諸の聲聞のために。四聖諦を行じ。十二緣起より出でて生。老。病。死。憂。悲。苦。惱のわづらひを超越し。涅槃の果を得べき法を説き。諸の菩薩摩訶薩のために。六波羅密を行じ。無上なる正等覺を得て。如來の知見に住すべき法を説きたまへり。時に又大勢至よ。世尊威音聲王如來。應供。正等覺者の壽命は四十俱胝那由他。百千恒河沙劫なり。滅後正法の住する事闍浮提微塵數に等しき俱胝那由他。百千劫の間なり。像法の住する事。四闍浮提微塵數にしき俱胝那由他。百千劫の間なり。時に大勢至よ。この大出現世界に於て。威音聲王如來。應供。正等覺者の滅後。像法盡くる時。また他の威音聲王如來。應供。正等覺者ありて世に出でたまへり。大勢至よ。かくの如く次第にこの大出現世界に於て。二十俱胝那由他。百千の威

度。正法像法。滅盡之後。於此國土。復有佛出。亦號威音王。如來。應供。王徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。如是次第。有二萬億佛。皆同一號。最初威音王如來。既已滅度。正法滅後。於像法中。增上慢比丘。有大勢力。爾時有一菩薩比丘。名常不輕。得大勢。以何因緣。名常不輕。是比丘。凡有所見。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。皆悉禮拜讚歎。而作是言。我深敬汝等。不敢輕慢。

所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作佛。而是比丘。不專讀誦經典。但行禮拜。乃至遠見四衆。亦復故往。禮拜讚歎。而作是言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。故四衆之中。有生瞋恚。心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。從何所來。自言我不輕汝。而與我等授記。當得作佛。我等不用。如是虛妄授記。如此經歷多年。常被罵詈。不生瞋恚。常作是言。汝當作佛。說是語時。衆人或以杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高聲唱言。我不敢輕於汝等。汝

音聲王と名くる如來應供正等覺者ありて出でたまへり。大勢至よ、この大最初の威音聲如來應供正等覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊の滅後正法盡き像法も亦終らんとする時多くの増上慢の比丘ありて教を謗れり。時に比丘あり。常不輕 Sadāparihita 菩薩摩訶薩と名く。大勢至よ、如何なる故を以て、かの菩薩摩訶薩は常不輕と名けらるゝや。大勢至よ。蓋しかの菩薩摩訶薩はかれに近づき來る比丘比丘尼優婆塞優婆夷を見るときに「尊者たちよ、われは卿等を輕んせじ、卿等は輕んせらるべきものにあらず、そは卿等すべてみな菩薩の行を行じて如來應供正等覺者となるべければなり」と云ふを常とすればなり。大勢至よ、かくの如くかの菩薩摩訶薩は比丘なりといへども、教示をなさず、讀誦をもなさざるなり。たゞ比丘比丘尼優婆塞優婆夷等のあなたの方より近づき來るを見れば、呼

びかけて「姉妹よ、われは卿等を輕んせじ、卿等は輕んせらるべきものにあらず、そは卿等すべてみな菩薩の行を行じて如來應供正等覺者となるべければなり」と語るのみなり。時に大勢至よ、かの菩薩摩訶薩かくの如く比丘比丘尼優婆塞優婆夷に呼びかけしに一切は極めて怒り、惡み、不機嫌を示して罵り辱しめたり。曰く、「何故にこの比丘は請はれざるにわれに對ひて輕んする心なしと宣言するや。かれ望まれざるに虚言をなしてわれらを無上なる正等覺に授記するは自らわれらを輕んするものなり」と。大勢至よ、時にかの菩薩摩訶薩は多年の間、かくの如く怒を受け罵られたり。されど毫も怒らず、憎惡の心を生ぜざりき。かれ呼びかくるごごにかれらは瓦石杖木を投げたり。されどかれは聲を張り上げて遠きあなたより「われは卿等を輕んせじ」と呼びかけぬ。常に呼びかけられたるかれら

等皆當作佛。以其常作是語故。增上慢比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。號之爲常不輕。

是比丘。臨欲終時。於虛空中。具聞威音王佛。先所說法華經。二十千萬億。悉能受持。即得如上。眼根清淨。耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已。更增壽命。二百萬億。那由佗歲。廣爲人說。是法華經。於時增上慢四衆。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。輕賤是人。爲作不輕名者。見其得大神通力。樂說辯力。大善寂力。聞其所說。皆信伏隨。

增上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷はかれに常不輕の名を與へたり。

『時に大勢至よ、常不輕菩薩摩訶薩は命終近づき死期現前せる時、この妙法蓮華の法門を聞けり。世尊威音聲王如來應供正等覺者は二十たび二十俱胝那由他百千の偈を以てこの法門を説き、常不輕菩薩摩訶薩は死期の現前せる時、空中に聲ありてこの法門を聞きたりき。何人の語るにもあらざる空中の聲を聞きて、この法門を攝受し、而して眼の清淨、耳の清淨、鼻の清淨、舌の清淨、身の清淨、意の清淨を得たり。これらの清淨を得ると共にまた二十俱胝那由他百千歳の間、自身の壽命を保ちてこの妙法蓮華の法門を開説せり。而して前にかれの「われ卿等を輕んせじ」と呼びかけ、またかれに常不輕の名を與へしかれら増上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷はかれの廣大なる神通力と功德力と智慧力

從。是菩薩。復化千萬億衆。令住阿耨多羅三藐三菩提。

命終之後。得值二千億佛。皆號日月燈明。於其法中。說是法華經。以是因緣。復值二千億佛。同號雲自在燈王。於此諸佛法中。受持讀誦。爲諸四衆。說此經典。故得是常眼清淨。耳鼻舌身意。諸根清淨。於四衆中說法。心無所畏。得大勢。是常不輕菩薩摩訶薩。供養如是。若千諸佛。恭敬尊重讚歎。種種善根。於後復

をを見てみな法を聞かんがための從者となり、これら一切とその他の多俱胝那由他百千の衆生はみな無上なる正等覺に住せしめられたり。

『時に大勢至よ、かの菩薩摩訶薩は命終の後、二十俱胝の月聲王 Candharivarāja と名くる如來應供正等覺者に值ひて一切この法門を開説したり、又かれはこの宿世の善根によりて、次第に二十俱胝那由他百千の雷音王 Dundubhisvarāja と名くる如來應供正等覺者に值ひ、一切この法門を従ひ聞きて四衆に開説せり。又かれはこの宿世の善根によりて次第に二十俱胝百千の雲聲王 Meghasvarāja と名くる如來應供正等覺者に值ひて一切この妙法蓮華の法門を従ひ聞きて四衆に開説せり、又かれは一切かくの如き眼の清淨、耳の清淨、鼻の清淨、舌の清淨、身の清淨、意の清淨を具足せり。』

『時に又大勢至よ、常不輕菩薩摩訶薩は多俱胝那由他百千

值。千萬億佛。亦於諸佛法中。說是經典。功德成就。當得作佛。得大勢。於意云何。爾時常不輕菩薩。豈異人乎。則我身是。若我於宿世。不受持讀誦此經。爲他人說者。不能疾得。阿耨多羅三藐三菩提。我於先佛所。受持讀誦此經。爲人說故。疾得阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。彼時四衆。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。以嗔恚意。輕賤我故。二百億劫。常不值佛。不聞法。不見僧。干劫於阿鼻地獄。受大苦惱。畢

是罪已。復遇常不輕菩薩。教化阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。於汝意云何。爾時四衆。常輕是菩薩者。豈異人乎。今此會中。跋陀婆羅等。五百菩薩。師子月等。五百比丘。尼思佛等。五百優婆塞。皆於阿耨多羅三藐三菩提。不退轉者。是得大勢。當知是法華經。大饒益。諸菩薩摩訶薩。能令至於阿耨多羅三藐三菩提。是故諸菩薩摩訶薩。於如來滅後。常應受持。讀誦。解說。書寫。是經。

の如來を尊重し、恭敬し、奉事、供養、尊崇、禮敬をなし、又他の多俱胝那由他百千の佛を尊重し、恭敬し、奉事、供養、尊崇、禮敬をなし、かれら一切に於てこの妙法蓮華の法門を從ひ聞き而る後、宿世の善根の調熟するに従ひ、無上なる正等覺を證得せり。時に大勢至よ世尊威音聲王如來應供正等覺者の許にありて其時分に四衆の中に常不輕と名くる菩薩摩訶薩あり、又等しく多くの如來應供正等覺者に值ひし常不輕菩薩摩訶薩ありとの疑惑、不審、猶豫汝にあらん。されど大勢至よ、かくの如きの觀をなすなかれ。その故は如何、大勢至よ、われこそはその時分に於て、常不輕と名くる菩薩摩訶薩なりしなり。大勢至よ、われ若し曾てこの法門を攝受し執持せざりしならば争でか速かに無上なる正等覺を證すべきや。大勢至よ、われかくの如く速かに無上なる正等覺を證せしは過去の如來應供正等覺者の前にありてこの法門

を受持し、宣説し、指示せしを以てなり。大勢至よ、常不輕菩薩摩訶薩が世尊の許にありて「われ卿等を輕んせし、卿等はいみな菩薩の行を行じ如來應供正等覺者となるべきなり」と呼びかけてこの法門を説き、而してこの菩薩の前に害心を起せしかれら幾百の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等は二十俱胝那由他百千劫の間、毫も如來を見ず、法の聲、僧の聲を聞かず、一萬劫の間阿鼻の大地獄に苦惱を受けたり、而してかれらすべては業障の盡きたる後、かの菩薩摩訶薩のために無上なる正等覺に於て調熟せしめられたり。時に又、大勢至よ、その時分に於てかの菩薩摩訶薩を叱咤し嘲笑せしかれら有情は誰なりしかの疑惑、不審、猶豫は汝にあるべきなり。大勢至よ、かれらは實にこの會に於て賢護 *Bhadrāpala* を上首とせる五百の菩薩、師子月 *Simhaśrī* を上首とせる五百の比丘尼、善逝思 *Ugatāśeṣā* を上首とせる五百の優婆

爾時世尊欲重宣此義而說偈言
過去有佛號威音王
神智無量將導一切
天人龍神所共供養
是佛滅後法欲盡時
有一菩薩名常不輕
時諸四衆許著於法
不輕菩薩往到其所
而語之言我不輕汝
汝等行道皆當作佛
諸人聞已輕毀罵詈

不輕菩薩能忍受之
其罪畢已臨命終時
得聞此經六根清淨
神通力故增益壽命
復爲諸人廣說是經
諸著法衆皆蒙菩薩
教化成就令住佛道
不輕命終值無數佛
說是經故得無量福
漸具功德疾成佛道
彼時不輕則我身是
時四部衆著法之者
聞不輕言汝當作佛
以是因緣值無數佛
此會菩薩五百之衆
并及四部清信士女
今於我前聽法者是
我於前世勸是諸人
聽受斯經第一之法

夷にしてみな無上なる正等覺に於て不退轉を得たり。大勢至よ、この法門を受持し、宣説し、指示するはかくの如き大なる利あり。諸の菩薩摩訶薩をして無上なる正等覺を證得せしむ。大勢至よ、この故に菩薩摩訶薩は如來の滅後常にこの法門を受持し、宣説し、指示し、開説すべきなり。其時世尊はこれらの伽陀を説て曰く。

- (一) 憶ふ過去世に佛在す 威音王佛と申しけり、大威力ありて人天と 藥叉羅刹も恭敬せり。
- (二) 其佛滅度したまひて 正法極めて衰へき、其時菩薩の一比丘あり 常不輕とぞ名けたる。
- (三) かれ他の比丘の許に行き 或は著法の比丘を見て、われ卿等を輕んせじ 無上菩提を行すれば。
- (四) 常にかくこそ語りしか かれらは毀謗し罵詈しけり、臨終の期近づきて 此經典を聞き得たり。

- (五) かくて聖者は死せずして 長き壽命を保ちつゝ、世尊の教に此經を 宣説せんと志しき。
- (六) 一切數多著法の かれらを菩提に導きつゝ、菩薩は此に命終して 千俱胝佛に承事しき。
- (七) 宿世に積める福德と 常に説きたる經のため、菩提を證りし勝者の子 即ちわが身釋迦牟尼なり。
- (八) 法に著せる諸比丘たち 比丘尼優婆塞さてはまた、優婆夷は聖者の教にて 菩提に勧め入れられし。
- (九) 多俱胝の佛を拜したる 五百の數を下らざる、比丘や比丘尼さてはまた 優婆夷等はわが前にあり。
- (一〇) 無上の法をわれに聞き 一切は成熟せられたり、一切賢者はわが滅後 無上の經を受持すべし。
- (一一) 不思議多俱胝劫經ても かくる御法は聞き難し、百俱胝の佛は出でますも この經典は宣べられじ。

開示教人 令住涅槃
世世受持 如是經典
億億萬劫 至不可議
時乃得聞 是法華經
億億萬劫 至不可議
諸佛世尊 時說是經
是故行者 於佛滅後
聞如是經 勿生疑惑
應當一心 廣說此經
世世值佛 疾成佛道

常不輕菩薩品第十九

四二八

(三) されば自存者自からの 説きしこの法聞きたると、
屢々佛に値ひたるは 滅後に經を説き宣べよ。

右聖妙法蓮華法門に於て常不輕品第十九

妙法蓮華經

如來神力品第二十一

爾時于世界微塵
等菩薩摩訶薩。從地
涌出者。皆於佛前。一
心合掌。瞻仰尊顏。而
白佛言。世尊。我等於
佛滅後。世尊分身。所
在國土。滅度之處。當
廣說此經。所以者何。
我等亦自欲得是真
淨大法。受持讀誦。解
說書寫。而供養之。

如來神力品第二十

其時地より出現せし三千世界微塵數に等しき一切かれ
ら俱胝那由他百千の菩薩は世尊に面して合掌を傾け、世尊
に白して曰く、『世尊よ、われらは如來の滅後、世尊の佛國な
る世尊の滅度せる一切佛國に於て到るところこの法門を
開説すべきなり。世尊よ、われらは實にこの最勝の法門を
宣説し、指示し、開説し、書寫せんと願へり』と。

時に文殊師利を上首とせる俱胝那由他百千の菩薩、この
娑婆世界に住める比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天龍、藥叉、乾闥
婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人と恒河沙に等しき
多くの菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ、われらも
亦世尊の滅後この法門を開説すべきなり。世尊よ、われら
は身を現せずして *Adiṣṭanāmahāvaya* 虚空の中に聲を擧げ

如來神力品第二十

四二九

爾時世尊。於文殊師利等。無量百千萬億。舊住娑婆世界。菩薩摩訶薩。及諸比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。一切來前。現大神力。出廣長舌。上至梵

世。一切毛孔。放於無量。無數色光。皆悉偏照。十方世界。衆寶樹下。師子座上諸佛。亦復如是。出廣長舌。放無量光。

釋迦牟尼佛。及寶樹下諸佛。現神力時。滿百千歲。然後還攝舌相。一時譬欬。俱共彈指。是二音聲。偏至十方。諸佛世界。地皆六種震動。其中衆生。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。以佛神力故。皆見此娑婆世界。無量無邊。

未だ善根を植わざる有情をして善根を植わしむべし』と。時に世尊はかれら上に擧げたる菩薩摩訶薩の群集、大群集、群集の親教師、導師なる殊勝行 Vīśiṣṭārīta に告げて曰く『善きかな善きかな、殊勝行よ、汝等のなせるところは實に其當を得たり。汝等が如來によりて調熟せしめられしはこの法門のためなり』と。

時に世尊釋迦牟尼如來とかの滅度せる多寶如來應供正等覺者は塔中の師子座に坐して共に微笑を現じ、口を開きて舌根を出し、その舌根は乃至梵の世界に達せり。而してその舌根より多俱胝那由他百千の光明は出でたりき、その光明の中、一々の光明より、多俱胝那由他百千の菩薩ありて出現せり。その身金色にして三十二の大丈夫の相を具し蓮華藏師子座に坐せり。かれら菩薩は諸方百千の世界に徧滿して、一切諸方の虚空の中に住して法を説けり。かく

世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者と多寶如來應供正等覺者の舌根によりて神變を現せし如く、他の俱胝那由他百千の世界より來集して各々寶樹の下の師子座の上に坐せるかれら一切の如來應供正等覺者も亦舌根によりて神變を現せり。

時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者とかの一切の如來應供正等覺者は滿百千歳の間、その神變の行をなせり。かくて百千歳の後、かれら如來應供正等覺者は舌根を收め、その同一刹那同一時分に於て、一切(如來)は大なる咳聲をなし又一の彈指の聲をなせり。その大咳聲と大彈指聲によりて乃至十方に於ける俱胝那由他百千の佛國はすべて、震ひ、甚しく震へり。動き、頗る動き、甚しく動けり、轉じ、頗る轉じ、甚しく轉せり。かれら一切の佛國に於て、乃至一切の有情天龍、藥叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人に至

百千萬億。衆寶樹下。師子座上諸佛。及見釋迦牟尼佛。共多寶如來。在寶塔中。坐師子座。又見無量無邊。百千萬億。菩薩摩訶薩。及諸四衆。恭敬圍繞。釋迦牟尼佛。既見是已。皆大歡喜。得未曾有。即時諸天。於虛空中。高聲唱言。過此無量無邊。百千萬億。阿僧祇世界。有國名娑婆。是有佛。名釋迦牟尼。今爲諸菩薩摩訶薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。汝等當深心隨喜。亦當禮拜供養。釋迦牟尼佛。彼諸衆生。聞虛空

中聲已。合掌向娑婆世界。作如是言。南無釋迦牟尼佛。以種種華香。瓔珞。幡蓋。及諸嚴身之具。珍寶妙物。皆共遙散。娑婆世界。所散諸物。從十方來。譬如雲集。變成寶帳。徧覆此間。諸佛之上。于時十方世界。通達無礙。如一佛土。

爾時佛告。上行等菩薩大衆。諸佛神力。如是無量無邊。不可思議。若我以是神力。

るまで、すべて佛の威神力によりてかしこにありてこの娑婆世界を見たりき。かれらは一切寶樹の下に、各々師子座に坐せる俱胝那由他百千の如來と、釋迦牟尼如來應供正等覺者と滅度して大寶塔の中、師子座の上に世尊釋迦牟尼如來と共に坐せる世尊多寶如來應供正等覺者と四會の衆とを見たりき。見て奇異、希有、未曾有なるを得たりき。而して空中に聲ありて聞わたり。『諸聖よ、無量無數俱胝那由他百千の世界を過ぎて娑婆と名くる世界あり。そこに釋迦牟尼と名くる如來應供正等覺者あり、今しも妙法蓮華と名くる菩薩の教誡なる一切諸佛の攝受なる大方等經典の法門を菩薩摩訶薩のために開說せり。汝等信樂を以てこれを隨喜せよ。而して世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者と世尊多寶如來應供正等覺者に敬禮せよ』と。

しこにありて合掌して。『南無世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者』の語を唱へたりき、而して釋迦牟尼世尊と多寶如來ととの説きたまへる妙法蓮華の法門を供養せんがために、種々の華、塗香、燒香、華鬘、膏油、香粉、衣服、傘蓋、幢、幡、旗、旗をこの娑婆世界に向ひて投じたりき。又種々の嚴飾、粧飾、大小頸飾、摩尼寶等を投じたりき。これらの投げられたる華、塗香、燒香、華鬘、膏油、香粉、衣服、傘蓋、幢、幡、旗等は、この娑婆世界に來りき。而してこれらの華、塗香、燒香、華鬘、膏油、香粉、衣服、傘蓋、幢、幡、旗等の積聚はこの娑婆世界并に他の俱胝那由他百千の世界に於て、如來の座せるそれら一切の上に一團となり、普ねく虚空の中に大華蓋となりて懸れり。時に世尊は殊勝行を上首とせるかれら菩薩摩訶薩に告げて曰く。『善家男子たちよ、如來應供正等覺者には不思議の力用あり、善家男子たちよ、たとひわれ多俱胝那由他百千

於無量無邊百千萬億阿僧祇劫。爲囑累故。說此經功德。猶不能盡。以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說。是故汝等。於如來滅後。應當一心受持。誦。解。說。書。寫。如。說。修。行。所。在。國。土。若。有。受。持。誦。解。說。書。寫。如。說。修。行。若。經。卷。所。住。之。處。若。於。園。中。若。於。林。中。若。於。樹。下。若。於。僧。坊。若。自。衣。舍。若。在。殿。堂。若。山。谷。曠。野。是。中。皆。應。起。塔。供。養。所。以。者。何。當。知。是。處。即。是。道。場。諸。佛。於。此。得。阿。耨。

劫の間、この法門の囑累の爲に、種々の法門によりて多くの教門を説くと雖も、之を説きつゝ、その功德を盡す能はざるべし。善家男子たちよ、これを要するに、われこの法門に於て一切諸佛の法、一切諸佛の威力、一切諸佛の祕密一切諸佛の甚深の義を示せり。故に善家男子たちよ、汝等は如來の滅後、この法門を尊敬し、受持し、指示し、書寫し、宣暢し、開説し、修行し、供養すべきなり。善家男子たちよ、この法門を宣暢し、開説し、讀誦し、これを經卷となす地方にありては、或は花園或は精舍或は家屋或は森林或は村落、或は樹下、或は宮殿、或は舍宅、或は洞窟、いづくにもあれ、その地方に於て如來を供養して塔を作るべし。其故は如何。その地方は一切の如來の道場なりと知るべきなり。而してその地方に於て一切の如來應供正等覺者は無上なる正等覺を證せりと知るべきなり。又その地方に於て、一切の如來は法輪を轉す

多羅三藐三菩提。諸佛於此。轉於法輪。諸佛於此。而般涅槃。

爾時世尊。欲重宣

此義。而說偈言

諸佛救世者 住於大神通
爲悅衆生故 現無量神力
舌相至梵天 身放無數光
爲求佛道者 現此希有事
諸佛警歎聲 及彈指之聲
周聞十方國 地皆六種動
以佛滅度後 能持是經故
諸佛皆歡喜 現無量神力
囑累是經故 讚美受持者
於無量劫中 猶故不能盡
是人之功德 無邊無有窮
如十方虛空 不可得邊際
能持是經者 則爲已見我
亦見多寶佛 及諸分身者

べく、而してその地方に於て一切の如來は滅度すべしと知るべきなり。』

其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く。

- (一) 世を利する法不思議にて 神通に住したまひけり、神通を無邊の眼に現じ 一切有情を喜ばす。
- (二) 一切世界に舌を出し 千條の光を放ちつゝ、菩提に立たしめんために 希有なる神通を現じけり。
- (三) 諸の佛警咳し 又一彈指の聲をなし、世界いづれのごころにも 一切これを知らしむる。
- (四) これら神變の功德をば 利樂哀愍のため現じけり、その時かれらは歡喜して 滅後に經典を受持すべし。
- (五) 世界導師の滅度の後 この妙典を受持する、善逝の子を讚嘆し 多千劫を語ることも。
- (六) その功德をば盡し得じ 十方空界の如くなり、

又見我今日	教化諸菩薩
能持是經者	令我及分身
滅度多寶佛	一切皆歡喜
十方現在佛	并過去未來
亦見亦供養	亦令得歡喜
諸佛坐道場	所得祕要法
能持是經者	不久亦當得
能持是經者	於諸法之義
名字及言辭	樂說無窮盡
如風於空中	一切無障礙
於如來滅後	知佛所說經
因緣及次第	隨義如實說
如日月光明	能除諸幽冥
斯人行世間	能滅衆生闇
教無量菩薩	畢竟住一乘
是故有智者	聞此功德利
於我滅度後	應受持斯經
是人於佛道	決定無有疑

如來神力品第二十

四三六

- 妙經常に受持する かれらの功德は不思議なり。
- (七) 我もすべての諸導師も 滅度の世尊も見られたり、
一切多くの菩薩たち 四會の衆生も見られたり。
- (八) かれらは我に奉侍しけり 又この一切の世尊にも、
滅度せしかの勝王も 十方餘佛にも奉侍しけり。
- (九) 十方に安立したまへる 過去當來の佛たち、
この經受持せば一切みな 拜見し供養せられたり。
- (一〇) 如法のこの經を受持すれば 最上丈夫の祕智に入り、
道場に於て思惟する 理を速かに解了せむ。
- (一一) 勝れしこの經受持すれば その辨才は邊りなく、
風の障なきごとくにて 法の義と言辭を知らむ。
- (一二) 有情のために説かれたる 經典の因縁を常に知る、
世尊この世を去りし後 經典の眞義をかれは知る。
- (一三) かれは日月の如くにて 光明朗かに照すなり、

その行くところ世間には 多くの有情を誘化せり。
(一四) されば智慧ある菩薩たち かゝる利益を聽聞し、
わが滅後この經を受持せば 菩提を得んこと疑なし。

右聖妙法蓮華法門に於て如來神力行品第二十

如來神力品第二十

四三七

剎阿直哆波隸輸地
歐究隸牟究隸阿羅
隸波羅隸首迦差阿
三磨三履佛駄毗吉
梨表帝達磨波利差
帝僧伽涅羅沙彌婆
舍婆舍輸地曼哆羅
又夜多郵樓哆郵樓
哆橋舍略惡又邏惡
又治多治阿婆盧阿
摩若那多夜
世尊。是陀羅尼神
呪。六十二億。恒河沙
等。諸佛所說。若有侵
毀。此法師者。則爲侵
毀。是諸佛已

陀羅尼品第二十一
四四〇
レ、ムトクレ、アラデー、バラデー、スカインクシ、アサマサ
メ、ブツドハヴイロキテー、ドハルマバリクシテー、サ
ングハニルグホーシヤニ、ニルグホーシヤニ、プハヤーブ
ハヤヴイシヨドハニ、マントレー、マントラークシヤヤテ
、ルテ、ルタカウシヤルエ、アクシヤエ、アクシヤヤ
ヴァナターエ、ヴァックレ、ヴァロード、アマヌヤナター
エ、スヴァーハー』 Anye manye nane mamane chte carite same
samitā viśānte makte muktame same avīsame samasame jaye kṣaye akṣaye
akṣiṇe śānte samite dhāraṇī aloka bhāṣe pratya ve kṣaṇi nihiru abhyantar-
anivṛte abhyantaraparīśuddhi utkule muktule arade parade sukṛṅkṣi
asamasame Baddhavi lokite Dharmaparīkṣite Saṅghanirghoṣaṇi nirghoṣa-
nī bhayābhayaviśohani mantrē mantrākṣayate rute rutakauślye akṣa-
ye akṣayavanatāye vakkule valoda amanyanātāye svāhā『世尊よ、これ
らの眞言陀羅尼句は六十二億恒河沙に等しき諸佛世尊の説

時釋迦牟尼佛。讚
藥王菩薩言。善哉善
哉。藥王汝愍念擁護。
此法師故。說是陀羅
尼。於諸衆生。多所饒
益。
爾時勇施菩薩。白
佛言。世尊。我亦爲擁
護。讀誦受持。法華經
者。說陀羅尼。若此法
師。得是陀羅尼。若夜
叉。若羅刹。若富單那。
若吉蘆。若鳩槃荼。若
餓鬼等。伺求其短。無
能得便。即於佛前。而

きたまひしごころなり。かくの如き法の宣説者、かくの如
き經典の受持者を侵すものはかれら一切諸佛世尊を毀傷
するものなり』云。
其時、世尊は藥王菩薩摩訶薩に善哉を唱へたまへり。『善
きかな、善きかな、藥王よ、有情の義理のために、有情の哀愍を
生せんがために、守衛庇保擁護をなして、陀羅尼句は説かれ
たり』云。
其時施勇 Pradhānāsura 菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く。
『世尊よ、われも亦かくの如き法門の宣説者の義利のために
陀羅尼句義を興へむ。かくてかくの如き法門の宣説者に
ついて(乗すべき)便を伺ひ、便を求むる如何なるものにもそ
の便を得ざらしめむ。即ち、夜叉 yakṣa 羅刹 rakṣasa 臭鬼 pit-
tana 魍魅鬼 kṛtya 鳩槃荼 kumbhāṇḍa 餓鬼 preta の如き(乗すべ
き)便を伺ひ便を求むるものにその便を得せしめざるべし』

説呪曰

座隸摩訶座隸郁
枳目枳阿隸阿羅婆
第涅隸第涅隸多婆
第伊綴泥章綴泥涅
隸擗泥涅章擗婆底
世尊。是陀羅尼神
呪。恒河沙等。諸佛所
説。亦皆隨喜。若有侵
毀。此法師者。則爲侵
毀。是諸佛已

爾時毘沙門天王
護世者。白佛言。世尊。
我亦爲愍念衆生。擁
護此法師故。説是陀

尼。即説呪曰

阿梨那梨窳那梨
阿那窳那履拘那履。
世尊。以是神呪。擁
護法師。我亦自當。擁
護持是經者。令百由
旬內。無諸衰患。

爾時持國大王。在
此會中。與千萬億。那
由佗。乾闥婆衆。恭敬
圍繞。前詣佛所。合掌
白佛言。世尊。我亦以
陀羅尼神呪。擁護持
法華經者。即説呪曰。
阿伽彌伽彌置利
乾陀利旃陀利摩羅
耆常求利浮樓莎柁
類底

と。時に施勇菩薩摩訶薩は乃ちこれらの陀羅尼眞言句を
説て曰く。『ジュヅアレー、マハージュアレー、ウツケトッ
ツク、ムツク、アデー、アダーヴアテイ、ヌリトエー、ヌリトヤ
ヴァアテイ、イツテイニ、ヅイツテイニ、チツテイニ、ヌリトエー
ニ、ヌリトヤーヴアテイ、スヴァアーハー』。』 *Jvale mahāyale ukke
tukku mukku ade ade adāvati nitye nityāvati itini viṭṭini cīṭṭini nī-
yeni nityāvati svāhā*
『世尊よ、これらの陀羅尼句は恒河沙に等しき如來應供正
等覺者によりて説かれその隨喜せしところなり。かくの
如き法門の宣説者を侵すものは、かれら一切の如來を毀傷
するものなり』云。

其時毗沙門 *Vaiśravaṇa* 大王は世尊に白して曰く『世尊、
よ、われも亦かれら法門の宣説者の利のため、樂のため、哀愍
のため、守衛庇保護のために陀羅尼句を説かむ』曰く、『ア
ツテ、タツテ、ナツテ、ヴァナツテ、アナデー、ナーデー、
クナデー、スヴァアーハー』 *Aṭṭe taṭṭe natte vahatte amade nāṭi
kunnādi svāhā*』世尊よ、われはこの陀羅尼を以てかれら法門の
宣説者なる人々の守護をなすこと百由旬ならむ。かくて、
かれらかくの如き經典の受持者なる善家男子若くは善家
女子の守護はなされ、吉祥はなさるべきなり』云。

其時毗盧擇迦 *Vīrūḍhaka* 大王は千俱胝那由他の鳩槃荼に
圍繞せられてその會に來れり。かれは座より起ちて、一肩
に上衣を着け、世尊のところに合掌を向け、世尊に白して曰
く、『世尊よ、われも亦衆生の利のため、かれらかくの如き法
門の宣説者經典の受持者なる人々の守衛庇保護のため
に陀羅尼句を説かむ』曰く『アガチー、ガチー、ガウリ、ガ
ンドハリー、チャンダーリ、マータンギ、ブツカシ、サンクレー、
ヴルーサリ、シシ、スヴァアーハー』 *Agāṇe gaṇe gauri gandhārī can-*

女形。乃至夢中。亦復莫惱。

即於佛前。而說偈言

若不順我呪 惱亂說法者
頭破作七分 如阿梨樹枝
如殺父母罪 亦如壓油殃
斗秤欺誑人 調達破僧罪
犯此法師者 當獲如是殃

諸羅刹女。說此偈已。白佛言。世尊。我等

童子像、童女像の惱害をなすのことはりあることなかるべし』と。

其時、かれら羅刹女は同音合唱して伽陀を以て世尊に白して曰く。

- (一) もしこの眞言句を聞きて 法宣説者を障礙せば、
頭は蘭香の芽のごとく 裂けて七分すべきなり。
 - (二) 法宣説者を障礙せば 母を害ふものゝ行き、
父を害ふものゝ行く (惡道にこそ行くべけれ。
 - (三) 法宣説者を障礙せば 油を搾るものゝ行き、
油を詐るものゝ行く (惡道にこそ行くべけれ。
 - (四) 法宣説者を障礙せば 綿を詐るものゝ行き、
秤を詐るものゝ行く (惡道にこそ行くべけれ。
- かくの如く語りし後、臯誦を上首とせるかれら羅刹女は世尊に白して曰く。『われらも亦かくの如きわれら法の宣

亦當。身自擁護。受持讀誦。修行是經者。令得安穩。離諸哀患。消衆毒藥。佛告諸羅刹女。善哉善哉。汝等但能擁護受持法華名者。福不可量。何況擁護。具足受持。供養經卷。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。旛蓋伎樂。然種種燈。蘇燈。油燈。諸香油燈。蘇摩那華油燈。瞻蔔華油燈。婆師迦華油燈。優鉢羅華油燈。如是等。百千種供養者。臯誦。汝等及眷屬。應當擁護。如是法師。說此陀羅尼品時。六萬八千人。得無生法忍。

説者について守護をなし、吉祥をなさむ。杖を避け毒を消すことを得せしめむ』と。かくの如く語りし時、世尊はかれら羅刹女に告げて曰く。『善きかな、善きかな、姉妹よ、汝らはかれら法の宣説者にしてたごひこの法門の名號を受持するだもなほ守衛庇保擁護をなす況んやこの法門の全分を受持し、若くは經卷となして恭敬し、諸華塗香、燒香、華鬘、香油、香粉、衣服、傘蓋、幢幡、旗、油燈、香油燈、瞻蔔迦油燈、婆師迦油燈、青蓮華油燈、須摩那油燈、かくの如き多種百千種の供養を以て、恭敬し尊重せんをや。臯誦よ、かれらは汝及び眷屬によりて守護せらるべきなり』と。

時にこの陀羅尼品の説かれしに當りて六萬八千の衆生は無生法忍を得たりき。

右聖妙法蓮華法門に於て陀羅尼品第二十一

妙法蓮華經

藥王菩薩本事品

第二十三

爾時宿王華菩薩。白佛言。世尊。藥王菩薩。云何遊於娑婆世界。世尊。是藥王菩薩。有若干百千萬億。那由他。難行苦行。善哉。世尊。願少解說。諸天龍神。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人。非人等。又他國土。諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。

爾時佛告宿王華菩薩。乃往過去無量恒河沙劫。有佛號曰。月淨明德。如來。應供。

藥王菩薩本事品第二十二

四四八

藥王菩薩本事品第二十二

時に星宿王華神通 Nakṣatrarājasaṃkusumitābhīṇa 菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く『世尊よ如何なる因縁ありてか藥王 Bhaiṣajyārjya 菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に出現し、また多俱胝那由他百千の難行を示したるや、世尊如來應供正等覺者よ、希くば藥王菩薩摩訶薩の行 Pradeśa の少分をも示し給へ、これを聞きて天龍藥叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等も、さては他方の世界より來れる菩薩摩訶薩も又これら大聲聞衆も一切歡喜し満足し、騰神し、踊躍すべし』云。

時に世尊は星宿王華神通菩薩摩訶薩の願樂を知りて直ちに星宿王華神通菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ古へ恒河沙に等しき劫波の過去世に於て時しも日月離垢

正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其佛有八十億。大菩薩摩訶薩。七十二恒河沙。大聲聞衆。佛壽四萬二千劫。菩薩壽命亦等。彼國無有女人。地獄。餓鬼。畜生。阿脩羅等。及以諸難。地平如掌。瑠璃所成。寶樹莊嚴。寶帳覆上。垂寶華旛。寶餅香爐。周徧國界。七寶爲臺。一樹一臺。其樹去臺。盡一箭道。此諸寶樹。皆有菩薩聲聞。而坐其下。諸寶臺上。各有百億諸天。作天伎樂。歌

光吉祥 Candrasūryavimalaprabhāsarī と名くる如來應供正等覺者は世に出現せり。明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊にてまします。時に又星宿王華神通よ、かの世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者には八十俱胝の菩薩摩訶薩の大集會あり。七十二恒河沙に等しき聲聞の集會ありき。又その國土は女人を離れたり。又その國土は地獄傍生餓鬼阿修羅等の身を離れ、齊等にして樂しむべく、手掌の如く滑かなり。地は天の琉璃を以て合成せり。寶梅檀樹を以て飾り、寶網を覆ひ、繒衣華鬘を懸け、寶香を薫じ、一切の寶樹の下、箭の達するばかりのところに諸の寶殿立てり。一切その寶殿の頂上に百俱胝の天子あり。かの世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者の供養のために、樂器を鼓して合奏をなせり。而して世尊は一切有情喜見 Darśanātvaṃpriyadarśana 菩薩摩訶薩に威神力を加へて、この妙法蓮

藥王菩薩本事品第二十二

四四九

歎於佛。以爲供養。爾時彼佛。爲一切衆生喜見菩薩。及衆菩薩。諸聲聞衆。說法華經。是一切衆生喜見菩薩。樂習苦行。於日月淨明德佛法中。精進經行。一心求佛。滿萬二千歲已。得現一切色身三昧。得此三昧已。心大歡喜。卽作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞。法華經力。我今當供養。日月淨明德佛。及法華經。卽時入是三昧。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。細抹堅黑栴檀。滿虛空中。

如雲而下。又雨海此岸。栴檀之香。此香六銖。價值娑婆世界。以供養佛。

作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖以神力。供養於佛。不如以身供養。卽服諸香。栴檀。薰陸。兜樓婆。畢力迦。沈水。膠香。又飲瞻蔔。諸華香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明德佛前。以天寶衣。而自纏身已。灌諸香油。以神通力願。而自然身。光明遍照。八十億恒河沙世界。其中諸佛。同時讚言。善哉善哉。善

華の法門をかれら大聲聞衆とかれら菩薩摩訶薩に廣く開説したまひき。時に又星宿王華神通よ、かの世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者の壽量は四萬二千俱胝劫なり。乃至かれら菩薩摩訶薩及び大聲聞の壽量も亦然り。而してかの一切有情喜見菩薩摩訶薩は世尊の國土に於て難行を行じたり。かれは一萬二千歳の間をさまよひ大なる精進を以て修行をなし、一萬二千歳を経たる後、一切色現 *arūpasandarsana* と名くる三昧を得たりき。その三昧を得るや一切有情喜見菩薩摩訶薩は満足し歡喜し踊躍し、隨喜し喜悅の心を生じて乃ち思へらく、「この妙法蓮華の法門に近づきてわれは一切色現三昧を得たり」と。かくて一切有情喜見菩薩摩訶薩は又かくのごとく思ひき。「われをして世尊日月離垢光吉祥如來とかの妙法蓮華の法門を供養せしめよ」と。一切有情喜見菩薩摩訶薩のこの三昧に入るや、

虛空より曼陀羅華大曼陀羅華の大華雨は雨ふり、黒栴檀の雨、烏羅伽栴檀娑羅栴檀の雨は雨ふりたり。星宿王華神通よ、その香の性たるや、その一銖よく娑婆世界に値せり。『時に又星宿王華通よ、かの一切有情喜見菩薩摩訶薩は念を具し智を全ふして三昧より起ち、かくの如く思惟せりき。神通變化を示して世尊を供養せんは、自身を捨て、これをなすに若かざるべし』と。時に又星宿王華神通よ、かの一切有情喜見菩薩摩訶薩は、直ちに、阿伽樓 *agaru* 兜樓婆 *tunuska* 薰兜陸 *Kandurika* の食味を食ひ、又瞻蔔 *Campaka* の油を飲みき。かくの如くして、星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩は常に香を食ひ瞻蔔の油を飲みて十二年を経たりき。星宿王華神通よ、時に一切有情喜見菩薩摩訶薩は十二年を経たる後、天衣を以て自身を纏ひ、香油を浴して誓願を發したりき。誓願を立て、如來を供養し、妙法蓮華の法門を供

男子。是真精進。是名眞法。供養如來。若以華香瓔珞。燒香抹香塗香。天繪旛蓋。及海此岸。梅檀之香。如是等種種諸物供養。所不能及。假使國城。妻子布施。亦所不及。善男子。是名第一之施。於諸施中。最尊最上。以法供養。諸如來故。作是語已。而各默然。

養せんがために自身を燃焼したりき。時に星宿王華神通よ、かの一切有情喜見菩薩摩訶薩の燃焼せる身より出づる炎の光は八十恒沙に等しき世界を照耀せりき。而してそれらの世界に八十恒河沙に等しき佛世尊ありて、總べて善哉を唱へたりき。「善きかな善きかな善家男子よ、善きかな時にまた汝善家男子よ、菩薩摩訶薩中の眞の勇者なり。これ眞の如來の供養法の供養なり。如何なる華塗香燒香華鬘膏油香粉衣服傘蓋幢幡の供養も如何なる財物の供養も烏羅伽娑羅梅檀の供養もこれに若かざるなり。善家男子よ、これ最上の施物なり。王位を捨つるよりも、愛子愛妻を捨つるよりも優れり。善家男子よ、自身を捨て、供養するは特殊なる最上なる最殊勝最勝最高なる法供養なり。」時に星宿王華神通よ、かれら諸佛世尊はこの語を説き了りて黙したまへり。

其身火然。千二百歲。過是已後。其身乃盡。一切衆生喜見菩薩。作如是法供養已。命終之後。復生日月淨明德佛國中。於淨德王家。結跏趺坐。忽然化生。即爲其父。而說偈言。
大王今當知。我經行彼處。即時得一切。現諸身三昧。勤行大精進。捨所愛之身。
說是偈已。而白父言。日月淨明德佛。今故現在。我先供養佛。已得解一切衆生。語言陀羅尼。復聞是法。

「時に、星宿王華神通よ、一切有情喜見の身の燃焼すること、は千二百歳を経るまで滅せざりき。千二百歳を経たる後、滅しぬ。星宿王華神通よ、一有情喜見菩薩摩訶薩はかくの如きの如來の供養と法の供養とをなして、命終り、世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者の國土なる離垢施王の家に於て自然に化生し、結跏趺坐して出現せりき。生誕するや否や、一切有情喜見菩薩摩訶薩はその父母に對して伽陀を説きて曰く、
(一)勝王よ、これわが三昧を得るに至りし修行なり、惜むべきわが身を捨て、大行勇健精進を得たり。
「時に星宿王華神通よ、かの一切有情喜見菩薩摩訶薩はこの伽陀を説きて自からの父母に白して曰く、「母よ、父よ、今日しもかの世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者は現に住し留り持ちて法を説き給ふ。われかの世尊日月離垢光

華經。八百千萬億。那由他。甄迦羅類婆羅。阿閼婆等。偈。大王。我今當還。供養此佛。白已。卽坐。七寶之臺。上昇虛空。高七多羅樹。往到佛所。頭面禮足。合十指爪。以偈讚佛。容顏甚奇妙。光明照十方。我適曾供養。今復還親近。

爾時一切衆生喜見菩薩。說是偈已。而白佛言。世尊。世尊猶

故在世。爾時日月淨明德佛。告一切衆生喜見菩薩。善男子。我涅槃時到。滅盡時至。汝可安施牀座。我於今夜。當般涅槃。又勅一切衆生喜見菩薩。善男子。我以佛法。屬累於汝。及諸菩薩。大弟子。并阿耨多羅三藐三菩提法。亦以三千大千七寶世界。諸寶樹寶臺。及給侍諸天。悉付於汝。我滅度後。所有舍利。亦付屬汝。當令流布。廣設供養。應起若干千塔。如是日月淨明德佛。敕一切衆生喜見菩薩

吉祥如來應供正等覺者の供養をなして、一切音聲善巧陀羅尼を得、またこの八十俱胝那由他百千、矜羯羅 *Kankara* 頻婆羅 *Vimbāra* 阿閼婆 *Akṣobhya* の偈より成れる妙法蓮華の法門をかの世尊の前に於て聞きたりき。されば母よ、父よ、希くばわれはまさにかの世尊の前に行かむ。行きてかの世尊に尙多くの供養をなさむ」と。時に星宿王華神通よ、か的一切有情喜見菩薩摩訶薩は其の時虚空の中に七多羅 *Sata* 量を昇騰して、七寶合成の樓臺に結跏趺坐し、かの世尊の前に行き、行きて、かの世尊の兩足を頭を以て禮し、三たび右に遶りて、合掌を傾け、恭敬して、伽陀を説て曰く。

(一) 人王勇者離垢の顔かんはせ 光は十方に輝けり、善逝よ最上の供養して 世尊拜見のために來ぬ。
『時に星宿王華神通よ、か的一切有情喜見菩薩摩訶薩は、かの伽陀を説きて世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者に

白して曰く、「世尊よ爾いま今日もなほ住したまふか」と。時に星宿王華神通よ、世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者は一切有情喜見菩薩摩訶薩に告げて曰く、「善家男子よ、わが般涅槃の時節は來れり。善家男子よ、わが滅盡の時分は來れり。善家男子よ、わが臥床を調へよ、われ將に般涅槃せん」と。時に星宿王華神通よ、かの世尊日月離垢光吉祥如來は一切有情喜見菩薩摩訶薩に告げて曰く、「善家男子よ、われこの教法を汝に付嘱す。またこれらの菩薩摩訶薩、これらの大聲聞、これらの佛の證果、これらの寶莊嚴具、これらの寶樹、これらの天子、わが僕使等をも汝に付嘱す。又善家男子よ、わが滅度せし骨身をも汝に付嘱す。善家男子よ、汝は自からわが骨身に大なる供養をなすべし、これを配分すべし、幾千の塔を建立すべきなり」と。時に星宿王華神通よ、世尊日月離垢光吉祥如來應供正等覺者はかくの如く一切

已。於夜後分。入於涅槃。

爾時一切衆生喜見菩薩。見佛滅度。悲感懊惱。戀慕於佛。即以海此岸。栴檀爲藏。供養佛身。而以滅之火滅已後。收取舍利。作八萬四千寶餅。以起八萬四千塔。高三世界。表刹莊嚴。垂諸繡蓋。懸衆寶鈴。爾時一切衆生喜見菩薩。復自念言。我雖作是供養。心猶未足。我今當更供養舍利。便語諸菩薩大弟子。及天龍。夜叉等。一切大衆。

汝等當一心念。我今供養。日月淨明德佛舍利。作是語已。卽於八萬四千塔前。然百福莊嚴。七萬二千歲。而以供養。令無數衆聲聞衆。無量阿僧祇人。發阿耨多羅三藐三菩提心。皆使得往。現一切色身三昧。

爾時諸菩薩。天人阿脩羅等。見其無臂憂惱悲哀。而作是言。此一切衆生喜見菩薩。是我等師。教化我者。而今燒臂。身不具。

有情喜見菩薩摩訶薩に教を遺して、その中夜に於て無餘涅槃界に入りたまへりき。

『時に星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩は世尊日月離垢光吉祥如來の滅度したまふを知りて、烏羅伽、娑羅栴檀の香堆を造りて如來の身を焚燒せり。かくて如來の身の燒盡せしを見て、骨身を取り、流涕し、號叫し、悲泣しき。時に星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩は、流涕し、號叫し、悲泣して、七寶合成の八萬四千の甕を造らしめ、これに如來の骨身を容れ、七寶合成の八萬四千の塔を建て、高きこと乃至梵の世界に至らしめ、飾るに傘蓋の列を以てし、粧ふに繒綵鈴鐸を以てせり。これらの塔を建てたる後、かれはかくの如く思へりき、「われは世尊日月離垢光吉祥如來の骨身の供養をなせり。されど如來の骨身に對して、なほこれよりも高く、これよりも勝れたる供養をなすべきなり」と。

時に星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩は、かの一切の菩薩の群集、かの大聲聞かの天龍藥叉乾闥婆阿修羅迦樓羅摩睺羅伽人非人の群集に告げて曰く、「善家男子よ、汝等すべて世尊の骨身に供養をなさんと誓ふべし」。かくて星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩は、これら八萬四千の如來の骨身の塔の前に自から百福莊嚴の臂を燃燒せり。而して七萬二千歳の間、これを燃燒して如來の骨身の塔に供養をなしき。この供養の間、集會の中より無數俱胝那由他百千の聲聞を導き、一切の菩薩摩訶薩は一切色現三昧を得たり。

『時に星宿王華神通よ、一切の菩薩の衆と、一切の聲聞は一切有情喜見菩薩摩訶薩の臂なきを悲泣して互に語りて曰く、「われらの師主なる一切有情喜見菩薩摩訶薩は今や臂を失ひ腕を缺けり」と。時に星宿王華神通よ、一切有情喜見

足。于時一切衆生喜見菩薩。於大衆中。立此誓言。我捨兩臂。必當得佛。金色之身。若實不虛。令我兩臂。還復如故。作是誓已。自然還復。由斯菩薩。福德智慧。淳厚所致。當爾之時。三千大千世界。六種震動。天雨寶華。一切天人。得未曾有。佛告宿王華菩薩。於汝意云何。一切衆生喜見菩薩。豈異人乎。今藥王菩薩是也。其所捨身布施。如是無量。百千萬億。那由他數。宿王華。若有發心。欲得阿耨多羅三

藐三菩提者。能然手指。乃至足一指。供養佛塔。勝以國城妻子。及三千大千國土。山林河池。諸珍寶物。而供養者。若復有人。以七寶滿。三千大千世界。供養於佛。及大菩薩。辟支佛。阿羅漢。是人所得功德。不如受持。此法華經。乃至一四句偈。其福最多。

菩薩摩訶薩はかれら菩薩かれら大聲聞かれら天子たちに告げて曰く、「善家男子よ、汝等わが臂を失へるを見て流涕する勿れ、號叫する勿れ、悲泣する勿れ。善家男子よ、十方無邊無限の世界に於て諸佛世尊は住し、留り、持たまふ。われかれら諸佛世尊の照覽を請ひ、かれらの前に誠實の願 *adhiṣṭhāna* をなす。この誠實の願によりて、如來の供養のためには失はれたるわが臂は金色の身となるべし。この誠實と誠實の言によりて、わが臂はもこのごとくなるべし。而して大地は六種に震動せん。虚空の中に天子等は、大華雨を雨ふらすべし」と。時に星宿王華神通よ、一切有情喜見菩薩摩訶薩のこの誠實の願を發せしや否や、直ちに三千大千世界は六種に震動し、虚空の中に大華雨は雨ふりたりき。而して一切有情喜見菩薩摩訶薩の臂はもこの如くに生じたりき。實にこれかの菩薩摩訶薩の智力と福德力とによ

りてなり。時に星宿王華神通よ、其の時節其の時分に、一切有情喜見なる他の菩薩摩訶薩ありしとの疑惑、躊躇、猶豫あらむ。されど星宿王華神通よ、かくの如くの觀をなすなかれ。その故は如何。星宿王華神通よ、かの藥王菩薩摩訶薩こそその時節その時分に一切有情喜見菩薩摩訶薩なりしなれ。星宿王華神通よ、この一切有情喜見菩薩摩訶薩はかくの如き俱胝那由他百千の難行をなし、自身の棄捨をなしたり。星宿王華神通よ、善家男子若くは善家女子あらむ。菩薩乘に發心して、無上正等覺を志求しつゝ、如來の塔に於て、足の躓、手の一指、若くは足の指、若くは一支の臂を燃焼せむ。この菩薩乘に發心せる善家男子若くは善家女子は多くの福德量を生ぜんこと王國を捨て、愛妻愛子を捨て、森林 *vana* 河海 *samudra* 山嶽 *parvata* 泉 *ulstara* 沼 *tadāgā* 井 *kūpa* 園 *brama*。ある三千大千世界を捨つるより勝れなり。又星宿

宿王華。譬如一切。川流江河。諸水之中。海爲第一。此法華經。亦復如是。於諸如來。所說經中。最爲深大。又如土山。黑山。小鐵圍山。大鐵圍山。及十

王華神通よ、菩薩乘に發心せる善家男子若くは善家女子あらむ。この三千大千世界を滿たすに七寶を以てし、一切の佛菩薩聲聞獨覺に施物としてこれを與へむ。星宿王華神通よ、この善家男子若くは善家女子はかの妙法蓮華の法門の四句の一偈をだにも受持する善家男子若くは善家女子に比して等しき福德を生ずるなり。われ實に語らむ、この後者の福德の量は三千大千世界を滿たすに七寶を以てし、一切の佛菩薩聲聞獨覺に施物としてこれを與ふるより多きなり。
(一) 『星宿王華神通よ、譬へば大海は一切の泉 *śāla* 流 *śāla* 池 *śāla* の中に第一なるが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經典の中に第一なり。(二) 星宿王華神通よ、譬へば、須迷盧 *Sumeru* は一切の黒山、輪圍山、大輪圍山の中に山王第一なるが如く、星宿王華神通よ、

寶山。衆山之中。須彌山爲第一。此法華經。亦復如是。於諸經中。最爲其上。又如衆星之中。月天子。最爲第一。此法華經。亦復如是。於千萬億種。諸經法中。最爲照明。又如日天子。能除諸闇。此經亦復如是。能破一切不善之闇。又如諸小王中。轉輪聖王。最爲第一。此經亦復如是。於衆經中。最爲其尊。又如帝釋。於三十三天中王。此經亦復如是。諸經中王。又如大梵天王。一切衆生之父。此經亦復如是。

この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經典の中に王たること第一なり。(三) 星宿王華神通よ、譬へば月は一切の星宿の中に光耀第一なるが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經典の中に第一なり。而してその光耀は俱胝那由他百千の月よりも勝れたり。(四) 星宿王華神通よ、譬へば日輪の一切の暗冥を破るが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は一切不善の暗冥を破るなり。(五) 星宿王華神通よ、譬へば釋羅 *Śakra* の三十三天の中に天帝たるが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經典の中の帝(王)なり。(六) 星宿王華神通よ、譬へば梵天堪忍界主 *Brahmā Sahānpati* の一切の梵天界の王にして梵天界の父たるの務をなすが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は菩薩乘に發趣せる一切の有情、有學無學の一切の聲聞獨覺の中に父たるの務

一切賢聖。學無學。及發菩薩心者之父。又如一切。凡夫人中。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。辟支佛。爲第一。此經亦復如是。一切如來所說。若菩薩所說。若聲聞所說。諸經法中。最爲第一。有能受持。是經典者。亦復如是。於一切衆生中。亦爲第一。一切聲聞。辟支佛中。菩薩爲第一。此經亦復如是。於一切諸經法中。最爲第一。如佛爲諸法王。此經亦復如是。諸經中王。宿王華。此經能救一切衆生者。此

經能令一切衆生。離諸苦惱。此經能大饒益。一切衆生。充滿其願。如清涼池。能滿一切。諸渴乏者。如寒者得火。如羸者得衣。如商人得主。如子得母。如波得船。如病得醫。如暗得燈。如貧得寶。如民得王。如賈客得海。如炬除暗。此法華經。亦復如是。能令衆生。離一切苦。一切病痛。能解一切生死之縛。若人得聞。此法華經。若自書。若教人書。所得功德。以佛智慧。籌量多少。不得其邊。若書是經卷。華香環

をなすなり。^(七) 星宿華神通よ、王譬へば須陀洹 *Srotipanna* 斯陀含 *Sakṛdāgāmin* 阿那含 *Anāgāmin* 阿羅漢 *Arhat* 辟支佛 *Pratyekabuddha* は一切の愚夫異生を超越せるが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經典を超越して最上第一なりと知るべし。星宿王華神通よ、またこの經王を受持するかれら有情は第一なりと知るべきなり。^(八) 星宿王華神通よ、譬へば菩薩は一切の聲聞獨覺の中に最上なりとせらるゝ如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は如來の説きたまひし一切の經の中に最上なりとせられたり。^(九) 星宿王華神通よ、譬へば如來法王は一切の聲聞獨覺菩薩の中に法王勝覺者 *pāṇibuddha* たるが如く、星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は菩薩乘に發趣せるものには如來なり。星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門は一切の有情を一切の怖畏より救ひ、一切の苦惱より解脱

せしむるものなり。渴けるものには池の如し、凍へたるものには火の如し、赤裸のものには衣服の如し、商旅にとりての先導者の如し、子にとりての母の如し、彼岸に渡るに臨んでの舟の如し、病あるものには醫の如し、暗冥に覆はれたるものには燈の如し、富を求むるものには寶の如し、一切の城主にとりての轉輪^(王)の如し、河流に於ける大海の如し、一切の暗冥翳障にとりての巨炬の如し。星宿王華神通よ、かくの如く、此妙法蓮華の法門は一切の苦惱を解脱せしめ、一切の病患を斷滅し、一切の生死の怖畏ごきびしき縛めを解脱せしむ。星宿王華神通よ、この妙法蓮華の法門を聽き、これを書寫し、書寫せしめたる福德の量は星宿王華神通よ、佛の智慧を以てもその限量を知るに堪へざるなり。この法門を受持し、宣説し、開示し、聽聞し、書寫し、經卷ごなし、恭敬し、尊重し、奉持し、華、燒香、塗香、華鬘、膏油、香粉、衣服、傘蓋、幢幡を以て、若

珞。燒香抹香塗香。脂蓋衣服。種種之燈。蘇燈油燈。諸香油燈。瞻蔔油燈。須曼那油燈。波羅羅油燈。婆利師迦油燈。那婆摩利油燈。供養。所得功德。亦復無量。宿王華。若有人。聞是藥王菩薩本事品者。亦得無量無邊功德。若有女人。聞是藥王菩薩本事品。能受持者。盡是女身。後不復受。若如來滅後。後五百歲中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩衆。圍繞住處。

くは音樂、衣服、合掌の作業を以て、若くは牛酪の燈明 *Sūta-pradipa* を以て、若くは香油の燈明を以て、若くは瞻蔔 *Campaka* 油の燈明を以て、若くは須末那 *Sumana* 油の燈明を以て、若くは波羅々 *Paśala* 油の燈明を以て、若くは婆利師迦油 *Vaśīka* の燈明を以て、若くは那婆摩利 *Nāvamālīka* 油の燈明を以て供養し、多くの恭敬、尊重をなす善家男子或は善家女子はかくの如き多くの福德の量を生ずべし。星宿王華神通よ、この藥王本事品を受持し、宣説し、聽聞するかの菩薩乘に發趣したる善家男子或は善家女子は多くの福德を生ずべし。星宿王華神通よ、若し又女人ありてこの法門を聞きて攝受し、受持せんに、まさにこの生こそ女身の最後なるべきなれ。星宿王華神通よ、五百年の後に於て女人ありて若しこの藥王本事品を聞きて解了せんに、死後、樂有 *Sukhāvati* 世界に生るべきなり。その世界に世尊無量壽 *Amitāyus* 如來應供正

生蓮華中。寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚愚癡所惱。亦復不爲憍慢嫉妬。諸垢所惱。得菩薩神通。無生法。忍。得是忍已。眼根清淨。以是清淨眼根。見七百萬二千億。那由他。恆河沙等。諸佛如來。是時諸佛。遙共讚言。善哉善哉。善男子。汝能於釋迦牟尼佛法中。受持讀誦。思惟是經。爲他人說。所得福德。無量無邊。火不能燒。水不能漂。汝之功德。千佛共説。不能令盡。汝今已能。破諸冤賊。壞

等覺者は菩薩衆に圍繞せられて住し、留り、保ちたまへり。かしこに蓮華藏のうち、師子座の上に坐して生ずべし。貪慾、瞋恚、愚癡、憍慢、憎嫉、憤怒、惡意はかれを傷くることなし。また生ずると共に五神通を得べく、また無生法忍を得べし。星宿王華神通よ、無上法忍を得たるかれ菩薩摩訶薩はまた七十二恆河沙に等しき如來を見たてまつるべし。またその眼根は清淨なることを得べく、眼根清淨によりてかれら佛世尊を見たてまつるべし。かくてかれら佛世尊は善哉は唱へたまふべし。「善きかな、善きかな、善家男子よ、汝はかの世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者の國土に於て宣説せられたるかの妙法蓮華の法門を聞きて、觀念し、獲得し、思惟し、作意し、而も他の有情、他の人類に開説したり。善家男子よ、この汝の福德の聚は火と雖も燒く能はず、水によりても失はるべからざるなり。善家男子よ、この汝の福德の聚は百

生死軍。諸餘怨敵。皆悉摧滅。善男子。百千諸佛。以神通力。共守護汝。於一切世間。天人之中。無如汝者。唯除如來。其諸聲聞。辟支佛。乃至菩薩。智慧禪定。無有與汝等者。宿王華。此菩薩。成就如是。功德智慧之力。

若有人。聞是藥王菩薩本事品。能隨喜讚善者。是人現世口中。常出青蓮華香。身毛孔中。常出牛頭栴檀之香。所得功德。如上所說。是故宿王華。

千の佛と雖も説き示し能はざるなり。善家男子よ、汝は魔賊を破れり。生死の戦を脱れたり。怨敵の頸飾 *kanthaka* を壊れり。汝は百千の佛を超越せり。善家男子よ、天、人、魔、梵を含める世間に於て沙門、婆羅門を含める衆生につきて一の如來を除かば何ものも汝に比すべきものあることなし。その他如何なる聲聞、辟支佛、菩薩も若くは福德に於て、若くは智慧に於て、若くは定に於て汝に超過するものあることなし」と。星宿王華神通よ、かの菩薩はかくの如き智力を得べきなり。

『星宿王華神通よ、人もしこの藥王本事品の説かるゝを聞きて、善哉を唱へたらむにその口よりは青蓮華の香出づべく、またその手足よりは栴檀の香ありて出づべきなり。この法門に於て善哉を唱ふるものには我が今説き示せしかくの如きの現在功德 *dyiṭṭhārṇika gūṇānusaṅgā* あるべきなり。

以此藥王菩薩本事品。屬累於汝。我滅度後。後五百歲中。廣宣流布。於閻浮提。無令斷絕。惡覺寃民。諸天龍。夜叉。鳩槃荼。等。得其便也。宿王華。汝當以神通之力。守護是經。所以者何。此經則爲閻浮提人。病之良藥。若人有病。得聞是經。病即消滅。不老不死。宿王華。汝若見有受持是經者。應以青蓮華。盛滿抹香。俱散其上。散已。作是念言。此人不久。必當取轉。坐於道場。破諸寃軍。當吹法鬘。擊大法鼓。

り。このゆゑに星宿王華神通よ、我れ今この一切有情喜見菩薩摩訶薩の本事品を付嘱す。最後の時、最後の期、最後の五百(年)の轉現する(時)に於て、この閻浮提に流布せしめよ、消滅せしむるなかれ。また魔波旬をしてその便を得せしむるなかれ。天魔、龍、夜叉、乾闥婆、鳩槃荼をしてその便を得せしむるなかれ。このゆゑに星宿王華神通よ、我れこの法門を得たり *adhīṣṭhāmi*。この閻浮提に於て有情の病患に對して藥餌の如し。この法門を聞きて病は身の中に入ることなし。老も死も(身の中)に入ることなし。星宿王華神通よ、また若し菩薩乘に發趣せる人かくの如き經典を受持せる比丘を見たらむに、かれに栴檀の香粉、青蓮を散すべきなり。散じ了りてかくの如きの念を發起すべきなり。「この善家男子は道場に行かんとせり。草を攝受すべし。道場に於て草の牀座を示すべし。魔と藥叉の降伏をなすべし。法

度脱一切衆生。老病死海。是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是。生恭敬心。說是藥王菩薩本事品時。八萬四千菩薩。得解一切衆生語言。陀羅尼。多寶如來。於寶塔中。誼宿王華菩薩言。善哉善哉。宿王華。汝成就不可思議功德。乃能問釋迦牟尼佛。如此之事。利益無量。一切衆生。

藥王菩薩本事品第二十二

の螺貝を吹くべし。法鼓を撃つべし。生死の大海を超越すべし。星宿王華神通よ。菩薩乘に發趣せるかの善家男子若くは善家女子かくの如き經典の受持者を見たらむにかくの如きの念を發起すべきなり。而してかれは如來の説き示したまひしかくの如きの功德を得べきなり。』

時に、この藥王本事品の説かれし間に、八萬四千の菩薩は曉一切音善巧陀羅尼を得たりき。而してかの世尊多寶如來應供正等覺者は善哉を唱へたりき。『善きかな、善きかな、星宿王華神通よ、不可思議の功德を具足せる如來に請問せしところに、實に、如來は汝に對してかくの如き不可思議の功德法を説き示したまへり』と。

右聖妙法蓮華の法門に於て藥王本事品第二十二

妙法蓮華經

妙音菩薩品第二十四

爾時釋迦牟尼佛。放大人相。肉髻光明。及放眉間。白毫相光。徧照東方。百八萬億。那由佉。恆河沙等。諸佛世界。過是數已。有世界。名淨光莊嚴。其國有佛。號淨華宿王智。如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。爲無量無邊。菩薩大衆。恭敬圍繞。而爲說法。釋迦牟尼佛。白毫光明。徧照其國。爾時一切淨

訥音菩薩品第二十三

時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者はその折しも大人相(の一)なる眉間の毫輪藏より光明を放ちたまへりき。その光明によりて東方一萬八千俱胝那由他恆河沙に等しき佛國は照耀せられたりき。それら一萬八千俱胝那由他恆河沙に等しき佛國を過ぎて遍照光莊嚴と名くる世界あり。かしこに蓮華葉離垢星宿王華神通 Kamaladala vimāṇakṣatra-
rājasaṃkṣumitābhijña と名くる如來應供正等覺者は、住し、留り、保ち、長き壽量を有し、多くの菩薩衆に圍繞せられて、法を説きたまへりき。時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者の毫輪藏より光明の放たれしや否や、遍照光莊嚴世界は大光明を以て照されたりき。時に又その遍照光莊嚴世界に於て訥音 Gadgadasvara と名くる菩薩摩訶薩住しき。善根を植

光莊嚴國中有一菩薩。名曰妙音。久已植衆德本。供養親近。無量百千萬億諸佛。而悉成就。甚深智慧。得妙幢相三昧。法華三昧。淨德三昧。宿王觀三昧。無緣三昧。智印三昧。解一切衆生語言三昧。集一切功德三昧。清淨三昧。神通遊戲三昧。慧炬三昧。莊嚴王三昧。淨光明三昧。淨藏三昧。不共三昧。日旋三昧。得如是等。百千萬億。恆河沙等。諸大三昧。釋迦牟尼佛。光照其身。即白淨華宿王智佛言。

わ、かつて多くの如來應供正等覺者の(放ちたまひし)かくの如き光明を見、また訥音菩薩は多くの三昧を得たりき。即ち妙幢相 Dhvajagrakeyūra 三昧、妙法蓮華 Saddharmapundarika 三昧、施離垢 Vimaladatta 三昧、星宿王遊戲 Nakṣatrarājavikrīḍita 三昧、無緣 Anilambha 三昧、智印 Jñānamudrā 三昧、月燈 Candrapradīpa 三昧、曉一切音聲善巧 Sarvaratnakasalyānugata 三昧、集一切功德 Sarvaśūnyasamuccaya 三昧、淨信 Prasādhavati 三昧、神通遊戲 Rddhivikrīḍita 三昧、慧炬 Jñānolka 三昧、莊嚴王 Vyūharāja 三昧、離垢光 Vimalaprabhā 三昧、離垢藏 Vimalagarbha 三昧、遍水 Ap-kṛtsna 三昧、日旋 Suryavarta 三昧、これなり。これを要するに訥音菩薩摩訶薩は乃至恆河沙の如き俱胝尼由他百千の三昧を得たり。時にその光明は訥音菩薩摩訶薩の身上に落ち來れり。その時、訥音菩薩摩訶薩は座より起ち、一肩に上着衣を被り、右の膝輪を地に着け、世尊の方に合掌を傾け、か

世尊。我當往詣。娑婆世界。禮拜親近供養。釋迦牟尼佛。及見文殊師利法王子菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。宿王華菩薩。上行意菩薩。莊嚴王菩薩。藥上菩薩。

爾時淨華宿王智佛。告妙音菩薩。汝莫輕彼國。生下劣想。善男子。彼娑婆世界。高下不平。土石諸山。穢惡充滿。佛身卑小。諸菩薩衆。其形亦小。而

の世尊蓮華葉星宿王華神通如來應供正等覺者に白して曰く、「世尊よ我れまさに世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者を拜見し、頂禮し、供養せんがために、またかの文殊師利法王子を拜見のために、またかの藥王菩薩を拜見のために、またかの勇施菩薩を拜見のために、またかの星宿王華神通菩薩を拜見のために、またかの上行 Visiṣṭacaritra 菩薩を拜見のために、またかの莊嚴王 Vyūharāja 菩薩を拜見のために、またかの藥王上 Bhaiṣajyarājāsamudgata 菩薩を拜見のために、かの娑婆世界に行くべきなり」云々。

時に蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者は訥音菩薩摩訶薩に告げて曰く、「善家男子よ汝かの娑婆世界に行くことも、その世界に對し、下劣なりこの想念を起すべからず。その世界は高下不平にして、土石を以て成り、黒山散點し、汙穢充滿せり。また善家男子よ、汝は四萬二千由旬の身

汝身。四萬二千由旬。我身。六百八十萬由旬。汝身第一端正。百千萬福。光明殊妙。是故汝往。莫輕彼國。若佛菩薩。及國土。生下劣想。

妙音菩薩。白其佛言。世尊。我今詣娑婆世界。皆是如來之力。如來神通遊戲。如來功德。智惠莊嚴。於是妙音菩薩。不起于座。身不動搖。而入三昧。以三昧力。於耑闍崛山。去法座不遠。化作

量を得たり。我れ亦善家男子よ六萬八千由旬の身量を得たるに、世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者は短身にして、菩薩摩訶薩も亦短身なり。また善家男子よ、汝は容色端嚴にして美麗見るに堪へたり。あらゆる最勝清淨の色を具足し、百千の殊妙なる福莊嚴あり。善家男子よ、されば今かの娑婆世界に行くも、如來に於て、菩薩に於て、かの國土に於て、下劣なりとの想念を起すことなかるべきなり」と。

かくの如く語られたる訥音菩薩摩訶薩はかの世尊蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者へ白して曰く、『世尊よわれは如來の命じたまひし如くなすべきなり。世尊よわれは如來の加持によりて、如來の加被力によりて、如來の神通遊戲(力)によりて、如來の莊嚴によりて、如來の最上智によりてかの娑婆世界に行くべきなり』と。時に、訥音菩薩摩訶薩は、その折しも、實にその佛國を去らず、實にその座を

八萬四千。衆寶蓮華。闍浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶。以爲其臺。

爾時文殊師利法王子。見是蓮華。而白佛言。世尊。是何因緣。先現此瑞。有若干千萬蓮華。闍浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶。以爲其臺。爾時釋迦牟尼佛。告文殊師利。是妙音菩薩摩訶薩。欲從淨華宿王智佛國。與八萬四千菩薩圍繞。而

起たすしてかくの如き三昧に入れりき。訥音菩薩のその三昧に入るや否や、こゝに、娑婆世界なる耑闍崛山に於て、法座の前に八十四俱胝那由他百千の蓮華出現せりき。莖は黃金にして、葉は白銀なり。甄叔迦 Kimśuka の色なる花ありき。

時に文殊師利法王子はこの蓮華莊嚴の出現を見て、世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者に白して曰く、『世尊よ如何なる祥瑞なればこれら八十四俱胝那由他百千の黃金を莖とせる、白銀を葉とせる甄叔迦色の蓮華は出現せるや』と。かくの如く語られたる世尊は文殊師利法王子に告げて曰く、『文殊師利よ、これ東方なる世尊蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者の佛國遍照光莊嚴世界より訥音菩薩摩訶薩の八十四俱胝那由他百千の菩薩に圍繞せられて、我れを拜見し頂禮し供養せんがために、また妙法蓮華の法門を

來至此。娑婆世界。供養親近。禮拜於我。亦欲供養。聽法華經。文殊師利。白佛言。世尊。是菩薩種何善本。修何功德。而能有是。大神通力。行何三昧。願爲我等。說是三昧名字。我等亦欲勤修行之。行此三昧。乃能見是菩薩。色相大小。威儀進止。唯願世尊。以神通力。使菩薩來。令我得見。

爾時釋迦牟尼佛。告文殊師利。此久滅度。多寶如來。當爲汝等。而現其相。時多寶

佛。告彼菩薩。善男子。來。文殊師利法王子。欲見汝身。于時妙音菩薩。於彼國。沒與八萬四千菩薩。俱共發來。所經諸國。六種震動。皆悉雨於七寶蓮華。百千天樂。不鼓自鳴。是菩薩。目如廣大。青蓮華葉。正使和合。百千萬月。其面貌端正。復過於此。身真金色。無量百千。功德莊嚴。威德熾盛。光明照耀。諸相具足。如那羅延。堅固之身。入七寶臺。上昇虛空。去地七多羅樹。諸菩薩衆。恭敬圍繞。而來詣此。娑

聽聞せんがためにこの娑婆世界へ来るなり」と。文殊師利法王子また世尊に白して曰く、「世尊よ、この勝(果)を得たるその善家男子の積聚したる善根は如何。また世尊よ、その菩薩は如何なる三昧をか修せるや。世尊よ、われらをしてその三昧を聞かしめよ、世尊よ、われらをしてその三昧を修せしめよ。また世尊よ、われらをしてその菩薩摩訶薩を見せしめよ、かの菩薩摩訶薩の容色は如何。相貌は如何。標章は如何。性狀は如何。またその行爲は如何。如來世尊希くばこれらの標相 *nimitta* を施作したまへ。その標相によりて促がされ、尊崇せられ、かの菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に來るべきなり」と。

時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者はかの般涅槃せる世尊多寶如來應供正等覺者に告げて曰く、「世尊希くば訶音菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に來るが如き標相を施作し

たまへ」と。その時、般涅槃せる世尊多寶如來應供正等覺者は訶音菩薩摩訶薩を促がさんがためにかくの如き標相を現作して曰く、「善家男子よ、この娑婆世界に來れ、文殊師利法王子は汝を拜見せんことを喜べり」と。時に訶音菩薩摩訶薩はかの世尊蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者の兩足を頭を以て禮し、三たび右に繞りかれら八十四俱胝那由他百千の菩薩に圍繞せられてかの遍照光莊嚴世界より没してこの娑婆世界へ來りき。地は震ひ、華は雨り、俱胝那由他百千の樂器は奏でられたり。眼は青蓮華の如く、容顏金色に、身は百千の福を以て莊嚴せられ、體は吉祥に、光焰を以て輝き、相好を以て照耀し、手足は諸の色を以て莊嚴せられ、那羅延の如き堅固なる身を有せり。七寶を以て合成せる樓閣に乘じ、虛空の上を七多羅 *Tala* の高さに於て菩薩の群に圍繞せられて來至せりき。かくてこの娑婆世界

婆世界。耆闍崛山。到已。下七寶臺。以假直百千瓔珞。持至釋迦牟尼佛所。頭面禮足。奉上瓔珞。而白佛言。世尊。淨華宿王智佛。問訊世尊。少病少惱。起居輕利。安樂行不。四大調和不。世事可忍不。衆生易度不。無多貪欲。瞋恚。愚癡。嫉妬。懈慢不。無不孝父母。不敬沙門。邪見不善心。不攝五情不。世尊。衆生能降伏。諸冤怨不。久滅度多寶如來。在七寶塔中。來聽法不。又問訊多寶如來。安穩少惱。堪忍久

さては耆闍崛山王の方に往き、往きてその樓閣より下り、百千(金)に價する眞珠の瓔珞を解き、世尊の方に往き、往きて世尊の兩足を頭を以て禮し、七たび右に繞りてかの眞珠の瓔珞を、世尊の供養のために獻じ、獻じて世尊に白して曰く、「蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者は世尊に問ひたてまつる。病惱少く健全にゐますや、起居、勢力、平安にゐませるや、またかの世尊はかくのごとく申しき、世尊よ何等かの堪へ忍ぶべきことの在さるか、何等かの排除せらるべきことの在さるか、何等か御氣色平生に違するなきか、有情はいづれとして善性ならざるなく、導くに堪へ、治癒せらるべきに堪ふるや、いづれとして清き身を有せざるなきや、貪欲過ることなかれかし、瞋恚過ぐるることなかれかし、愚癡過ぐるることなかれかし、世尊よ、有情は嫉妬過ぐるることなかれし、憎嫉なかれかし、母に孝なれかし、父に孝なれかし、修

住不。世尊。我今欲見多寶佛身。唯願世尊示我令見。

樹時釋迦牟尼佛。

行の志あれかし、淨行を修せよかし、邪見ならざれかし、強剛の心ならざれかし、諸根を放縱ならざらしめよかし、世尊よ、これら有情はいづれとして惡魔を降伏し得ざるなきや、世尊よ、般涅槃せる多寶如來應供正等覺者は法を聞かんがために、この娑婆世界に來り、七寶合成の塔中に在すや。かの世尊は世尊多寶如來應供正等覺者にもまた問ひたてまつる。世尊よ、かの世尊多寶如來應供正等覺者につきて何等かの堪へ忍ぶべきことの在さるか、何等の排除せらるべきことの在さるか、世尊よ、多寶如來應供正等覺者は如何に長く留りたまふか、世尊よ、われらもまたかの世尊多寶如來應供正等覺者の身分を見たてまつらんことを願ふ。希くば世尊如來はかの世尊多寶如來應供正等覺者の身分を示したまへ。』云々。

時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者はかの般涅槃せる

語多寶佛。是妙音菩薩。欲得相見。時多寶佛。告妙音言。善哉善哉。汝能爲供養。釋迦牟尼佛。及聽法華經。并見文殊師利等。故來至此。爾時華德菩薩。白佛言。世尊。是妙音菩薩。種何善根。修何功德。有是神力。

佛告華德菩薩。過去有佛。名雲雷音王。多陀阿伽度。阿羅訶三藐三佛陀。國名現

一切世間。切名喜見。妙音菩薩。於萬二千歲。以十萬種伎樂。供養雲雷音王佛。并奉上。八萬四千七寶蓋。以是因緣。果報。今生淨華宿王智佛國。有是神力。華德。於汝意云何。爾時雲雷音王佛所。妙音菩薩。伎樂供養。奉上寶器者。豈異人乎。今此妙音菩薩摩訶薩。是華德。是妙音菩薩。已曾供養親近。無量諸佛。久植德本。又值恒河沙等。百千萬億那由他佛。華德。汝但見妙音菩薩。其身在此。而是菩

世尊多寶如來應供正等覺者に白して曰く、『世尊よ、この訥音菩薩摩訶薩は般涅槃せる世尊多寶如來應供正等覺者を見たてまつらんことを願へり』。時に世尊多寶如來應供正等覺者は訥音菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、汝は世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者を見たてまつらんがために、またこの妙法蓮華の法門を聞かんがために、また文殊師利法王子を見んがために此に來れり。善きかな、善きかな』。

時に蓮華德 Padmasri 菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ、訥音菩薩摩訶薩は宿世に如何なる善根を如何なる如來の前に植わたるか』。

時に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者は蓮華德菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、往昔過去の世無數なるなほ無數なる廣博無量無限劫に於て、其の時、其の節、雲鼓音王如

來應供正等覺者は世に出でたまひき、明行足善逝、世間解無上士調御丈夫、天人師、佛、世尊にてまします。世界を現一切色像 Sarvarupasandarsana 及び、劫を愛見 Priyadarśa 及び、時にまた善家男子よ、世尊雲鼓音王如來應供正等覺者に對し、訥音菩薩摩訶薩は一萬二千年の間百千の樂器を奏して、供養をなしき、〔またかれは八萬四千の七寶合成の器皿を施物とせり。善家男子よ、かしこに雲鼓王如來の國土 Pitrivana に於て、訥音菩薩摩訶薩はかくの如き妙相を得たるなり。時に善家男子よ、その時、その節、他の訥音と名くる菩薩摩訶薩ありて、かの世尊雲鼓音王如來應供正等覺者に對し、八萬四千の器皿を施物として供養せし、この疑惑躊躇、猶豫あるべし〕。善家男子よ、かくの如きの觀をなす勿れ。其の故は如何。善家男子よ、これこそはかの世尊雲鼓音王如來應供正等覺者に對し、八萬四千の器皿を施物として供養

* 原本に一萬二千年を百二十年に作るものあり今は牛津、飯橋の二本に從ふ。一またこれは「猶下」の誤りあり。一の節は河口本を以て補譯したり。原本即ち亞細亞學會本を基礎とし四本を以て校訂せしものには此下に相當するさうに只

薩。現種種身。處處爲諸衆生。說是經典。或現梵王身。或現帝釋身。或現自在天身。或現大自在天身。或現天大將軍身。或現毗沙門天王身。或現轉輪聖王身。或現諸小王身。或現長者身。或現居士身。或現宰官身。或現婆羅門身。或現比丘身。或現比丘尼身。或現優婆塞身。或現長者身。或現長者居士身。或現婦女身。或現童女身。或現童子身。或現乾闥婆身。或現阿脩羅身。或現迦樓羅身。或現緊那羅身。或現摩睺羅

せしところの訥音菩薩摩訶薩なり。善家男子よ訥音菩薩摩訶薩はかくの如く多くの諸佛を供養して多百千の諸佛の許に善根を植ゑ、佛の崇敬をなせり。またこの訥音菩薩摩訶薩は曾て恒河沙に等しき諸佛世尊を見たてまつりたり。蓮華徳、汝見よ、これ訥音菩薩摩訶薩なり』と。蓮華徳白して曰く、『世尊よ、われ見たてまつる。善逝よ、われ見たてまつる』と。世尊告げて曰く、『時にまた蓮華徳よ、訥音菩薩摩訶薩は多くの色像を以て、この妙法蓮華の法門を示せり。即ち、或は梵王 Brahma の色像を以て、或は魯陀羅 Rudra の色像を以て、或は釋羅 Dakra の色像を以て、或は自在天の Isvara の色像を以て、或は毘沙門 Vaisravana の色像を以て、或は濕婆 Siva の色像を以て、或は城主 Kotira-rajā の色像を以て、或は轉輪王 Cakravartin の色像を以て、或は居士 Gṛhapati の色像を以て、或は長者 Śreṣṭhīn の色像を以て、或は村人 Gṛhapati の色像

「カ」の世尊、諸佛、王如來、應供、正等、覺者、に對し、八萬四千の器皿を施物として供養せしところの「さいふ」未だ文章なき一旬あるのみ

羅伽。人非人等身。而說是經。諸有地獄。餓鬼。畜生。及衆難處。皆能救濟。乃至於王後宮。變爲女身。而說是經。華徳。是妙音菩薩。能救護娑婆世界。諸衆生者。是妙音菩薩。如是種種。變化現身。在此娑婆國土。爲諸衆生。說是經典。於神通變化智慧。無所損減。是菩薩。以若干智慧。明照娑婆世界。令一切衆生。各得所知。於十方恒河沙世界中。亦復如是。若應以聲聞形。得度者。現聲聞形。而爲說法。應以

を以て、或は村人 Naigama の色像を以て、或は婆羅門 Brahmana の色像を以て、この妙法蓮華の法門を示せり。或は比丘 Bhikṣu の色像を以て、或は比丘尼 Bhikṣuṇī の色像を以て、或は優婆塞 Upāsaka の色像を以て、或は長者の妻 Brāhmiṇī の色像を以て、或は居士の妻 Gṛhapati-bhāryā の色像を以て、或は村人の妻 Naigama-bhāryā の色像を以て、或は童子 Dāraka の色像を以て、或は童子 Dārīkā の色像を以て、訥音菩薩摩訶薩はこの妙法蓮華の法門を諸の有情に示せり。善家男子よ、訥音菩薩摩訶薩はかくの如くの色像の示現を以て、この妙法蓮華の法門を諸の有情に示せり。訥音菩薩摩訶薩は乃至或は藥叉 Yakṣa の色像を以て、この妙法蓮華の法門を諸の有情に示せり。或は阿修羅 Asura の色像を以て、或は迦樓羅 Garuda の色像を以て、或は緊那羅 Kimnara の色像を以て、或は摩睺羅伽 Maho-

辟支佛形。得度者。現
辟支佛形。而爲說法。
應以菩薩形。得度者。
現菩薩形。而爲說法。
應以佛形。得度者。即
現佛形。而爲說法。如
是種種。隨所應度者。
而爲現形。乃至應以
滅度。而得度者。示現
滅度。華德。妙音菩薩
摩訶薩。成就大爲神
通。智慧之力。其事如
是。

爾時華德菩薩。白
佛言。世尊。是妙音菩
薩。深種善根。世尊。是
菩薩。住何三昧。而能
如是。在所變現。度脫
衆生。佛告華德菩薩。
善男子。其三昧。名現
一切色身。妙音菩薩。
住是三昧中。能如是
饒益無量衆生。

說是妙音菩薩品

色像を以て、訥音菩薩摩訶薩はこの妙法蓮華の法門を諸の有情に示せり。乃至訥音菩薩摩訶薩は泥犁、傍生、夜魔界、無間處 Akani に生せるもの、救護者となれり。乃至訥音菩薩摩訶薩は後宮の中に住せるものには女人の色像を化現してこの妙法蓮華の法門を有情に示せり。(またこの娑婆世界に於て有情に法を示せり。蓮華徳よ、訥音菩薩摩訶薩は娑婆世界に生じたるもの、救護者なり。實にかの訥音菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に於てまたかくの如き多くの色像を示現してこの妙法蓮華の法門を示せり。而もこの正丈夫の神通の損減なく、また智慧の損減もなし。善家男子よ、訥音菩薩摩訶薩はかくの如き多くの智慧顯現を以てこの娑婆世界に知られたり。また他の恒河沙の如き世界に於て菩薩の引導すべき有情には菩薩の色像を以て法を示せり。獨覺の引導すべき有情には獨覺の色像を

以て法を示せり。如來の引導すべき有情には如來の色像を以て法を示せり。乃至如來の骨身の引導すべき有情には如來の骨身の色像を以て法を示せり。乃至般涅槃の引導すべき有情には般涅槃の身を示せり。蓮華徳よ、訥音菩薩摩訶薩はかくの如き智慧勢力を得たるなり。』

時に蓮華徳菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ、訥音菩薩摩訶薩善根を植わたり。世尊よ、如何なる三昧に安立して訥音菩薩摩訶薩はかくの如き有情を導けるや、その三昧如何』と。かくの如く語られて、世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者は蓮華徳菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、これ實に現一切色像三昧なり。この三昧に安立して訥音菩薩摩訶薩はかくの如き無量なる有情利益はなされたらむ。』

時にまたこの訥音菩薩品の説き示されし間に、訥音菩薩

時。與妙音菩薩俱來者。八萬四千人。皆得現一切色身三昧。此娑婆世界。無量菩薩。亦得是三昧。及陀羅尼。

爾時妙音菩薩摩訶薩。供養釋迦牟尼佛。及多寶佛塔已。還歸本土。所經諸國。六種震動。雨寶蓮華。作百千萬億種種伎樂。既到本國。與八萬四千菩薩圍繞。至淨華宿王智佛所。白佛言。世尊。我到娑婆世界。饒益衆生。見釋迦牟尼佛。及見多寶佛塔。禮拜供養。又見文殊師利法王子菩薩。及

摩訶薩と共にこの娑婆世界に來れる八十四俱胝那由他百千の菩薩はすべて現一切色像三昧を得たりき。またこの娑婆世界に於て數量を超越せる菩薩摩訶薩は現一切色像三昧を得たりき。

時に訥音菩薩摩訶薩は世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者とかの世尊多寶如來應供正等覺者の骨身塔に對し、廣博なる供養をなし、再び七寶合成の樓閣に乘じ、八十四俱胝那由他百千の菩薩に圍繞せられて、自らの國土に近づき行けり。地は震ひ、華は雨り、俱胝那由他百千の樂器は奏せられたり。近づきてかの世尊蓮華葉離垢星宿王華神通如來應供正等覺者に白して曰く、『世尊よ、われ娑婆世界に於て有情の義利をなしたり。またかの世尊多寶如來應供正等覺者の骨身を拜見し禮敬したり。またかの釋迦牟尼如來を拜見し禮敬したり。またかの文殊師利法王子を拜見したり。ま

見樂王菩薩。得勤精進力菩薩。勇施菩薩等。亦令是八萬四千菩薩。得現一切色身三昧。

說是妙音菩薩。來往品時。四萬二千人。得無生法忍。華德菩薩。得法華三昧。

たかの精進勢力ある樂王菩薩摩訶薩とかの施勇菩薩摩訶薩を拜見せり。またかれら一切の八十俱胝那由他百千の菩薩は現一切色像三昧を得たりき。

時にこの訥音菩薩摩訶薩の來往品の説かれし間に四萬二千の菩薩は無生法忍を得たりき。蓮華德菩薩摩訶薩は妙法蓮華三昧を得たりき。

妙法蓮華經

普門品第二十五

爾時無盡意菩薩。即從座起。偏袒右肩。合掌向佛。而作是言。世尊。觀世音菩薩。以何因緣。名觀世音。佛告無盡意菩薩。善男子。若有無量。百千萬億衆生。受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩。即時觀其音聲。皆得解脫。若有持是觀世音菩薩名者。設入大火。火不能燒。由是菩薩威神力故。若爲大水所漂。稱其名號。即得

普門品第二十四

普門品第二十四

四八六

時に無盡意 Akṣyamati 菩薩摩訶薩は座より起ちて、一肩に、上着衣を被り、右膝輪を地に着け、世尊の方に合掌を傾け、世尊に白して曰く、『世尊よ、觀自在 Avalokiteśvara 菩薩摩訶薩は如何なる因によりてか觀自在 Avalokita と名けらるゝや』と。かくの如く語られて、世尊は無盡意菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、こゝに苦を受くる俱胝尼由他百千の有情あらんに、もし觀自在菩薩摩訶薩の名號を聞けば、觀自在菩薩は自在の力用 īśvara-vidhāna によりて觀察 avalokita し、かれら一切をその苦聚より解脫せしむ。蓋し、善家男子よ、種々の方種々の處、種々の生に於て、地獄傍生、夜魔の世界に於て、卵生、胎生、濕生、化生のもを自在 īśvara 力用 vidhāna を以て同時に念するかくのごとき、この力 prabhāva あり。この

「觀自在菩薩は自在の力用によりて」以下「觀自在性あり」なるなり」までは支那出版の一本によ

りて補譯す他の梵本には、これに相當するところ、るに只「かれら一切はその苦聚より解脫すべし」とのみあり。

淺處。若有百千萬億衆生。爲求金、銀、珊瑚、砗磲、碼磧、珊瑚、琥珀、眞珠等寶。入於大海。假使黑風。吹其船舫。飄墮羅刹鬼國。其中若有。乃至一人。稱觀世音菩薩名者。是諸人等。皆得解脫。羅刹之難。以是因緣。名觀世音。

因によりて觀自在(菩薩)には觀自在性 Avalokiteśvaratva あるなり。善家男子よ、また有情ありて觀自在菩薩摩訶薩の名號を受持せんに、若し大なる火聚に陥らんも、すべてかれらは觀自在菩薩摩訶薩の光焰によりて、その大なる火聚より解脫すべきなり。また善家男子よ、若し河流に漂はされたる有情あらんに、觀自在菩薩摩訶薩に對し號叫をなさば、すべての河流はその有情に淺處を與ふべし。また善家男子よ、若し俱胝尼由他百千の有情ありて、金塊、眞金、珠玉、眞珠、金剛、琉璃、砗磲、珊瑚、碼磧、白珊瑚、赤眞珠等の寶を得んがために船に乗じて海中にあらむ。その船黑風に吹かれて羅刹の島に漂着せんに、其中に一人觀自在菩薩摩訶薩に對し號叫をなさば、すべてかれらはその羅刹の島より解脫すべきなり。善家男子よ、この因によりて觀自在菩薩摩訶薩は觀自在と名けらる。

普門品第二十四

四八七

若復有人。臨當被害。稱觀世音菩薩名者。彼所執刀杖。尋即段壞。而得解脫。若三千大千國土。滿中夜叉羅刹。欲來惱人。聞其稱觀世音菩薩名者。是諸惡鬼。尚不能以。惡眼視之。况復加害。設復有人。若著罪。若無罪。粗械枷鎖。檢繫其身。稱觀世音菩薩名者。皆悉斷壞。即得解脫。若三千大千國土。滿中怨賊。有一商主。將諸商人。齎持重寶。經過險路。其中一人。作是唱言。諸善男子。勿得恐怖。汝等

『善家男子よ、若し刑戮に臨めるもの、觀自在菩薩摩訶薩に對して號叫をなさば、かれら執刀者の武器は段々に壞せむ。また善家男子よ、若しこの三千大千世界は藥叉羅刹を以て充滿せんに、觀自在菩薩摩訶薩の名號を持せば、かれらすべては惡心を以て見ることを能はざるなり。また若し善家男子よ、或は罪あるもの、或は無辜のもの、粗械鐵鎖の繫縛を受けんに、かの觀自在菩薩摩訶薩の名を持すれば、速かに粗械鐵鎖の繫縛を解脫するを得べし。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩にはかくの如きの力あり。善家男子よ、この三千大千世界は兇器を手にせる怨賊に滿ちたらむ、その中に一人の商主あり、多くの商人と無價の財寶を齎して行かむ、かれら行きてその賊と怨敵の兇器を手にせるを見む、見て怖畏、戰慄し、適歸するところを知らざらむ、然るにかの商主商人に告げて曰く、「善家男子よ、恐るゝ勿れ、恐るゝ勿れ、施

應當。一心稱觀世音菩薩名號。是菩薩能以無畏。施於衆生。汝等若稱名者。於此怨賊。當得解脫。衆商人聞。俱發聲言。南無觀世音菩薩。稱其名故。即得解脫。無盡意。觀世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。若有衆生。多於姪欲。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離欲。若多瞋恚。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離瞋。若多愚癡。常念恭敬。觀世音菩薩。便得離癡。世音菩薩。便得離礙。無盡意。觀世音菩薩。有如是等。大威神力。多所饒益。是故衆生。常應心念。若有女人。設欲求

無畏者にまします觀自在菩薩摩訶薩に對し、すべて一聲共に呼ぶべし、かくせば汝等速かにこれらの怨賊より解脫すべきなり」と。時に一切の商人は一聲觀自在を呼びて曰く、「かの施無畏者にまします觀自在菩薩摩訶薩に歸命し、また歸命したてまつる」と、かくて共に名を持ちしのみにて、かの商人は一切の怖畏より解脫すべきなり。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩にはかくの如き力あり。『善家男子よ、姪慾多き有情、觀自在菩薩摩訶薩を恭敬すれば、かれらは姪慾を離るべし。瞋恚多き有情、觀自在菩薩摩訶薩を恭敬すれば、かれらは瞋恚を離るべし。愚痴多き有情、觀自在菩薩摩訶薩を恭敬すれば、かれらは愚痴を離るべし。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩にはかくの如きの大神通あり。』善家男子よ、男兒を求むる女人ありて、觀自在菩薩摩訶薩

男禮拜供養。觀世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。宿植德本。衆人愛敬。無盡意。觀世音菩薩。有如是力。

若有衆生。恭敬禮拜。觀世音菩薩。福不唐捐。是故衆生。皆應受持。觀世音菩薩名號。無盡意。若有人受持。六十二億。恒河沙菩薩名字。復盡形供養。飲食。衣服。臥具。醫藥。於汝意云何。是善男子。善女人。功德多

不。無盡意言。甚多。世尊。佛言。若復有人。受持觀世音菩薩名號。乃至一時。禮拜供養。是二人福。正等無異。於百千萬億劫。不可窮盡。無盡意。受持觀世音菩薩名號。得如是。無量無邊。福德之利。

無盡意菩薩。白佛言。世尊。觀世音菩薩。云何遊此娑婆世界。云何而爲衆生說法。方便之力。其事云何。佛告無盡意菩薩。善男子。若有國土。衆生。應以佛身。得度者。觀世音菩薩。卽現佛身。而爲說法。應以辟支佛身。得度者。卽現辟支佛身。而爲說法。應以聲聞身。得度者。卽

に恭敬をなさんに男兒生れ美む。麗端嚴見るに堪へ、丈夫の相を具足し、衆人に愛せられ、人心を得べく、善根を植ゆべきなり。(もし)女兒を求めば、女兒生れむ。美麗端嚴見るに堪へ、最勝吉祥清淨の容色を具へ、童女の相好を莊嚴し、衆人に愛せられ、人心を得べく、善根を植ゆべきなり。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩にはかくの如きの力あり。

『善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩に恭敬をなし、名號を持つものは、その果空しきことなし。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩に恭敬をなし、名號を持つものあらむ。また六十二恒河沙に等しき、佛世尊に恭敬をなし、名號を持ち、また現に住し、留まり、保ちたまへる佛世尊に衣服、團食、臥具、服藥、調度を以て供養せむ。善家男子よ、如何に汝は思ふや、この善家男子若くは善家女子はこの因縁より福德聚を生すべきや』かくの如く語られて、無盡意菩薩摩訶薩は世尊に白して曰

く、『世尊よ、多し、善逝よ、多し。かの善家男子若くは善家女子はこの因縁より多くの福德聚を生すべし』と。世尊の曰く、『善家男子よ、かくの如き佛世尊に尊敬をなして生ずる福德聚と、乃至一聲にても觀自在菩薩摩訶薩に恭敬をなし、名號を持ちて生ずる福德聚とは共に等しく、過不及なく、異なることなし。かれら六十二恒河沙に等しき佛世尊に恭敬をなし、名號を持たんも、觀自在菩薩摩訶薩に恭敬をなし、名號を持たんも、兩者共にその福德聚は俱胝尼由他百千劫にも窮盡すべからざるなり。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩の名號を持つ福德はかくの如く無量なり』

時に無盡意菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ、如何にして觀自在菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に遊び、また如何にして有情に法を説きたまふや、觀自在菩薩摩訶薩の善巧方便境界は如何』と。かくの如く語られたる世尊は無

即解類。衆寶珠瓔珞。價直百千兩金。而以與之。作是言。仁者。受此法施。珍寶瓔珞。時觀世音菩薩。不肯受之。

無盡意。復白觀世音菩薩言。仁者。惡我等故。受此瓔珞。爾時佛告。觀世音菩薩。當惡此無盡意菩薩。及四衆。天龍。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。加樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等故。受是瓔珞。即時觀世音菩薩。惡諸四衆。及於天龍。人非人等。受其瓔珞。分作二分。一分奉釋迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔。無盡意。觀世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。爾時無盡意菩薩。以偈問曰

る眞珠の瓔珞を解きて、視自在菩薩摩訶薩に法服としてこれを贈りたりき。『正丈夫よ、我が前にこの法服を受けよ』と。(されど)かれはこれを受けざりき。

時に無盡意菩薩摩訶薩は視自在菩薩摩訶薩に白して曰く、『善家男子よ、汝はわれらを哀愍してこの瓔珞を攝受せよ』と。時に觀自在菩薩摩訶薩は無盡意菩薩摩訶薩の前に、無盡意菩薩摩訶薩の哀愍のために、またかれら四會の衆とかれら天龍藥叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅摩睺羅伽人非人の哀愍のために、その瓔珞を攝受したりき。攝受して二分をなし、一分を世尊釋迦牟尼に奉り、一分を世尊多寶如來應供正等覺者の寶塔に奉りたりき。善家男子よ、觀自在菩薩摩訶薩はかくの如き遊戲を以てこの娑婆世界に遊ぶなり。

其時世尊はこれらの伽陀を説きて曰く、
(一) 妙幢は無盡意菩薩に

原語案に
妙相具と

世尊妙相具 我今重問彼
佛子何因緣 名爲觀世音
具足妙相尊 偈答無盡意

汝聽觀音行 善應諸方所
弘誓深如海 歷劫不思議
侍多千億佛 發大清淨願
我爲汝略説 聞名及見身
心心不空過 能誦諸有苦
假使興害意 推落大火坑
念彼觀音刀 火坑變成池
或漂流巨海 龍魚諸鬼難
念彼觀音力 波浪不能沒
或在須彌峯 爲人所推墮
念彼觀音力 如日虛空住
或被惡人逐 墮落金剛山
念彼觀音力 不能損一毛
或值怨賊統 各執刀加害
念彼觀音力 咸即起慈心
或遭于難苦 臨刑欲壽終

佛子よ如何なる故ありて 視自在とは名けたる。

(二) 時しも廣き視智あり 海なす誓願ある無盡意は、

妙幢に對し語るらく 今しも視自在の行を開け。

(三) 多百不可思議の劫を経て 多千俱胝の佛に遇ひ、

かくの如きの願を立つ われ今説かむ汝聞け。

(四) わが名をば聞きまたは見て 常に心に念じなば、

空しく過ぐるごあらじ 一切の悲苦を消滅せむ。

(五) 若し惡人ありて殺害のため 火坑の中に推し落さむ、

觀自在菩薩を念すれば 水灌ぐごこく火は消ねむ。

(六) 人若し龍魚阿修羅住む 恐るべき海に陥らむ、

觀自在菩薩を念すれば 波浪も沈むることあらじ。

(七) 若し惡人ありて殺害のため 須彌の端より推し落さむ、

觀自在菩薩を念すれば 日の如くにして虚空にあり。

(八) 若し殺害のため金剛の 山嶽は頭上に落つるごも、

譯せるも
の又添品
長行の莊
嚴幢に當
る

念彼觀音力 刀尋段段壞
 或因禁枷鎖 手足被桎械
 念彼觀音力 釋然得解脫
 咒詛諸毒藥 所欲害身者
 念彼觀音力 還著於本人
 或遇惡羅刹 毒龍諸鬼等
 念彼觀音力 時悉不敢害
 若惡獸圍繞 利牙爪可怖
 念彼觀音力 疾走無邊方
 坑蛇及蝮蠍 氣毒煙火然
 念彼觀音力 尋聲自回去
 雲雷鼓掣電 降雹澍大雨
 念彼觀音力 應時得消散
 衆生被困厄 無量苦逼身
 觀音妙智力 能救世間苦
 具足神通力 廣修智方便
 十方諸國土 無刹不現身
 種種諸惡趣 地獄鬼畜生
 生老病所苦 以漸悉令滅

- 觀自在菩薩を念すれば 一毛孔をすら傷けじ。
 (九) 若し害心ある怨賊の 武器を手にして圍むとも、
 觀自在菩薩を念すれば 忽ち慈心を起すべし。
 (一〇) 若し人刑場に臨みつゝ、 甌者の手中に渡らむも、
 觀自在菩薩を念すれば 刀杖段々に壞るべし。
 (一一) 若し人桎械鐵鎖にて 嚴しき縛しめを受ることも、
 觀自在菩薩を念すれば 速かにこれを解脫せむ。
 (一二) 駭ある咒術と藥艸と 幽靈は身に迫らむも、
 觀自在菩薩を念すれば 却りてあなたに轉すべし。
 (一三) 若し毒精鬼藥又龍 阿修羅羅刹に圍まれむ、
 觀自在菩薩を念すれば 一毛孔をすら傷けじ。
 (一四) 銳き爪牙ある恐しき 猛獸に圍繞せらるゝも、
 觀自在菩薩を念すれば 速かに四方に逃げ去らむ。
 (一五) 炎火燃ゆ立ち恐るべき 毒蛇に圍繞せらるゝも、

原語の意 義明かな

眞觀清淨觀 廣大智慧觀
 悲觀及慈觀 常願常瞻仰
 無垢清淨光 慧日破諸闇
 能代災風火 普明照世間

- 觀自在菩薩を念すれば 忽ちその毒を失はむ。
 (一六) 雷電を含む雲間より 烈しき電光流れ出でむ、
 觀自在菩薩を念すれば 即時に消散すべきなり。
 (一七) 多百の苦惱を被れる 多苦の有情をみそなほし、
 淨智力者は觀智もて 人天世界の救主たり。
 (一八) 神通力を満足し 廣智方便を修得し、
 一切諸方諸世界に 國土にすべて身を現す。
 (一九) 地獄傍生夜魔世界 難處惡趣の諸有情の、
 生老病(死)の苦みは 次第に消滅すべきなり。
 *時に無盡意は歡喜し満足しこれらの伽陀を説て曰く、
 (二〇) 淨き眼、慈の眼 智慧ある殊勝の眼よ、
 悲の眼、清淨の眼 めでたき面容美しの眼。
 (二一) 無垢なる無垢なる清淨の光 暗なき智慧よ日の御光よ、

らず支那 譯及び英 譯による

此の一句 支那譯に 無し

悲觀戒雷震	慈意妙大雲
清甘露法雨	滅除煩惱礙
神訟經官處	怖畏軍陣中
念彼觀音力	衆怨悉退散
妙音觀世音	梵音海潮音
勝彼世間音	是故須常念
念念勿生疑	觀世音淨聖
於苦惱死厄	能爲作依怙
具一切功德	慈眼視衆生
福聚海無量	是故應頂禮

他にけをされぬ風火の光 世界を照し輝けり。
 (三) 悲あわれみの體みすがた 慈なごみの響 淨徳慈意大雲の如し、
 有情ひごとの煩惱なやみの火を消して 不滅ふめつの法雨を雨らす。
 (三) 諍訟しやうそうのために相闘あひあぎ あるは戦陣せんじんの危難きなんにも、
 親自在菩薩を念すれば 怨敵おんてきの群は滅ぶべし。
 (四) 雲の轟とどろき、太鼓の音 海潮かいしうの響なき、梵王ぼんおうの聲、
 音聲輪おんせいりんを満足まんじつせる 親自在菩薩を念すべし。
 (五) 念ねんせよ、念ねんせよ、疑ぎふなかれ 清淨しやうじやうの人親自在を、
 死しと災厄さいやくと危難きなんとの 救主きうしゆなり歸依きいなり畢竟じきやう依いなり。
 (六) 一切いっけつの功徳くんとくを満足まんじつし 慈悲じひもて一切いっけつ有情ひごとを視みす、
 功徳くんとくの體みすがた大功徳だいこんとくの海 親自在菩薩を頂禮ちやうらいせよ。
 (七) 世間よこしまを悲憐ひれんしたまひて 當來たうらいの世よに成佛ぶつじやうし、
 一切いっけつの苦難くなん悲ひを滅めつす われ親自在しんじざいに歸命きみやうせむ。
 (八) 世自在王しじざいおうを導師だうしとし 世よに供養くやうせられし法藏ほふざう比丘ひくしゆは、

*此の以下の七頌支那の三譯に缺けたリ極東未だこの部分の譯せられしを聞かず

爾時持地菩薩。即從座起。前白佛言。世尊。若有衆生。聞是觀世音菩薩品。自在之

多百劫波たひやくかつかを修行しゆぎやうして 無垢むこなる無上むじやう覺かくに達たつしたり。
 (九) 右みぎまた左ひだりに立ちたまひ 無量光むりやうくわう世尊せそんを煽ほぎつゝ、
 如幻にょくわん三昧さんまいの力ちからにて 一切いっけつ國土こくどに佛ぶつを供養くやうす。
 (一〇) 西方さいほうかしこに幸多さいたき 無垢むこなる樂らく有あ世界せかいあり、
 かしこに無量光むりやうくわう世尊せそんなる 有情ひごと調御てうご者は住すまみたまふ。
 (一一) 女人にょにんはそこに生なれねば 男女なんにょの情交じやうかうもたわて無し、
 かれら佛子ぶつしは化生けしやうして 無垢むこなる華藏けわざうに坐ませるなり。
 (一二) かの無量光むりやうくわう世尊せそんこそ 無垢むこ微妙みまうなる華藏けわざうの中に、
 師子座ししざの上に坐ましたまひ 娑羅王しらかわうのごとく輝かがやけり。
 (一三) 人中にんぢゆうの無上むじやう者ものよ三界さんがいに 世尊せそんに比ひすべきものあらじ。
 われその福聚ふくくわいを讚嘆さんたんし 速すみかに世尊せそんの如ごとくならむ。
 時に持地ぢぢ Dharmidhara 菩薩ぼさつ摩訶薩まかさつは座ざより起たち、一肩いっけんに
 上うへ着衣じやくいを被かり、右膝輪みぎひざりんを地ぢに着きけ、世尊せそんに向むかひて合掌がうしやうを傾かたげ、
 世尊せそんに白まをして曰いわく、『世尊せそんよ、有情ひごとこの親自在しんじざい菩薩ぼさつ摩訶薩まかさつの

業。普門示現神通力者。當知是人。功德不少。佛說是普門品時。衆中八萬四千衆生。皆發無等等。阿耨多羅三藐三菩提心。

普門品第二十四

五〇〇

法門品。觀自在菩薩摩訶薩の遊戲の示現なる普門品。即ち觀自在遊戲不思議を聞かば具足するところの善根劣少にあらざるべし』と。

時に世尊のこの普門品示現を説きたまひし間に、その會の中に八萬四千の衆生は無等々なる無上正等覺に於て發心せりき。

右聖妙法蓮華法門に於て普門品を名くる
觀自在遊戲示現第二十四

妙法蓮華經

莊嚴王本事品第二十七

爾時佛告諸大衆。乃往古世。過無量無邊。不可思議阿僧祇劫。有佛名雲雷音宿王華智。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。國名光明莊嚴。劫名喜見。彼佛法中有王。名妙莊嚴。其王夫人。名曰淨德。有二子。一名淨藏。二名淨眼。是二子有大神力。福德智慧。久修菩薩。所行之道。所謂檀波羅蜜。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毗梨耶波羅蜜。

淨莊嚴王本事品第二十五

時に世尊は一切の菩薩衆に告げて曰く、『善家男子よ、往昔過去の世、無數また無數の劫波の前、その時、その節、雲雷音聲星宿王華神通 Jaladharaṅgaṅgajāḥosusavaranaḥsataraḥṣaṅkusa-mitabhijña と名くる如來應供正等覺者世に出現したまへり。明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊にてまします。劫を愛見 Priyalarṣa と云ひ、世界を遍照光莊嚴 Vairocanaśmipratimandhā と云ふ。時に善家男子よ、その雲雷音聲星宿王華神通如來の國土 Pravaṇa に於て、淨莊嚴 bhavyā と名くる王ありき。また善家男子よ、その淨莊嚴王に離垢施 Vimalatā と名くる夫人あり。また善家男子よ、その淨莊嚴王に二王子あり、一を離垢藏 Vimalagarbha と名け、一を離垢眼 Vimalanetra と名く。この二王子神通を善くし、

禪波羅蜜、般若波羅蜜、方便波羅蜜、慈悲喜捨、乃至三十七品助道法、皆悉明了通達。又得菩薩淨三昧、日星宿三昧、淨光三昧、淨色三昧、淨照明三昧、長莊嚴三昧、大威德藏三昧、於此三昧、亦悉通達。爾時彼佛、欲引導妙莊嚴王、及愍念衆生故、說是法華經。時淨藏淨眼二子、到其母所、合十指爪、掌白言、願母往詣雲雷音宿王華智佛所。我等亦當侍從親近、供養禮拜。所以者何。此佛於一切天

智慧を有し、福德ありて、聰明に、菩薩の行を修したりき。即ち、布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、靜慮波羅蜜、方便善巧波羅蜜を修し、慈悲喜捨、乃至三十七の助道法に於て一切通達せりき。(また離垢 Vimala 三昧に通達し、星宿王日 Nakṣatrārājāditya 三昧に通達し、離垢光 Vimalanirbhāsa 三昧に通達し、離垢光 Vimalabhāsa 三昧に通達し、莊嚴淨 āṅkaraśubha 三昧に通達し、大光焰藏 Mahātījogarbha 三昧に通達せり。時にかの世尊は、その時、その節、かれら諸有情を哀愍し、またかの淨莊嚴王を哀愍して、この妙法蓮華の法門を説きたまひたりき。時に善家男子よ、離垢藏童子と離垢眼童子とは己れが所生の母に往き、往きて十爪合掌を傾けて母に白して曰く、「母よ、われらはかの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者の前に、かの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者を拜見のため、禮拜のため、供養のため

入衆中。說法華經。宜應聽受。母告子言。汝父信受外道。深著婆羅門法。汝等應往白父。與共俱去。淨藏淨眼。合十指爪。掌白母。我等是法王子。而生此邪見家。母告子言。汝等當憂念汝父。爲現神變。若得見者。心必清淨。或聽我等。往至佛所。

に、行くべきなり。その故は如何。母よ世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者は天を含める世界の前に、妙法蓮華と名くる法門を廣説したまへり。われらはこれを聞かんがために行くべきなり」と。善家男子よ、かくの如く語られて、離垢施夫人は離垢藏童子と離垢眼童子に告げて曰く、「善家男子よ、汝等の父なる淨莊嚴王は婆羅門を信せるがゆゑに、汝等のかの如來を拜見のために行くことを得べからず」と。善家男子よ、時に離垢藏童子と離垢眼童子は十爪合掌を傾けて己れが所生の母に白して曰く、「われら邪見の家族に生れたりといへど、もまた法王子なり」と。善家男子よ、時に離垢施夫人は二子に告げて曰く、「善きかな、善きかな、善家男子よ、汝等の父なる淨莊嚴王の哀愍のため、若干の神變を現すべし。さすれば汝等の前に信心歡喜の念をなし、かの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正

於是二子念其父故。踊左虛空。高七多羅樹。現種種神變。於虛空中。行住坐臥。身上出水。身下出火。身下出水。身上出火。或現大身。滿虛空中。而復現小。小復現大。於空中滅。忽然在地。入地如水。履水如地。現如是等。種種神變。令其父王。心淨信解。時父見子。神力如是。心大歡喜。得未曾有。合掌向子言。汝等師爲是誰。誰之弟子。二子白言。大王。彼雲雷音

等覺者の前に行くことを許すべきなり」と。『善家男子よ、時に離垢藏童子と離垢眼童子はその時しも虚空の中に七多羅樹量を昇騰して、かの父王淨莊嚴の哀愍のために、相並んで佛の所知なる神變を作せりき。かれらは虚空の中にありて牀座を設け、また虚空の中を歩行しまた虚空の中に塵を擧げ、また虚空の中に身下より水を出し、身上より火を耀かし、身上より水を出し、身下より火を耀かし、また虚空の中に大身となり、小身となり、小身となり、大身となり、また虚空の中に没して地上に湧出し、地上に湧出し虚空に湧出せり。善家男子よ、かくの如き神通神變を以てかの二童子はかの父王淨莊嚴を導きたり。善家男子よ、時にかの淨莊嚴王は二王子の神變神通を見て、満足し、歡喜し、慶喜し、隨喜し、喜悅の心を生じて、十爪合掌を傾け、二王子に向ひて曰く、「善家男子よ、汝等の師は誰にして、汝は誰の

宿王華智佛。今在七寶菩提樹下。法座上坐。於一切世間。天人衆中。廣說法華經。是我等師。我是弟子。父語子言。我今亦欲。見汝等師。可共俱往。

於是二子。從空中下。到其母所。合掌白母。父王今已信解。堪任發阿耨多羅三藐三菩提心。我等爲父。已作佛事。願母見聽。於彼佛所。出家修道。

弟子なるや」と。善家男子よ、時に二王子はかの淨莊嚴王に白して曰く、「大王よ、そはかの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者なり。現に住し、留り、保ち、諸寶合成の寶樹の下、法師子座に坐し、天を含める世界の前に、妙法蓮華と名くる法門を廣説したまへり。大王よ、かの世尊はわれらの師にして、われらはその弟子なり」と。善家男子よ、時にかの淨莊嚴王は二王子に告げて曰く、「善家男子よ、われらは汝等の師を見るべし。われらはかの世尊の前に行くべきなり」と。『善家男子よ、時に二王子は虚空より下りて、己れが所生の母に往き、往きて十爪合掌を傾けて、己れが所生の母に白して曰く、「母よ、われら父を無上なる正等覺に導き、われらは父の師たる務をなしたり。今やわれらは出で、かの世尊の前に修道するを得べきなり」と。

爾時二子欲重宣其意以偈白母。

願母放我等 出家作沙門
諸佛甚難值 我等隨佛學
如優曇波羅 值佛復難是
脫諸難亦難 願聽我出家

母即告言聽汝出家。所以者何。佛難值故。於是二子白父母言。善哉父母。願時往詣。雲雷音宿王華智佛所。親覲供養。所以

者何。佛難得值。如優曇波羅華。又如一眼之龜。值浮木孔。而我等宿福深厚。生值佛法。是故父母當聽我等。令得出家。所以者何。諸佛難值。時亦難遇。

彼時妙莊嚴王。後宮八萬四千人。皆悉堪任。受持是法華經。淨眼菩薩。於法華三昧。久已通達。淨藏菩薩。已於無量百千萬億劫。通達離諸惡趣三昧。欲令一切衆生。

「善家男子よ、時に離垢藏童子と離垢眼童子とは己れが所生の母に伽陀を説て曰く、

(一) 母よ出家の修行者に われらを送りたまへかし、
われらは道を修むべし 如來はまことに遇ひ難し。

(二) 優曇婆羅華の咲くよりも なほ遇ひ難きは如來なり、
修道を許したまへかし 幸ある時は遇ひ難し。

無垢施夫人の曰く、

(三) 今はおん身らを許すべし 善きかな行けよ二童子よ、
われらも道を修むべし 如來はまことに遇ひ難し。

「善家男子よ、時に二童子はこの伽陀を説きて、父母に白して曰く、「善きかな、母よ、父よ、われらはすべて共に行くべきなり。かの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者の前に、かの世尊を拜見のために、禮拜のために、供養のために、聞法のために往くべきなり。その故は如何。母よ、父よ、

佛の出現は甚だ遇ひ難し。優曇婆羅華の如く、大海の上に於て龜の靦穴くびきに首を入るゝが如し *Mahārāva-yuga-cchidra-kurū-griya pravasi-vat* 母よ、父よ、佛世尊の出現は遇ひ難し。母よ、父よ、されば今われらのかくの如き國土に生せしことは最上の福德をたもてるなり。希くは母よ、父よ、われらを許してかの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者の前に行きて道を修せしめよ、その故は如何。母よ、父よ、如來は拜見し難し。今しも時は得難し。かくの如き法王、かくの如き幸ある時はまことに得難きなり」と。

「善家男子よ、またその時にかの淨莊嚴王の後宮より八萬四千の姪女はかの妙法蓮華の法門を受持するに堪へたりき。無垢眼童子は、この法門に於て修行をなし、無垢藏童子は多俱胝尼由他百千劫の間、如何にして一切有情は一切惡趣を離るべきかにつき、離一切有情惡趣三昧を行じたりき。

離諸惡趣故。其王夫人得諸佛集三昧。能知諸佛秘密之藏。二子如是。以方便力。善化其父。令心信解。好樂佛法。於是妙莊嚴王。與群臣眷屬俱。淨德夫人。與後宮采女眷屬俱。其王二子。與四萬二千人俱。一時共詣佛所。到已。頭面禮足。繞佛三匝。却住一面。

爾時彼佛。爲王說法。示教利喜。王大歡悅。爾時妙莊嚴王。及其夫人。將親真珠璣璐。價直百千。以散佛上。於虛空中。化成四柱。寶臺。臺中有大寶牀。數百千萬天衣。其上。有佛。結跏趺坐。放

大光明。爾時妙莊嚴王。作是念。佛身希有。端嚴殊特。成就第一微妙之色。時雲雷音宿王華智佛。告四衆言。汝等見是妙莊嚴王。於我前合掌立不。此王於我法中。作比丘。精勤修習。助佛道法。當得作佛。號婆羅樹王。國名大光。劫名大高王。其婆羅樹王。佛。有無量菩薩衆。及無量聲聞。其國平正。功德如是。其王即時。以國付弟。王與夫人二子。并諸眷屬。於佛法中。出家修道。王出家已。於八萬四千歲。常勤精進。修行妙法。華經。過是已後。得一淨功。德莊嚴三昧。即昇虛空。高七多羅樹。而白佛言。世尊。此我二子。已作佛事。以

また二童子の母なる無垢施夫人は一切諸佛の要集 *saṃgati* と一切佛法の秘密義を知れりき。善家男子よ時に淨莊嚴王は二童子のために如來の教に引導せられ、化益せられ、調熟せられ、一切の群臣に圍繞せられ、またかの無垢施夫人は一切の姪女に圍繞せられ、またかの淨莊嚴王の子なる二童子は四萬二千の衆と俱に、後宮宰官を合せて、すべて共に、雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者に往詣し、往詣して、世尊の兩足を頭を以て禮し、三たび世尊を右に繞りて、一面に立ちたりき。

『善家男子よ、時に世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者は淨莊嚴王の眷屬と共に來詣せるを知しめして、法話を示し、導き、勵まし、喜ばしめたまへり。善家男子よ、時に淨莊嚴王は世尊の法話によりて頗る善く、教へられ、導かれ、勵まされ、喜ばしめられ、時しも満足し、歡喜し、慶喜し、隨喜し、

喜悅の心を生じ、弟に繒衣の冠を着せ、王位に立たしめ、王子群臣眷屬をはじめ、無垢施夫人と一切の姪女眷屬、及び四萬二千人と俱なるかの二王子、すべて共に、かの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者の所説に於て、信を以て家より出で、道を修したり。かの淨莊嚴王は眷屬と共に道を修して、八萬四千年の間修行をなし、この妙法蓮華の法門を思念し、勉勵し、知悉したり。善家男子よ、時に淨莊嚴王は八萬四千年の觀念によりて一切功德嚴飾莊嚴 *Sarvaṅgulāṅka* *ravyūha* と名くる三昧を得たりき。この三昧を得るや否や、虚空の中に七多羅 *ṣaṭ* の量を昇騰せりき。善家男子よ、時に淨莊嚴王は虚空の中に立ちて、世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者に白して曰く、「世尊よ、わがこの二子はわが師主なり。その神通神變によりて、われを大邪見より轉せしめ、如來の教に於て安立せしめ、調熟せしめ、化益

神通變化。轉我邪心。令得安住。於佛法中。得見世尊。此二子者。是我善知識。爲欲發起。宿世善根。饒益我故。來生我家。

爾時雲雷音宿王華智佛。告妙莊嚴王言。如是。如是。如汝所言。若善男子。善女人。種善根故。世世得善知識。其善知識。能作佛事。示教利喜。令入阿耨多羅三藐三菩提。大王。當知。善知識者。是六因緣。所謂化導。令得見佛。發阿耨多羅三藐三菩提心。大王汝見。此二子不。此二子。已曾供養。六十五百千萬億。那由他。恒河沙諸佛。親近恭敬。於諸佛所。受持

し、如來の拜見を促したり。世尊よ、わがこの二童子は宿世の善根を想念せしめんがために童子の色身を以てわが家に生せし善知識なり」と。

かくの如く語られて、世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者は淨莊嚴王に告げて曰く、「然り、然り、大王よ、汝が云ふところの如し。大王よ、善根を植わたる善家男子若くは善家女子は一切の生趣死趣の處に生じて容易に善知識を得べし。善知識よく師主の務によりて安立し無上なる正等覺に於て、教へ、導き、調熟せしむ。大王よ、如來拜見に導く善知識の攝受、この義廣大なり。大王よ、汝は二童子を見るや。」曰く、「世尊よ、われこれを見る。善逝よ、われこれを見る。」世尊の曰く、「大王よ、この二人の善家男子は、六十五恒河沙に等しき如來應供正等覺者の前に於て供養をなし、有情を哀愍して邪見の有情を正見とならしむることに

法華經。惡念邪見衆生。令住正見。

妙莊嚴王。即從虛空中下。而白佛言。世尊。如來甚希有。以功德智慧故。頂上肉髻。光明顯照。其眼長廣。而紺青色。眉間毫相。白如珂月。齒白齊密。常有光明。唇色赤好。如頻婆果。

爾時妙莊嚴王。讚歎佛如是等。無量百千萬億功德已。於如來前。一心合掌。復白佛言。世尊。未曾有也。如來之法。具足成就。

精進せんがために、この妙法蓮華の法門を受持すべきなり」と。

『善家男子よ、時に淨莊嚴王は虚空より下りて、十爪合掌を傾け、世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者に白して曰く、「世尊よ、如來應供正等覺者は頂上の肉髻輝き、眼淨らかなり。世尊の眉間の毫輪は輝き、齒列は齊整に、白淨の光ありて月、輝の如く輝き、また世尊には頻婆 *binba* の唇あり。善逝には殊勝なる眼あり如何なる智慧を具足してかよくかくの如くなるを得たるや。希くは世尊これを示したまへ」と。

『善家男子よ、時に淨莊嚴王はかくの如き功德を以てかの世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者を讚嘆し、またその他俱胝尼由他百千の功德を以てかの世尊を讚嘆し、その時世尊雲雷音聲星宿王華神通如來應供正等覺者に白

不可思議。微妙功德。
救戒所行。安穩快善。
我從今日。不復自隨。
心行。不生邪見。憍慢
瞋恚。諸惡之心。說是
語已。禮佛而出。

して曰く、「世尊よ、未曾有なるかな、如來の教は大利益あり。如來の説きたまひし法戒 Dharmavinaya は不思議の功德を具足せり。如來の學は妙に施設せり。世尊よ、今より後、もはや心欲の奴隸とはならざるべし。もはや邪見の奴隸とならざるべし。もはや瞋恚の奴隸とならざるべし。もはや惡趣の發心の奴隸とならざるべし。世尊よ、われこれら多くの善法を具足して、世尊の前を去るを欲せざるなり」と。

「かれは世尊雲雷音聲星宿王神通如來應供正等覺者の兩足を頭を以て禮し虚空の中に昇りて立てりき。時に淨莊嚴王と離垢施夫人は虚空の中より百千金に値する眞珠の瓔珞を世尊に投げたりき。投げしや否や、その眞珠の瓔珞は世尊の頭上に於て眞珠瓔珞の樓閣となりて立てり。四方に四柱を分ち、正等にして見るに堪へたり。またその樓閣に牀座出現せり。多百千の繒衣 *śūdrā* を以て覆ひたり。その牀座の上に結跏趺坐せる如來の身像出現せりき。時に淨莊嚴王は心中に思へりき、「佛の智慧には大なる威力あり。また如來は不思議功德を具足せり。實にこの樓閣の中に出現せる如來の身像の如き、愛すべく、見るべく、最上蓮華の淨色を具足せり」と。

佛告大衆。於意云何。妙莊嚴王。豈異人乎。今華德菩薩是。其淨德夫人。今佛前光照。莊嚴相菩薩是。哀愍妙莊嚴王。及諸眷屬。故於彼中生。其二子者。今藥王菩薩。藥上菩薩。是。藥王藥上菩薩。成就如此。諸大功德。已於無量百

「時に世尊雲雷音聲星宿王華神通如來は四會の衆に告げて曰く、「比丘衆よ、汝等は虚空の中に立ち、師子吼せる淨莊嚴王を見るや」。曰く、「見たり」。曰く、「比丘衆よ、この淨莊嚴王はわが教によりて比丘の身となり、世間に於て娑羅樹王 *Salandarāja* と名くる如來應供正等覺者となるべし。明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊たらむ。世界を廣有 *Vishuvati* の *ニ*、*ハ*、*ヒ*、*切* を高出王 *Abhyudgata* の *ニ*、*ハ*、*ヒ*、*切* 比丘衆よ、時に娑羅樹王如來應供正等覺者に無量の菩薩衆

千萬億諸佛所。植衆
德本。成就不可思議。
諸善功德。若有人識。
是二菩薩名字者。一
切世間。諸天人民。亦
應禮拜。

と無量の聲聞衆あらむ。その廣有世界齊平にして手掌の
如く琉璃を以て合成せり。時に善家男子よ、その時、その節、
他の淨莊嚴王と名くる王ありしとの疑惑、躊躇、猶豫は汝等
にあらむ。善家男子よ、されどかくの如きの觀をなすなか
れ。その故は如何。かの蓮華德 Padmasi 菩薩摩訶薩こそ、そ
の時、その節、淨莊嚴と名くる王なりしなれ。善家男子よ、ま
たその時、その節、他の離垢施夫人と名くる夫人ありしとの
疑惑、躊躇、猶豫は汝等にあらむ。善家男子よ、されどかくの
如きの觀をなすなかれ。その故は如何。この遍照光莊嚴
幢王 Vairocanaśāṃpratiṃdītaḥvajraja と名くる菩薩摩訶薩
こそ、その時、その節、離垢施と名くる夫人にして、淨莊嚴王と
かれら有情を哀愍し、淨莊嚴王の夫人となりて出現せしな
れ。善家男子よ、またその時、その節、他の二童子ありしとの
疑惑、躊躇、猶豫は汝等にあらむ。善家男子よ、されどかくの

佛說是妙莊嚴王。
本事品時。八萬四千
人。遠塵離垢。於諸法
中。得法眼淨。

如きの觀をなすなかれ。その故は如何。この藥王 Bhaisajy-
ajaraja と藥王 Bhaisajyasamudgata はその時、その節、淨莊嚴王の
二王子なりしなり。善家男子よ、藥王と藥上の二の菩薩摩
訶薩はかくの如き不思議の功德を具足し、多俱胝尼由他百
千の諸佛の下に善根を植む、共に正士にして不思議の法を
具足せり。この正士の名號を受持するかれら一切は天を
含める世界に禮敬せらるべきなり』と。

時にこの本事品の説かれし時、八萬四千の衆生は離塵離
垢となり、諸法に於て法眼清淨となりき。

右聖妙法蓮華の法門に於て淨莊嚴王本事品第二十五

妙法蓮華經

普賢菩薩勸發品第二十七

爾時普賢菩薩。以自在神通力。威德名聞。與大菩薩。無量無邊。不可稱數。從東方來。所經諸國。普皆震動。雨寶蓮華。作無量百千萬億。種種伎樂。又與無數諸天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。大眾圍繞。各現威德。神通之力。到娑婆世界。耆闍崛山中。頭面禮釋迦牟尼佛。右繞七匝。白佛言。世尊。我於寶威

普賢菩薩勸發品第二十六

時に普賢 Samantabhadra 菩薩摩訶薩は東方に於て數量を超わたる菩薩摩訶薩に前後を圍繞せられ、國土を震動せしめ蓮華を雨らせ、俱胝尼由他百千の樂器を奏しつゝ、大なる菩薩の威神、大なる菩薩の遊戲、大なる菩薩の神通、大なる菩薩の禪定、大なる菩薩の大身、大なる菩薩の三昧、大なる菩薩の威力、光熾、大なる菩薩乘、大なる菩薩の神變、大なる天龍、樂又、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人(の群)に前後を圍繞せられたり。かくの如き不思議の神通神變によりて、普賢菩薩摩訶薩はこの娑婆世界に達したり。かれは山王なる耆闍崛の方、世尊に往詣し、往詣して世尊の兩足を頭を以て禮し、七たび世尊を右に繞りて世尊に白して曰く、『世尊よ、われ世尊寶威德上王 Ratnadejo bhryudgataraja 如來の佛國

德上王佛國。遙聞此娑婆世界。說法華經。與無量無邊。百千萬億。諸菩薩衆。共來聽受。唯願世尊。當爲說之。若善男子。善女人。於如來滅後。云何能得。是法華經。佛告普賢菩薩。若善男子。善女人。成就四法。於如來滅後。當得是法華經。一者爲諸佛護念。二者植諸德本。三者入正定聚。四者發救一切衆生之心。善男子。善女人。如是成就四法。於如來滅後。必得是經。

より此に來れり。世尊よ、こゝに娑婆世界に於て、この妙法蓮華の法門は説き示されたり。われはそれを聞かんがために世尊釋迦牟尼如來の前に來れり。また世尊よ、かくの如き百千の菩薩もこの妙法蓮華の法門を聞かんがために來れるなり。希くは世尊如來應供正等覺者よ、菩薩摩訶薩のために廣くこの妙法蓮華の法門を示したまへ』と。かくの如く語られて、世尊は普賢菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、これらの菩薩摩訶薩は實に聰敏なり。されどまたこの妙法蓮華の法門は獨歩 asambhina の眞理なり』と。かれら菩薩の曰く、『世尊よ、かくの如し、善逝よ、かくの如し』と。時に世尊はその會に於て集まれる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をこの妙法蓮華の法門に於て安立せしめんがために、また普賢菩薩摩訶薩に告げて曰く、『善家男子よ、この妙法蓮華の法門は若し四法を具足せる女人あらばこ

れを授くべし。何等をか四となす。曰く、佛世尊によりて安立すべし。善根を植うべし。正定聚に住すべし。一切有情を救済のために、無上なる正等覺に於て發心すべし。善家男子よ、この四法を具足せる女人はこの妙法蓮華の法門を授くべきなり」と。

時に普賢菩薩摩訶薩は世尊に白して曰く、『世尊よ、われ滅後の時、滅後の節、滅後五百(年)轉現に當り、かくの如き經典を受持する比丘に對し守護をなし、安寧ならしめ、刀杖を避けしめ、毒を滅せしむべきなり。かれらの法師に對し、如何なるものも、便を伺ひ、便を求め、便を得ざるべし。魔波旬も便を伺ひ、便を求め、便を得ざるべし。魔の子、魔に屬する天子、魔女、魔の眷屬、乃至魔に従屬せるもの、類ひ、また天子、又、餓鬼、富單那 Pitana 吉蔗 Kṛya 韋陀羅 Vetada はかれらの法師に對し、便を伺ひ、便を求め、便を得ざるべし。世尊よ、わ

爾時普賢菩薩。白佛言。世尊。於後五百歲。濁惡世中。其有受持。是經典者。我當守護。除其衰患。令得安穩。使無伺求。得其便者。若覓。若覓子。若覓女。若覓民。若爲覓所著者。若夜叉。若羅刹。若鳩槃荼。若毗舍闍。若吉蔗。若富單那。若韋陀羅等。諸惱人者。

皆不得便。是人若行若立。讀誦此經。我爾時乘。六牙白象王。與大菩薩衆。俱詣其所。而自現身。供養守護。安慰其心。亦爲供養。法華經故。是人若坐。思惟此經。爾時我復乘白象王。現其人前。其人若於法華經。有所忘失。一句一偈。我當教之。與共讀誦。還令通利。爾時受持。讀誦法華經者。得見我身。甚大歡喜。轉復精進。以見我故。卽得三昧。及陀羅尼。名爲旋陀羅尼。百千萬億。旋陀羅尼。法音方便。陀羅尼。得如是等陀羅尼。

れ常恒不斷にこの法師に守護をなすべし。世尊よ、かの法師のこの法門に於て思修をなし、步行、乘載するところ、その時、われこの法師の前に、六牙の白象王に駕して菩薩の衆に圍繞せられ、法門守護のために、かの法師の歩行のところに往詣すべきなり。またかの法師のこの法門に於て思修をなし、同じくこの法門より乃至一句の文をだにも忘れたらむに、その時われ六牙の白象王に駕して、この法師の前に現じ、全分の法門を想起せしむべし。またかの法師はわが身を見、わが前に全分の法門を聞き、満足し、歡喜し、慶喜し、隨喜し、喜悅の心を生じて、尙多くの量を以てこの法門に勉勵すべし。またわれを見ると共に三昧を得べく、旋陀羅尼 Dhāraṇīyavartā を名くる陀羅尼を得べく、旋俱胝百千 Kotikāṭa-zahasāvartā を名くる陀羅尼を得べく、旋一切音聲善巧 Karv-arūṭa-kauśalyavartā を名くる陀羅尼を得べし。

世尊。若後世。後五百歲。濁惡世中。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。求索者。受持者。讀誦者。書寫者。欲修習是法華經。於三七日中。應一心精進。滿三七日已。我當乘六牙白象。與無量菩薩。而自圍繞。以一切衆生。所喜見身。現其人前。而爲說法。示教利喜。亦復與其。陀羅尼呪。得是陀羅尼故。無有非人。能破壞者。亦不爲女人。之所惑亂。我身亦自。常護是人。唯願世尊。聽我說此陀羅尼。

曰 卽於佛前。而說呪
阿檀地檀陀婆地檀
陀婆帝檀陀鳩除隸
檀陀修陀隸修陀隸
修陀羅婆底佛駄波
檀羅薩婆陀羅尼阿
婆多尼薩婆婆沙阿
婆多尼修阿婆多尼
僧伽婆履叉尼僧伽
涅伽陀尼阿僧祇僧
伽波伽地帝隸阿僧
伽波兜略阿羅帝波
羅伽薩婆僧伽三摩
地伽蘭地薩婆達磨
修波利利帝薩婆薩
埵樓駄橋舍略阿窳
伽地辛阿毗吉利地
帝尊。若有菩薩。得聞
是陀羅尼者。當知普
賢。神通之力。
若法華羅。行闍浮

「また世尊よ、滅後の時、滅後の節、滅後五百年の轉現するに當り、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷ありてかくの如きの經典を受持し、かくの如きの經典を書寫し、かくの如きの經典を求め、かくの如きの經典を説かんに、滅後の時、滅後の節、滅後五百年に當り、この法門に於て修行すること三週、二十一日の間ならむ。歩行乗載せんに、われ一切有情愛見の身を現すべし。かの六牙の白象王に駕し、菩薩の衆に圍繞せられ、第二十一日に於て、かの歩行せる法師に近づき、近づきてかれら法師を歡喜せしめ、引導し、督勵し、利益せしむべし。また陀羅尼を與ふべし。即ちかれら法師は如何なるものにも害せられざるべし。また如何なる人若くは非人も便を得ざるべし。また如何なる女人もこれを誘惑し得ざるべし。われはかれらの守護をなし、安寧ならしめ、刀杖を避けしめ、毒を滅せしむべきなり。また世尊よ、われはかれら

法師にこの陀羅尼句を與ふべし。曰く、

「アダンデー、ダ、ンダバテイ、ダンダー、ウルタニ、タンダクシャ
レー、ダンダスド、ハーリ、スド、ハーリ、スド、ハーラ、パテイ、ブド、ハバシ
ヤチー、ド、ハーラニ、アー、ウルタニ、サン、ウルタニ、サン、グ、ハバ
ー、クシ、テ、サン、グ、ハニ、ル、グ、ハー、タニ、ド、ハ、ル、マ、バ、リ、ク、シ、テ、
サル、ワ、サ、ット、ウル、タ、カ、ー、ウ、シ、ヤ、ル、ヤ、ー、ス、ガ、テ、ー、シ、ン、ハ、
ク、リ、ー、デ、イ、テ、ー、ア、ス、ヴ、ル、テ、ー、ヴ、ル、タ、ニ、ヴ、ル、タ、ー、リ、ス、ヴ、
ー、」
Adande dandapati dandavartani dandakusale dandasudhari sudhari
sudharapati buddhapaśyane dhāraṇi āvartani saṅvartani saṅghapari-
kṣite saṅghanigḥātani dharmaparikṣite sarvasattvarutakansalyāṅgate
sīṅhavikrīḍite anuvarte vartani vartali svāhā 世尊よ、これらの陀羅
尼句菩薩摩訶薩の耳根に達すれば、普賢菩薩摩訶薩の加持
力なりと知るべきなり。

世尊よ、またこの妙法蓮華の法門はこの闍浮提に流行す

提。有受持者。應作此念。皆是普賢威神之力。若有受持讀誦。正憶念。解其義趣。如說修行。當知是人。行普賢行。於無量無邊諸佛所。深種善根。爲諸如來。手摩其頭。若但書寫。是人命終。當生忉利天上。是時八萬四千天女。作衆伎樂。而來迎之。其人卽著七寶冠。於采女中。娛樂快樂。何況受持讀誦。正憶念。解其義趣。如說修行。若有人受持讀誦。解其義趣。是人命終。爲千佛授手。令不恐怖。不墮惡趣。

卽往兜率天上。彌勒菩薩所。彌勒菩薩。有三十二相。大菩薩衆。所共圍繞。有百千萬億。天女眷屬。而於中生。有如是等。功德利益。是故智者。應當一心自書。若使人書。受持讀誦。正憶念。如說修行。世尊。我今以神通力故。守護是經。於如來滅後。闍浮提內。廣令流布。使不斷絕。

る限り、かれら菩薩摩訶薩に授けらるべきなり。世尊よ、かれら法師はかくの如くの觀をなすべし。「普賢菩薩摩訶薩の威神によりて、また普賢菩薩摩訶薩の威德によりて、この法門はわれらに授けられたり」と。世尊よ、かれら有情は多くの普賢菩薩摩訶薩の行を得べし。またかれら有情は多くの諸佛のもとに善根を植うべし。世尊よ、またかれら有情は如來手を以てその頂を摩でたまふべし。世尊よ、この經典を書寫しその義を解するものはこの經を書寫せし後、死して三十三天の會上に生ずべし。生ずるや否や八萬四千の天女はその傍に来るべし。無價の寶冠をつけ、天子たるかれらは天女の中央に座すべし。善家男子、かくの如きはこれこの法門を書寫して得る福徳聚なり。如何に況んや説示し、讀誦し、思念し、作意せんをや。善家男子よ、さればこの妙法蓮華の法門は恭敬を以て、全力を注ぎて書寫せらるべ

きなり。また不散亂の作意を以て書寫するものは千佛は手を授くべし。またその臨終の時、千佛面たり現じたまふべし。また惡趣に墮在することなかるべし。死して後、彌勒 Maitreya 菩薩摩訶薩の住める兜率天の會上に、生れ、三十二相あり、菩薩衆に圍繞せられ、俱胝尼由他百千の天女を從へて法を説くべし。善家男子よ、されば賢者なる善家男子もしくは善家女子によりてこの妙法蓮華の法門は恭敬をもつて書寫し、恭敬を以て説示し、恭敬を以て讀誦し、恭敬をもつて作意せらるべきなり。善家男子よ、この法門を書寫し、説示し、讀誦し、保護し、作意すればかくの如き無量の功徳あるべきなり。世尊よ、されば今、賢者なる善家男子若くは善家女子はこの妙法蓮華の法門を受持すべし。かれらの功徳稱讚はかくの如く多かるべし。世尊よ、されば今、こゝにわれ亦わが加持力によりてこの妙法蓮華の法門がこの

閻浮提に流行する如く、世尊よ、この法門を加持すべきなり」

爾時釋迦牟尼佛
讚言。善哉善哉。普賢
汝能護助是經。令多
所衆生。安樂利益。汝
已成就。不可思議功
德。深大悲悲。從久遠
來。發阿耨多羅三藐
三菩提意。而能作是
神通之願。守護是經。
我當以神通力。守護
能受持。普賢菩薩名
者。普賢若有受持讚
誦。正憶念。修習書寫
是法華經者。當知是
人。則見釋迦牟尼佛。
如從佛口。聞此經典。

其時、世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者は普賢菩薩摩訶薩
に善哉を唱へたまへり。『善きかな、善きかな、普賢よ、實に群
生の利のために、群生の樂のために、世間哀愍のために、大な
る生身の義利のために、樂のために、現在せる汝はかくの如
き不思議の法を具足し、大悲攝受によりて、信樂によりて、不
思議の攝受によりて、一念發起によりて、汝自らかれら法師
の加持をなす。若し普賢菩薩摩訶薩の名號を受持する善
家男子あらんに、かれらは釋迦牟尼如來を見、またこの妙法
蓮華の法門を世尊釋迦牟尼の前に聽聞し、釋迦牟尼如來を
供養し、釋迦牟尼如來の説法に善哉を唱へたりと知るべき
なり。またこの法門は隨喜せらるべく、釋迦牟尼如來は手
をその頂上に置くべく、世尊釋迦牟尼はかれらの衣を以て

釋迦に「
爲釋迦平
尼佛衣之
所覆」之
あり意義
異なる注
意すべし

當知是人。供養釋迦
牟尼佛。當知是人。佛
讚善哉。當知是人。爲
釋迦牟尼佛。手摩其
頭。當知是人。爲釋迦
牟尼佛。衣之所覆。如
是之人。不復貪著世
樂。不好外道。經書手
筆。亦復不喜。親近其
人。及諸惡者。若屠兒。
若畜豬羊雞狗。若獵
師。若街賣女色。是人
心意質直。有正憶念。
有福德力。是人不爲。
三毒所惱。亦不爲嫉
妬。我慢邪慢。增上慢。
所惱。是人少欲知足。
能修普賢之行。普賢
若如來滅後。後五百

覆はるべし。普賢よ、かれら善家男子若くは善家女子は如
來の命を攝受せりと知るべきなり。またかれらは順世外
道 Lokayata に着せらるべし。詩kavya に耽る有情を喜ばざ
るべし。舞踏をなすもの、輕業をなすもの、棒つかひ賣酒商
Saindika 羊商家禽商、養豚者、養狗者なる有情を喜ばざるべし。
かくの如き經典を聞き、書寫し、受持し、宣説すればかれらに
つきて餘の樂はあらざるべし。かれら有情は自性法を具
足せりと知るべきなり。かれらにつきて全く別異なる作
意はあるべきなり。かれら有情は自らの福德力を持ち、有
情はこれを見ることを喜ぶべし。經典を受持する比丘は
かくの如くなるべし。貪欲も、瞋恚も、愚癡も、嫉妬も、羨望も、
僞善も、憍慢も、貢高も、邪念もかれらを妨げざるべし。普賢
よ、かれら法師は自ら得しところを以て満足すべし。普賢
よ、滅後の時、滅後の節、滅後五百年轉現に當り、妙法蓮華の法

歳。若有人。見受持讀誦。法華經者。應作是念。此人不久。當詣道場。破諸魔衆。得阿耨多羅三藐三菩提。轉法輪。擊法鼓。吹法鬚。雨法雨。當坐天人大衆中。師子法座上。普賢。若於後世。受持讀誦。是經典者。是人。不復食著。衣服臥具。飲食資生之物。所願不處。亦於現世。得其福報。若有人。輕毀之。言。汝狂人耳。空作是行。終無所獲。如是罪報。當世世無眼。若有供養。讚嘆之者。當於今世。得現果報。若復見

門を受持することこの比丘を見たらんに、見てかくの如き念を發すべし。この善家男子は道場に行くべし。この善家男子は惡魔輪 *marakalikakra* に麻ち得べし、法輪を轉すべし、法鼓を擊つべし、法螺を吹くべし、法雨を雨らすべし、法師の師子座に上るべし。滅後の時、滅後の節、滅後五百年の轉現に當り、この法門を受持することこの比丘は貪慾なることなかるべし、衣服を貪ることなかるべし。かれら法師は正直なるべし。かれら法師は三解脱を得べきなり。また現在法はかれらの未來を轉すべし。かくの如き經典を受持する法師比丘に對し、苦難を與ふるものは生來盲目なるべし。またかくの如き經典を受持する比丘に對し、毀謗をなすものは現在身に斑點を生ずべし。またかくの如き經典を書寫するを蔑視し、耳語するものはその齒破るべく、またその齒の間離るべく、その唇惡むべく、その鼻穿たるべく、

受持。是經典者。出其過惡。若實若不實。此人現世。得白癩病。若有經笑之者。當世世。牙齒疎缺。醜鼻平鼻。手脚痿戾。眼角眇。身體臭穢。惡瘡膿血。水腹短氣。諸惡重病。是故普賢。若見受持。是經典者。當起遠迎。當如敬佛。

說是普賢勸發品時。恒河沙等。無量無邊菩薩。得百千萬億。旋陀羅尼。三千大千世界。微塵等。諸菩薩具普賢道。佛說是經時。普賢等。諸菩薩。舍利弗等。諸聲聞。及諸天龍。人非人等。一切大會。皆大歡喜。受持佛語。作禮而去。

その手足畸形となるべく、その兩眼畸形となるべく、その身に惡臭あるべく、その體に疽腫癰瘡散點すべきなり。またかくの如き經典を書寫するもの、經典を宣說するもの、經典を受持するもの、經典を說示するものに對し、眞意にもせよ眞意ならざるにもせよ、非愛語をなさんものは、尙一層の深き惡業ありと知るべきなり。普賢よ、さればこの法門を受持する比丘(の來る)に對しては、遠方よりその座を立つべきなり。如來の前に尊重をなすが如く、かれら法師なる比丘の前に尊重をなすべきなり』と。

時にこの普賢勸發品の說かれし時、恒河沙に等しき菩薩摩訶薩は、旋俱胝百千陀羅尼を得たりき。

右妙法蓮華法門に於て普賢勸發品第二十六

妙法蓮華經

屬累品第二十八

爾時釋迦牟尼佛。從法座起。現大神力。以右手摩。無量菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量。百千萬億。阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付屬汝等。汝等應當一心。流布此法。廣令增益。

如是三摩。諸菩薩摩訶薩。頂而作是言。我於無量。百千萬億。阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付屬汝等。汝等應當持讀誦。廣宣此法。令一切衆生。普得聞知。所以者何。如來有大慈悲。無諸慳慳。亦無所畏。能

屬累品第二十七

五二八

屬累品第二十七

其時世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者はその法座より起ち、一切の菩薩を集め、調熱せる大神通力を有する右手を以て、(菩薩)の右手を執り、これに告げて曰く、「善家男子よ、われ無數俱胝尼由他百千劫に成就せるこの無上なる正等覺を汝等の手に付屬し、付授し、提出し、提供す。善家男子よ、汝等はそが廣大に廣博ならんことを圖るべきなり」と。

世尊は二たびまで、また三たびまで、右手を以て一切菩薩衆を執りて曰く、「善家男子よ、われ無數俱胝尼由他百千劫に成就せるこの無上なる正等覺を汝等の手に付屬し、付授し、提出し、提供す。汝等は攝受し、受持し、宣説し、學習し、説し、廣説し、有情をして聞かしむべきなり。善家男子よ、我に執着なし、また貪婪の念なし、心清淨にして、佛智の施與者な

與衆生。佛之智慧。如來智慧。自然智慧。如來一切衆生之大。施主。汝等亦應隨學。如來之法。勿生慳慳。於未來世。若有善男子。善女人。信如來智慧者。當爲演説。此法華經。使得聞知。爲令其人。得佛慧故。若有衆生。不信受者。當於如來。餘深法中。示教利喜。汝等若能如是。則爲已報。諸佛之恩。

時諸菩薩摩訶薩。聞佛作是説已。皆大歡喜。徧滿其身。益加恭敬。曲躬低頭。合掌向佛。俱發聲言。如世尊救。當具奉行。唯然世尊。願不有慮。諸菩薩摩訶薩衆。如是三反。俱發聲言。如世尊

り、如來智、自存智の施與者なり。善家男子よ、われは大施主なり。善家男子よ、汝等も亦わがこの執着なくして、如來の智慧を示現するご、大なる方便善巧を學ぶべきなり。また近づき來れる善家男子善家女子に對しこの法門を聞かしまむべし。信するごころのかれら有情はこの法門に於て導かるべきなり。善家男子よ、汝等はかくの如く如來の報恩をなすべきなり。』

かくの如く世尊釋迦牟尼如來應供正等者によりて語られたるかれら菩薩摩訶薩は、大なる歡喜を示したり。而して大なる尊重を生じて世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者に向て、身を以て禮し、低首し、頓首して、頭を傾け、合掌をなし、一切同音聲に世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者に白して曰く、「世尊よ、われら如來の命じたまひし如く、なすべきなり。また一切の如來の命に従ひ、これを成滿すべきなり。世尊

屬累品第二十七

五二九

彼。當具奉行。唯然世
尊。願不有慮。

爾時釋迦牟尼佛
令十方來諸分身佛。
各還本土。而作是言。
諸佛各隨所安多寶
佛塔還可如故。

說是語時。十方無
量。分身諸佛。坐寶樹
下。師子座上者。及多
寶佛。井上行等。無邊

阿僧祇。菩薩大衆。舍
利弗等。聲聞四衆。及
一切世間。天人阿脩
羅等。聞佛所說。皆大
歡喜。

よ、憂ひたまふなかれ、こゝろやすくましますせ』と。かの一切
の菩薩衆は、二たびまでも、また三たびまでも、同音聲を以て、
かくの如く語れり。『憂ひたまふなかれ、こゝろやすくまし
ませ、世尊よ、われらは如來の命じたまひし如くなすべきな
り、また一切の如來の命に従ひ、これを成滿すべきなり』と。
時に、世尊釋迦牟尼如來應供正等覺者は餘の世界より來
集せる一切のかの如來應供正等覺者を去らしめたまひ、而
してかれら如來に對して平安を告げたまへりき。『如來應
供正等覺は安樂にましますせ』と。またかの多寶如來應供正
等覺者の塔を本地に還らしめたり。而してかの如來應供
正等覺者にも平安を告げたまへりき。
世尊は歡喜を以てこれを語りたまへり。他の世界より
來り、寶樹の下、師子座の上に坐せる無量無數の如來應供正
等覺者、多寶如來應供正等覺者、上行 Vajracārya を上首とせ

るか。一切の菩薩の衆、地より涌出せし無量無數の菩薩摩
訶薩、かれら大聲聞、かの四會の衆、天人、阿修羅、乾闥婆を含め
る世界は世尊の所説を歡喜せりき。

* 此下梵本
に異同あ
りて或は
種々經典
の尊稱を
列ね或は
經典を視
福するあ
り。或は
書寫の年
月を記載
せるあり

右聖妙法蓮華法門に於て第二十七品終

梵漢
對照
新譯
法華
經終

柳博士は曩に跋文の寄贈を
快諾せられしも、本書の發刊ま
でに、執筆せらるゝ暇なかりし
ため、これを掲ぐる能はざりし
は、切に遺憾とするところなり。

大正二年九月二十一日印刷
同年九月二十五日發行

定價金貳圓五拾錢

不	許
複	製

發行所
發賣所

京都府愛宕郡大宮村字小山
編輯者 真宗大谷大學尋源會出版部

右代表者 關根仁應

京都府下京區中珠數屋町烏丸東入二十八番町二十二番戶
發行兼印刷者 西村七兵衛

京都府愛宕郡大宮村字小山

真宗大谷大學尋源會出版部
電話上一六六九番

京都市東六條

法

藏館
電話下四五八番
大阪口座一七〇四番

324
357

終